

五ノ X-26

78-98



十九世紀末年史

東京文明協會刊行叢書

第 22 卷

明治
43.11.15
購求

例言

一本史は米國エリザベス・ウォーム・レ・ラティマー女史の著者十九世紀歴史叢書の一編にして、録する所は紀末十年間の事實に係り他編に接續する者なり。故に事實の之と關聯する者に至りては、他編を參照するにあらざれば曲折を解する能はざる處亦少からず。然るに適本編を除くの外舶載せる者なく、又之を注文するの暇もなかりし爲め、彼此參考の便を缺き往々隔靴の感あるを免れず。讀者願はくは焉を諒せよ。

一ラティマー女史は其史料を新聞紙雜誌及び自己が佛國に於て見聞せし事實に取り、引用書の如きは甚だ多からず。これ叙する所の時代輒近に屬し、歴史の成書に乏しさが爲めなり。夫れ材料の雜駁なる著者が蒐輯に力を費し、剪裁に心を勞せしは言を待たざれども、其成書に據らざるの結果、湊合の痕跡未だ滅びず。事實の關係或は絶え或は續き、前後を通覽して初めて要領を得べき者あり。例へばドレノー事件の如し、之が爲め特に一章を設くると雖、其黜罰の光景は

例

百

(1)

前章に在り、裁判の影響は後章に在り、他國の篇中に間見錯出する處亦一にして足らず、これ此書を繙く者の先づ知らざるべからざる所なり。

一初め譯者は小注を省略すべき打算なりしも、且つ讀み且つ譯するに及び、多くは本文と連絡を有し、一概に割裂するの不可なる事を發見せり。蓋し小注の性質は本文の補遺あり、説明あり、参考あり、憑據あり、重複せる者あり、抄約せる者あり、後の二種は繁を避けて割愛に附せしと雖、前の三種は極めて不必要に屬する者の外大抵之を譯出せしかば、自ら時日の遷延と簡編の浩漭とを致せしなり。而して小注の中には異聞奇談頗る多く、本文と相待つて歴史上の真相を窺ふべきが故に、其小注なるを以て輕々看過せざらんことを要す。

一翻譯の要は離即の間に在り、即くの極は原文に拘泥し、彼我の文字を換ふるに過ぎず。語格の同じからざる、人をして領會に苦ましむるの恐あり、離るゝの極は旁徑に趨りて一往返らず、原意を失ひ譯述の本體を誤るの憂あり。然れども二者亦原書の性質に従つて自ら其程度あり、文學の書を譯するに至りては一字一句苟もせず、神貌兩つながら全きを要するも、歴史の如き主とするところ

事實に在るが故に、如何に原文の歩武を趁ひ格調を寫すにせよ、讀者をして事實を捕捉せしむる能はざれば何の効か之あらん。況や歴史の文字必ず皆金玉ならざるをや、これ故に大意を妨げざる限り、或は主客の順逆し、或は語勢を顛倒し、句を補ひて意を足せる所あり、字を改めて義を示せし所あり、雅馴に移めて流暢に、以て邦人の肺腑に入り易からしめんことを期せり。然れども原文の錯綜せる處、難澁なる處に至りては、なほ大斧一割の勇なく、首を顧み尾を畏れ、換骨奪胎の手段に出づる能はず、依彷彿の痕跡歴然たるが如きは、譯者の深く恨とする所なり。

一文體は通俗にして堅實なるを主とし、語格假名遣ひに至りても、因りてとあるべきを、因つてとなし、ししとあるべきを、せしとなす等必ず所謂國文法に従はず、其口に上り易きを取れるなり。

一原語の已に國語同様に使用せられ若しくは説明を待たずして理解することを得べき者は、強て譯語を填せず、原語を其儘に之を存せり。

明治四十三年四月

譯者 松平康國識

目 次

第一編 佛蘭西

第一章 大統領サードイ・カルノ……………一——三七

第二章 大統領カシミール・ペリエ……………三八——五八

第三章 大統領フリュククス・フォール……………五九——八二

第四章 ドレフノー罪案……………八三——一三一

第五章 大統領エミール・ルルーベ……………一三二——一五八

第二編 露西亞及び土耳其

第一章 アレキサンダー三世 ニコラス二世……………一五九——一九一

第二章 露西亞の鐵道及び水路……………一九二——二二三

第三章 平和會議 露西亞皇弟 フィンランド……………二二四——二二六

第四章 土帝及びアィメニア……………二二七—二七五

第五章 クリート及びセッサリイ戦争……………二七六—三一七

第六章 パルカン……………三二二—三三八

第三編 英吉利

第一章 ダイヤモンドデビリー……………三三九—三六二

第二章 一八八〇年より一八九〇年に至る内閣首相……………三六三—三八七

第三章 印度の疆界戦……………三八八—四一八

第四章 印度の疫病と饑饉……………四一九—四三三

第四編 阿非利加に於ける歐洲

第一章 埃及……………四三四—四四七

第二章 ドンゴラ役……………四四八—四六五

第三章 アトバラ及びオムダルマン……………四六六—四八四

第四章 ファシダ カリフの末路……………四八五—四九六

第五章 トランヌヴァール 大統領クルーゲル……………四九七—五一二

第六章 ジェームソン侵入……………五一三—五四六

第七章 ボア戦争 レデイスマス……………五四七—五八七

第八章 ボア戦争 プレトリア略取……………五八八—六二六

第九章 阿非利加の別史……………六二七—六六二

第五編 伊太利及び奥地利匈牙利

第一章 伊太利……………六六三—六九四

第二章 奥地利 匈牙利……………六九五—七二四

第六編 西班牙

米西戦争……………七二五—七五三

目次終

十九世紀末年史

第一編

佛蘭西

第二章

サー・デイ・カルノー

西 關 佛

(1)

佛蘭西が議院政治の爲めに不幸を免れざる所以は、其議院制度が政治的民衆の性質に即せず、必要に應ぜずして、行政の組織と一致を缺くに在り。蓋し其行政組織は根柢に於て秩序あり且つ富裕なる人民に適切なることは、近く同國を觀察せし者の吾人に語る所なり。抑佛國政治の關鍵を握る者は即ち代議院に外ならず。然るに代議院は兩々對峙の二大政黨を缺く事已に多年に及び、今や四分五裂の狀をなし、略別つて八團となすを得べし。然れども彼此相錯綜するが故に、其分界の如きは固より明瞭ならざるものあり。而して其中或は二個或は三個或は四個

相合して代議院の多数を作り、以て内閣を扶くべく、以て内閣を覆すべし。但し一八八七年グレイの辭職或は免職せし以前、實際の目的上より共和黨に類する一派と保守黨に類する一派と下院を兩分せし事あり、各種の共和黨は隨時聯合して保守黨に當りしも、茲に所謂保守黨とはオルレアン黨ボナパルト黨僧黨の如き、凡て共和制度に嫌焉たらざる者を指せるなり。然れども之より以來、一定の領袖を戴き一定の政略を執るが如き一定の多数黨は未だ曾つてこれあらず、而して多数黨の政見を排斥し若くは之を匡正すべき秩然たる反對黨に至つても亦未だ曾つてこれあらず。是に於てか内閣の交迭を促す所以のものは妬忌の心のみ。私利の念のみ。縦令内閣の交迭を致すも、新内閣が舊内閣の政略を踏襲して利害上少しも異なる所なかるべきは初めより明白なるに、なほ且つ交迭を圖るものは之が爲めのみ。

余が第十九世紀の佛蘭西を著したるは一八九一年に在り。此時より一八九六年に至るまで僅々五ヶ年の間に佛國は八内閣を閲したり。夫れ紛擾多事を以て聞えたるルイ・フィリップの御宇に於てすら尙八内閣を超えず。而も此八内閣一八三五

年より一八四七年に至る十二ヶ年の間に互れり之に由つて之を觀れば、最近の内閣が在職短促にして交迭頻繁なる豈に亦甚しからずや。蓋し此間大宰相となりたる者は大抵穩和なる共和主義に屬し、時に或は急進黨より出たる者なきにあらず。而して地位のある處、職責の然らしむる所、自然其熱情を抑制して太甚に至らざりしは則ち之あり。然れども佛國に在つては何れの内閣と雖、急進黨の歡心を得るにあらずれば長く其職に留まるを得ず。之を以て濫に公財公職を分與して其心を收攬するが如きは勢の免れざる所なり。

然るに佛國村鄙に於ける通有の感想を研究せし者は、地方の輿情が急進にあらずして保守にあることを言はざるなし。而して農民と云ひ商家と云ひ余はボルドレー氏の語を用ひ、此階級を稱して秩序あり且つ富裕なる人民と稱す。願ふ所は現状なり。欲する所は靜謐なり。政務の煩累に至つては、之を有志家に一任し、苟も平和と安全を托するに足るべき者ならんには、如何なる政府と雖亦之を迎ふるに憚からざらんとす。然れども其中心に於ては尙未だナポレオンの往事を忘るる能はず。剛健なる主宰を獲て其矜誇の心を満足せんと欲せざるはなし。然る

に現在斯くの如き人傑を戴くべき望なきが故に、小にして一己の福利を加へ、大にして一郷の便益を増すべき代議士を撰擧することを以て自ら甘んずるのみ。これ獨り佛國のみならず、伊太利に於ても亦然り。其他苟も拉丁民族の作用に係れる代議制度は何れの國に於ても殆ど一轍に出づるが如し。

元來佛國の大統領は虚位を擁するに過ぎずして何等の實權なく、其政略は己れに附加せられ、たる内閣に従つて移易する者なり。この故にグレイヴィーの如きは内政を以て念となさず、カルノーの如きは其未だ大統領に撰ばれざるや政黨の首領となり、完好なる政事家なりしに拘らず、就職以來六年の久しき誓つて政治關係を絶ち、専ら慈惠と私徳とに因り、其地位の尊榮を致せしに過ぎず。カルノーは初め佛國の新領土なるサヴォイ土木技師より其身を起し、艱苦勞役の業を經歷せり。サヴォイは一七九七年の戰勝に由つて得たる版圖の一なるが、佛軍の勝利は彼の祖先ラザール・カルノーの智囊より編成せられたる革命軍の力多きに居れり。蓋し佛國がサヴォイを失ひたるは王政恢復の時にして、之を復したるは第二帝政の時即ちナポレオンの世に在り。願ふにサヴォイ、ニースの兩地が佛國の手に歸

したる事は、其アルサース、ロレーヌを喪失したる國辱と反映して、ナポレオン三世の史上に一種の光彩を放つものなり。

一八八九年ブーランゼー將軍の斃るゝや、佛國各種の黨派を擧げて倉皇狼狽を極めたり。これ正統派、ポナバルト派、極端なる急進黨若くは社會黨に至るまで、苟も政變を希ひし徒は公然隱然將軍を扶翼せしに因る。抑、佛人の浮誇にして功名を喜ぶや、適一個の英雄漢を發見するときは招かざるもなほ争ふて麾下に集ま

る。ブーランゼーが馬を躍らして四方を遊説するに當り、烈火の如き佛人の情熱は之が爲めに激發せられ、恍惚亂を思ふは固より怪しむに足らず。然るに今や一朝首領を失ひ、四分五裂歸する所なし。之を如何んぞ阻喪せざるを得んや。

ブーランゼーが失敗に繼ぐに自殺を以てせしより、王黨は立どころに破壊し、了り、巴里伯ありと雖、其黨與と情好密ならざるが上に、其膽勇なくして氣慨に乏しき性質は榮譽を好む佛人の渴想を醫するに足らず。而して彼がフロストルンに於て其姪と和解を行ひたる一事は、排オルレアン黨に親みてオルレアン黨を疎んぜし者なりしかば、之が爲めに立憲王黨の心を失ひ、加之一軍事冒險者と醜陋

なる關係を結びたるより、オルレアン黨と排オルレアン黨との別なく、凡て思慮ある上流人士は盡く離心するに至れり。
 ナポレオンの制定せる佛國地方行政の制度には知事副知事市長等の職あり、結構宜しきを得たる結果、地方に住する佛人の生涯と靜謐とを保つて、暇平日に進み、政體が如何なるも、巴里に於て佛國の運命を左右する者は何人なるも、毫も影響を受くる所なし。

余は吾人の所謂愛國心が佛人の徳にあらずと云ふも、庶幾くは誤解せられざらん事を、蓋し佛人は其首領に熱中せざるにあらず、忠實ならざるにあらず、輿論に左祖して財産生命を抛たざるにあらず、然れども自國及び國民全體の幸福と云へる見解よりの愛國心に至ては殆ど之あるを見ず、見よ革命以前佛國軍隊の意氣を作興せし者は國王に對すも忠義なりしにあらずや、之に繼いで心酔せし者は佛國にあらずして共和政治なりしにあらずや、又其終に於て熱血を注ぎし者は其大首領なるナポレオンなりしにあらずや、若し來世紀に於て更に戦争の起る事あらんか、其吶喊は共和政治に代るべき物と云へる響ならん、彼等は自慢の

爲めに佛國の幸福を忘る、自己の利益の爲めに佛國の利益を忘る、一種流行の思潮の爲めに佛國の前途を忘る。

カルノーの大統領に就きし事と一八八五年より一八九一年に至るゾーランゼーの行動とは、余の前者なる十九世紀の佛蘭西に於て已に詳述せし所なり。
 ボードローの佛國今代史は良著なり、其中に言へるあり、カルノーの大統領時代、政熱の激烈にして新聞紙の放肆なる佛國に於て前例を見ざる所にして、革命の際と雖尙未だ斯くの如く甚しからざりしなり、何となれば勳章事件と云ひゾーランゼー事件と云ひバナマ事件と云ひ、此時代を通じて醜體百出し軋轢絶えざりしを以てのみ。

勳章事件とゾーランゼー事件とは余の已に叙べたるが故に、遺れるものは第一、バナマ事件なり、第二、佛人が露國の艦隊をトロンに迎へ露國の官吏を巴里に招き、露國との同盟に狂喜せし事なり、第三、カルノーが任期の盡くるに先だちて一八九四年六月二十四日悲惨の死を遂げたることなり。
 之より先きバナマの通潮運河は一八七九年五月を以て計畫せられ、工事に十二

(8)

億フランを要し投資者に七朱の利益を配當すべき目算なりしが、翌年ドレンセップは該地に至り豫算額を減少する所あり其意見に據れば八ヶ年を以て竣工する事を得るなり。佛人はスエツ運河の成功に眩し、獨り資本家のみならず中流の富豪のみならず、農となく殆ど全國一切の階級を擧げて先を争ひ株券を購求し、放棄の全額を合計するるとき十三億フラン(二億五千一百萬弗)の多さに達し、而して二人の請負師が五億一千二百萬フランを以て此工事を擔當すべき契約は夙に成立せしとの事なり。

然るに一八九二年に至り會社に拂込まれたる株金の大部分は忽ち其所在を失ひ、而して工事の完全せる處は僅々小部分に過ぎざりしが、重役諸人は莫大の金錢を散じ、或は新聞紙を買收し、或は議院に運動し、或は世上の口止め供し、而して債券發行の許可を得たり。已にして一八八六年に至るや、更に富籤の方法に因つて資本を増さんと謀り之を政府に出願せし處、此計畫に左袒して全國各地より提出せる請願書は少からざりしも、代議院は斷然否決に及びたり。是に於てドレンセップは更に他の方法を案出せしが、發企人等は事業の壞廢を恐れ益、議員新聞記

佛

四

(9)

者並に院外有志家と秘密の關係を結び、其勢力を利用するに汲々たり。然るに未だ幾くならずして實地調査の爲め派遣せられたる専門技士は報告して曰く、通潮運河は實行し難きものなりと。

尋て一八八八年富籤案は復活に及びたるも、大藏省大臣タイラールは閉潮式を捨て通潮式を取るにあらざれば之を採用せざるべしとの意見を持せり。然るに通潮の運河は技士も請負師も俱に不可能となせし所なり。既にして水門を設くるが爲めに會つてフィッフル塔を築造して其名を著はしたるフィッフルを聘用し、四十五萬馬力の機關を具へ三千三百萬フランの金額を支出せり。然る後富籤案は議院を通過し社債の認可を得たり。

蓋し會社は凡ゆる手段を盡せしに拘らず、其募債額は六億フランを超ゆる能はず。而してシャール・ド・レンセップは此金額を以て三年間に竣工すべきことを約せり。但し此時に方リョセフ・レナグ男の委任を受けたる募集の額は六百萬フランなりしと云ふ。

一八九二年會社没落の當時暴露せし所に因れば、運河經營の爲めに募集せし金

額は十三億フランなるに工事に費せし所は僅に五億フランを出てず。而して四億四千萬フランは一部請負師の利益に歸し、一部過大の俸給に費されしものにして、三億三千万フランは計算立たざるものなり。抑五百フランの債券の放資者が夥多なりしに由つて之を觀れば、最初此大會社の財政上に於ける紛紜は毫も世上一般の疑懼を醸さざりしに似たり。これ豈に奇ならずや。蓋し人民は運河の事務を以て議院の措置すべきものなりとし、輒近數年の間佛國の地方人士は専ら議院に關する事に就き個人的利害心を聳動せざりしものゝ如し。然るにバナマの事業を擔當せる財務家ヨセフ・レーナック男の自殺するや、始めて此事業に個人的利害の念を生ずるに至れり。而して警官は直ちにコルネリウス・ベルツ及びアルトン二人の搜索に着手せしが、前者はレーナックの共犯にして後者はレーナック、ヘルツが記者議院等に金錢を支拂ひし時、其間に立つて媒介をなしたる者なり。

蓋し一八九二年の末、レーナック、ヘルツの二人は己に隙を生じて劇争をなせし事あり。最後の會見に方りヘルツは事實を告白すべしとて脅嚇を行ひしが、レーナックの自殺は之より僅か二三時間の後に在り。然るに之が死因に就ては何等の檢問なく、政府の報告には起死の原因を卒中なりと記せり。是に於て佛人は擧げてバナマ事業に注目せるに際し、レーナックの所持せし書類中より、バナマ事業を支柱するが爲めに金錢を貪りたる記者議員の名簿を發見せり。而してヘルツは議院の腐敗に關して更に重要確實なる證據物を有せしが、これは彼が英國に出奔せし時携へ去れり。

ヘルツ博士はバーヴェリヤに住せる猶太人の子にして、我北米市民の資格を得んが爲めに合衆國に歸化し、米國の學者として佛國共和政府より「レデオノ・オプ・オノア」の高位を得たる者なり。

新聞記者をして運河の利益を議院に鼓吹せしむるが爲め、之に略はしめたる金額は頗る多く、一八八二年の如きは一百三十二萬フランに達せり。蓋し佛國の新聞紙は廣告に由つて金錢上の利益を得ることなく、之に反して英國の如き米國の如き新聞紙の賣高は纔に刊行の費用を償ふに止り、其富を致す所以は全く廣告料に在り。夫れ佛國の新聞紙は廣告の収益を恃むべからざるが故に、或は新事

業を贊助して其報酬を求め、或は公私人の聲援をなして財源を造るは自然の結果なり。且つ佛人の道德律に因つて判断を下すときは、記者がパナマ富籤計畫の爲めに筆を舞はして金銭を受くるが如きは正當の營務なり。

一八八八年ブーランゼー主義が共和國を危からしめたる時に方り、當時の大宰相フローケーと前年の大宰相ルヴェーとはパナマ會社を強ひて五萬フランを政府に納めしめたり。然るに之が費途は運河開鑿の用に供するにあらずして政敵と抗争するの資となすにあり。即ち全然會社の業務と關係せざる事に向つて之を用ひんとせしなり。フローケーは此措置に就き、一八九二年十二月の末代議院に於て辯疏を試みたるが、其理由は佛國がブーランゼー黨の爲めに危殆に瀕し、事體の重大なるパナマ運河の比にあらず。乃ち斯くの如き用金を課するも佛國福利の爲めなれば以て正義となすべしと云ふに在り。

佛國の福利此儀則こそ多年許多の罪惡を掩護せしものなれ。第二帝政の顛覆は腐敗を始として一切罪惡の滅亡なりとは理論的に想像せられたる所にして、帝政に代れる共和政治は純潔と云ひ愛國と云ひ自制と云ひ、凡ゆる嚴正なる徳義

を實現すべくありしなり。

吁議院制度(少くとも拉丁民族の)がこの綱領に背馳するや、一年は一年より甚し。ポードローはヨセフ・レナックの自殺を以て脅嚇取財の爲めに死に驅られたる者なりとせり。而して公衆は此事に因つて駭起せしが、ポードローは又曰く、之に繼いで來りし時代は革命の時を除く外、巴里に於て未だ曾つて有らざる所の光景なりと。一八九二年の末に於ける巴里各新聞紙を通觀する時は頗る奇怪を覺ゆ。何となれば孰れも皆厚利なる「ボンチ」を以て議員、大臣及び著名なる人士の醜穢を指摘せざるはなく、排斥の風氣到處に充溢し、「正直なる人ありや」とは當時の激烈なる問題なりしを以てなり。

余は拙著「十九世紀の佛國」の卷末に於て外國人がレッセップの性質並にその自國は言ふに及ばず、世界に盡したる功績に就て下せし論評を擧げたるが、かれが一八八五年四月二十五日「アカデミー」の席に就きし時、レナンは之を謂つて曰く、余は思ふ、君はラマルティエ以後最もわが國を愛せし人なりと。然れども凡そ佛國に於て高位に在る者は政界の旋風に捲かれて破滅を致さざるなし。レッセップに

至つて何ぞ獨り然らざらん。
 フルディナンド・レッセップは一八〇五年ウエルセーユに生れ、其父はメヘット・アリーの時代埃及に領事を勤め、而して祖父も亦曾つて外交官たりし事あり。従つてレッセップも亦外交家となるべき教育を受け、外交官として西班牙、埃及、伊太利等の諸國に高等なる職務を歴任せり。彼の祖母とユージニイ皇后の祖母とは姉妹なりしが故に彼は皇后と從兄弟の血縁あり。一八五四年外交の職を棄て、十年來其胸中に豫熟せる計畫を行ふを得べき境遇に立てり。

レッセップは埃及に赴き、新に太守となれるセッド・パシヤよりスエヅ開鑿の認可を得たり。是に於て有名なる技士若干名をして測量を行はしめ、かれ等は地中海と紅海と水平均しきことを斷言せしに、英國の技士等は交之を駁し、英國鐵道の大宗と仰がる、スティーヴンソンの如きも其一に居れり。而してバルマルストン卿は政治上の論據よりしてこの計畫の反對者中頗る錚々たるものなりしが、ド・レッセップは自ら英國に至り皇配アルバルト、グラッドストン、クレラレンドン卿を説いて其信頼を得、遂に二百萬フランの資本を作り、一八五九年を以て工事に着手せり。こ

の時セッド・パシヤも夥しき株數を引受けしが、其後十六年を経、英政府はパシヤの承繼者より之を譲り受けたる爲め、英國は運河會社第一の大株主となり、爾來此運河は英國に取り、其東方諸國との關係に於て殊に印度との關係に於て効用の大なる勝つて數ふべからざるものあり。

一八六九年莊重なる儀式を以て運河の工事を起し、行列は佛蘭西女帝先驅をなし、同王公貴顯之に従へり。當時の偉觀は余の「十九世紀の佛國」に詳なり。

レッセップが未だ悲境に陥らざるに當り、スエヅ運河の成功に因つて佛國の譽を揚げしかば、國人は尊崇に尊崇を重ね、名聲赫々世界事業家の中に於て嶄然頭角を出せり。然れども氏の活氣はなほ未だ息まず、サルミストが人生活動の終期と定めたる年齢を踰えたるに拘らず、コリンス地峽の開鑿を發起し、サハラの大沙漠を變じて内海となすの計畫に屬望せり。然れども尙別にパナマ地峽の開鑿すべきあり、氏は百難を排して之を成就するにあらざれば自安する能はざりしなり。乃ち一八七九年パナマ地峽に通潮運河を作るの目的を以て會社の創立に従事せしは、彼に取り佛國に取り否運の端を發さしものと謂はざるを得ず。僅少の

資力ある人にして彼の大名を信じて此事業に雷同せし者幾千人なるを知らず。然るに十年の歳月を閲するも工事は毫も完成する所なく、而して會社は結局破産するに至れり。

一八九二年の終に至り、フルディナンド・レッセップ及びその他會社の重役は信託違犯と資金濫用との罪に問はれたり。この時に當り、レッセップは身軀の麻痺を患ひ田舎の住宅に静臥中なりしが、氏は吾子が事業の破綻彌縫せしが爲めに不正の手段を採りたることに就ては初より少しも與り知らず。自己が五ヶ年の禁錮と巨額の罰金を課せられたる事に就ても亦知る所なかりしなり。但しレッセップの判決は大審院に於て學術上の理由より破棄せられたるも、小レッセップ並に其他の人々は禁錮と罰金との刑を免れざりき。然れども凡て傷心の事は老父の耳に入れざりしかば、老レッセップは一八九四年十二月七日八十九歳の高齡を以て巴里を距る遠からざる田舎に平靜なる終焉を遂げたり。

次に引く所はエミール・オリヴィエが彼の死に關する記事の一節にして、一八九四年十二月八日の「フィガロ」に載せられたるものなり。

彼は痛絶慘絶なる不幸の後に死せり。此不幸は彼を恕せざると共に、其最親最愛の人々をも恕せざりしなり。彼は病苦もなく遺言をもなさず、呻吟する事もあらずして歿せしが、只さへ羸弱なるに平生間斷なき勤勞に疲れ、恩を仇とせる國人の酷論に悶え、身神兩つながら衰弱の餘り溘焉として瞑目せしなり。政府は只管世間の怨嗟を慰めんとし、怨嗟を慰むなれば尙可なれども世間の亂心病を和ぐるに汲々とし、之が爲めレッセップの如き人物に向つて詐僞負信の罪を嫁したるに至つては實に其弱點より出てたる者なり。嗚呼斯くの如き惡名を以て彼に擬するは豈に瀆神に均しからずや。彼は僞詐師よと、かれこそは人間の中に於て最も私なき人間なり。利益に就ては少しも心を留めざりし人なり。亞拉比人の儉素と教長の質實とを以て生活せし人なるに、彼が會計室の帳簿を十分に監査せざりし過失に至つては誠に之あり、然れども彼は決して名譽の何たるを忘れざりしなり。

彼の第二計畫は紅海と地中海とを連絡せる第一計畫の重要なるに譲らず、又有望なるに譲らざりしなり。而して其佛國を裨益し之が名譽を高からしむる

に至つても、第一計畫と其撲を一にしたるならん。然れども此計畫の施設に就ては則ち異なる所なり。スエヅ運河は寛大睿智なる埃及太守と佛國皇帝との保護を待ちて企圖せられたる者にして、皇帝と云ひ太守と云ひ共に此事業に重きを置き、苟も必要あらば全力を以て援助するを憚らざりし故なり。

然るに彼がパナマ運河を經營するや、其事を共にせし者は前回と異り、國家の利害を念となさざる無耻貪婪の山師にして、苟も利益を得べきものなれば何事によらず一攫し去らんとする徒のみ。レセップの事業の破壊し、レセップ自身を破壊せしは即ちこの人々に外ならず、埃及の太守が彼に數百萬金を與へし事は宛も「アラビアン・ナイト」の教主の如く、山師が彼より數百萬金を奪ひ去りしもなほかの路盜の如くなりき。

彼が臨終の時に至れるまでパナマ工事の終に成功すべき事を信じて疑はざりしはベネヴェニト・ミョリニに異ならず。シリニはベルシースの青銅像彼は其傳記に於て之を名づけてわが親愛なるベルシースと云へり。成工せんが爲めに、完全ならしむるが爲めに、巧麗ならしむるが爲めに、手當り次第一切の

家具調度を竈中に投じて顧る所なかりしが、レセップも之と同じく最後に及んでは金銀の出處を精査するに暇あらず、苟も提供せられたる者は如何なる補助なりとも盡く之を受けたり。然るに彼が竟に其大事業の成功すべからざる事を悟り、又此事業が貧民の貯蓄を吸收せし事を知りたる一刹那は實に彼をして戦慄せしめたり。蓋し彼は平生貧民の愛慕信頼を以て帝王の眷顧よりも榮譽となし、大に得色ありたればなり。

余が最後に彼を見たるは其「ルモンテリス」に於て少しく研究に従事せし際にして、彼は火爐の前に坐し膝に毛布を蔽へり。余の聲を聞くと齊しく身を起して云へり。呀君は其處に居給ひしか、御目に懸つて甚だ喜ばしく思ふ。無論朝飯に來られしならんと斯く言ひたるまゝ、余の答をも待たず、外に一言も語らず、復び坐して故の如く火をば眺め居れり。

那の人々は余に語れり。レセップは右の儘にて數時間坐せり。而してかれの思慮は彼の計畫の犠牲となれる貧民の上に在り、彼が火を見詰むるに當つては貧民が自己の周圍に群集するが如き想をなし、それより暫時の間眞境に復し、再

一たび舊友として余を歡接すると思へば忽ち又恍惚として幻境に落ち入り、
 パナマ事件の共犯者として告發せられたる者十一名の中、六名は前後内閣大臣
 の職に在りし者なり。而して前工部大臣ペーヨー氏の如き亦其一人にして、氏は
 大膽にも其犯罪を辯疏して曰く、己れは土木技士たる教育を受けたる者にして、
 技術上の意見に對する報酬として金錢を受くるも差支なき事と思惟せしなり
 と之に就ては同僚の詬罵を受けたるのみならず、世間よりも亦排斥せられたる
 が、これ氏の事實を自認するは愛國心の缺乏を示す者なるを以てなり。
 散逸せる資本の大部分が如何に費消せられたるは竟に何等の手掛なく、唯明白
 なるは消失したる金額が數百萬なるに拘はらず、犯罪者の辨償すべき金額の些
 少なりし事のみ。
 人皆以爲らく、アルトン、ヘルツの二人は深く此事件に關係を有するが如く、従つ
 て此二人に因り真相を得べき望なきにあらずと。然れども二人共に出奔して佛
 國にあらざるを如何んせん。但しヘルツは英國に赴きしが其本國に引渡されざ
 りし所以は醫師の證明書を有するが爲めにして、此證明書には彼はホルンマウ

スに於て方に危篤に瀕するが故に、若し他處に移す時は直ちに生命を失ふべき
 由を記せり。報告に據れば彼は左の如き事を云へり。曰く、ペーヨーの眞の罪は彼
 の自白これなり。何となれば彼の同類は多く議院内に在り、而して此輩はエー
 ンプの牢獄に於て彼と縲紲を同じうすべき者なればなりと。
 佛人は僅少の罪人を摘發處分せば其名譽を全うすべしとなし、一時夥しき顯官
 の連坐せしバナマの醜聞も全力を用ひて頓に沈黙に歸せしめぬ。
 然るに一八九七年此事件は再燃に及び、遂に本國に引渡されしアルトンは、己れ
 が金錢を手渡したる大官議員の姓名を明示すべきことを約し、ヘルツも亦委員
 がホルンマウスに出張して尋問をなさば、アルトンと同様に收賄人の名を告ぐ
 べしと約しぬ。己にしてアルトンの漏示により罪人を逮捕し檢察の命令を下せ
 しが、突然事件は中止となれり。これ檢事ケステードポールが百方檢舉を
 阻害せしに由る。

抑一八九二年より翌年に互り、戯曲家小説家、ポンチ、喬工等に取り最も時好に投
 ずべき題目は世上の疑を置ける議院の腐敗なり。然るに議員の腐敗は地方選舉

に影響を及ぼせし事甚だ少かりしは奇と謂ふべし。則ちパナマ事件に於て汚名を受けたる人士が候補者として選挙區に見はるゝや、選挙人は殆ど當時の大事件を忘れたるが如く孰れも之を再選せしが、其理由は是等の人士が選挙民若くは選出地方に功勞ありと云ふに在り。但し通常の佛人は其一己の利害に關せざる事に冷淡なる斯くの如きも、ポードレー氏はなほ云へり。佛人は國民として廉直を以て著るしく、此徳は自制克己勤勉と相合して最も卓々たる者なりと。

一八九二年佛國に起りたる事件中最も外國人の心を引ける者は、第一を法王レオ三世より佛國舊教徒に賜ひたる教書の公刊とし、第二を無政府黨の活動とし、第三を内閣劇變とす。

此年の初ドブレシネー氏大宰相たり。然るに二月十八日國家と教會との關係に涉れる政府案が代議院に敗れたる爲め内閣の更迭を致し、大統領カルノーは代つて内閣を組織すべき有力の政治家を得るに苦みしが、結局ルノー氏其任に當れり。然るに斯くの如くにして成立したる内閣は極めて不幸なる者にして、其時より今日に至るまで苟も閣員たりし者は何人も禍に罹らざるはなかりき。

而してトランケー氏は軍務大臣として、ブーヴィエ氏は財務大臣として俱に此内閣に立てり。

一八九二年の初に方り、佛國の大教正並に「カーディナル」の一體は佛國の各地方に於て舊教の地位不利なる事を陳辯し、該教會と教徒とが國家より被る所の害苦を列舉せしが、其二三を擧ぐれば離婚法の如き、學校の俗化の如き、慈善事業の諸會館より宗教並に僧侶を除外するが如き、宣教講習生に兵役を勵行するが如き、寺區の委員をして教會の屋宇を監督せしめず、反つて市町の監督に附するが如き之なり。彼等又附言して曰く、我徒は羅馬法王の命令と自教の傳説とに因り、敢て佛國の撰擇したる政體に反抗せざるべし。然れども我徒の良心を犯し若くは教權を蔑するが如き法律に至つては、之に對して力爭すべきことを命ぜられたる者なりと。

此結果法王は同年二月教書を發して教會と政府との關係を説明し、佛國の舊教徒に訓するに宜しく共和政體を奉ずべく、或は之を顛覆し或は之が仇敵に黨するが如き事なかるべきを以てし、教會は政府を視て騷亂を治め秩序を保つるの機

關となじ、常に之を扶持したる事を追説し、苟も舊教徒たる者は一八七一年の政
 教約款に就き、縱令規定の全躰が其意見に合はざるにせよ、必ず遵守せざるべか
 らざる事を嚴諭せり。此時に當りルイベトはリボアに繼いで大宰相なりしが、此
 内閣の司法司教大臣は法王の調停的戒諭を下したる好意を無視し、敬虔なる僧
 侶に對して法律上の處分に着手し、殆ど宗教害迫に齊しかりしかば舊教徒は頗
 る怨嗟に堪へず。然るに熱心なる正統派僧侶黨に至つては法王レオの諭告を以
 て其眞意にあらずとなし、誓つて王政を佛國に再興せんとするや故の如し。
 是に於て法王は又三月三日を以て佛國の「ガイヂナル」に教書を送り、凡ての舊教
 徒に命じて現政府を奉戴せしめ、之に附言して曰く、凡そ何人に論なく自黨の成功
 を第一位に置いて一切の物を無視する徒は、縱令其成功が宗教の保護上最も當を
 得たるものとするも、危険なる思想の顛倒に因り分裂の性質を有する政治を以
 て統合の性質を有する宗教の上に資くに至らんとすと。
 此命令は舊教徒の多數をして所謂穩和共和黨に依附するに至らしめたるが、右
 の新團體は「レ・ラリエ」と稱せられたり。かれ等は三十年來佛國に於て熱心なる

舊教徒の懷抱せし教義を抛ちたる者と謂ふべし。何となれば苟も善良なる基督
 教徒たらんと欲する佛人は正統派を扶けざるべからずとは從來の教義なれば
 なり。然るに今や此教義は法王の教書に因りて一朝亡滅に及びしが、此亡滅は巴
 里伯に取つて大打撃を與へたる者なり。蓋し巴里伯は「教會と王位」との聲を以て
 其黨與を集めんと欲したるが故のみ。
 政教問題のなほ耐なるに當り、無政府主義は佛國に猖獗を極めたり。而して其社
 會主義と異なる所を察するに、無政府黨の目的は一切の政府制度を擧げて之を亡
 ぼすに在り。社會黨の目的は政府に十分なる權力を授けて、凡そ社會に屬する一
 切の事物を監督せしむるに在り。佛國の無政府黨は大別して四種となす。
 第一は「アナルキスト・フデレーシヤン」に屬する者にして、此會の中には舊共產黨頗
 る多く、其目的は政治上に在り。之が黨員は凡そ政府に反對する黨派あるときは、
 其黨派と結び之が爲めに投票し之が爲めに應援す。然れども暴力は用ひず。
 第二は「インタルナシナル」第三は「アンテ・パトリオット」の同盟にして、伊太利、獨逸、波
 蘭、匈牙利、白耳義、愛耳蘭、西班牙等各國の亡命者を含み、其目的は軍隊の背叛と人

民の騒亂を挑發するに在り。第四は「コスモポリタン」同盟にして爆彈と刺客を以て利器となす所の組織なり。此種の人民中ジも發達したる一群は自ら「インデペンデント」と呼び、各自由行動を取る。彼等は幾何の小部隊に分れ、一部隊は十二名を出てず。一八九二年五月一日「ブーブール・サン・ジェルマル」に住する社交的貴族の家に爆彈を破裂せしめたる者あり。これより二週間を経て、數日以前に社會黨の糾問をなしたる法官の家を爆發せんと企てたる者あり。この日又兵士の充滿せる營舎に爆彈を投じたる者あり。此種の暴行は二三に止らず、其目標となりし者は秩序壞亂の罪人を判決したる裁判官なりき。之より先き佛國各地に於て官庫より少量の「ダイナマイト」を盗みしものあり。五月中巴里の官界は判事を初め戦々競々として寢食を安んずる能はず。會、ルド・クリシーに起りたる暴行は兇惡を極めたる者にして、之が爲め一軒の家は荒廢に歸し、害を受けたる者數人に及べり。犯人はラヴァコールと云へる者に歸着せしが、此賊は曾つて其州に於て一老人を殺し、三萬「フラン」の金を奪つて警察の目を逃れたる事あり。其後共犯者より告發せられ

珈琲店に於て捕縛に遇ひたるが彼の同類は直ちに此店を爆發し主人に重傷を負はしめぬ。これ店主がラヴァコールの捕縛に力を假せしを怨みて之を報いたるに外ならず。ラヴァコールは斬首の刑に處せられしも、其宣告文は一年以前に犯したる殺人罪に因りし者なり。

一八九二年十一月ル・ベール内閣倒れ、これより年末に至るまではバナマ事件の騒動を以て経過せり。

一八九三年は開春より物情恟々として、高位に在る人々は盡く嫌疑を受けざるなく、佛國の公衆が精神病狀に在るや「頭腦の叛逆」を免れざるものなり。議官議員前大臣等のバナマ疑獄の終るや、新内閣の成立し、大宰相はシャール・デュブイオその人なり。此二三週間佛國の政界暫く靜謐にして、只以前ブーランゼー主義の機關新聞なりし「コルカルド」が人心を動搖せしめたるのみ。「コルカルド」の記者は報じて云ふ。己れは嘗つて英國公使館に備はれたるノルトンの手より外務省のサー・トーマス・リスレーと英公使館のオー・スタインリー氏と往復したる私信の謄本を購へり。此中には英國の官人と通謀して佛國政府を覆さんとする記者議

員其他の姓名を載せたれば、即ち之を首相及び外務大臣に呈示せしに皆其真物なるを認めたりと。然るに代議院に於てブライアン、ゼーの議員ミューグアイこの書簡の佛譯文を朗讀するに及び其の拙劣なる偽書たる事明白となれり。蓋し其中佛國の内政並に國際上に關する引據は無識を極め如何なる外交家と雖敢へて筆せざるべき者にして、其文體より之を觀るも英國紳士の用ふべき者とその撰を異にせり。是に於てミューグアイは法官より喝罵せられ、代議院は四に對する三百八十元票を以て直ちに議事日程に入り、斯くの如き譏誣に耳を傾けて貴重の時日を費せしを悔いたりと云へり。

抑此文書偽造と外國公使館より偽書を盗み出せし事は、一八九三年の秋に始まれり。而して陸軍の通信部に於て屬僚が同一の罪惡に従事せしも亦實に此時なる事を記するを可とす。

元老院の一議員は巴里の淫風を禁止すべき議案を提出せしが、ブルジョワの店窓に猥褻なる繪畫を掲ぐるが如き其一例にして、第二帝政の時と雖未だ斯くの如く甚だしきに至らざるなり。此議員は風紀上取締を必要とせし所のものは

一二に止らず、其中ラティン區の學生が年々催す所の「キウヴァツアルト」と云へる舞踏會禁止の一事あり。この會は殊に美術科の學生の庇護に係り、其委曲に至つても亦彼等の倫次する所なり。然るに彼等は其職業上或は公然人目に暴され、或は「モデル」として美術展覽會に現はる、裸體婦人と熟知の間柄なる故、之を美術に暗き俗物に比すれば猥褻の感覺自ら鈍からざるを得ず。

舞踏會は六月末に開かれたる處「モデル」の婦人と幹事とは並に告發せられたり。然るに學生は警察が私の興維に干渉するを怒りラティン區に於て暴動を起せしに此際學生の一人は巡查の爲めに金屬製のマッチ箱を投附けられ頭蓋を挫傷せしかば、學生は怒つて狂するが如く代議院の前に屯集し、一には警察の非難に對して保護を請ひ、一には隨意に演藝を行ふの權を恢復せんことを求め、更に進んでセーヌ知事の罷免若しくは大宰相の辭職を以て代議院に迫りしと雖、代議院は一も省する所なかりしかば、學生は復び騷擾を起し其翌日亂を好める社會黨及び巴里の匪徒は暴衆を助けて政府に反せり。

茲に當時余の接手せる書狀あり。差出人は美術學生にして五月初旬以後巴里に

在らざりし人なり。彼はミューニッヒ、ストラスブルグを歴て一八九三年七月九日巴里に到着の事を記せり。

目下小生は以前の處に戻り居候。ミューニッヒより此方への旅行は甚だ愉快にて別段の疲労も無御座候。火曜日の午前五時三十分巴里に到着致候處、第一目に入候は新聞紙の箱店及び其他往來の建物の破壊被致居候事に御座候。小生は御者に如何なる譯かと尋ね候得ば、學生の輕卒なる所行なりと申候が門衛は更に悉しく事實の顛末を話候。

我アルト舞踏會が此騒を引起し候は何とも不思議の次第に御座候。火曜の午後被致等は殺されたる朋友を埋葬致候ひしが、その夕刻小生は初めて巴里騒動の様子を實驗致候。小生は食に參るとしてサンジールマンドブレイに向ひブラシード街を出立候時、向の端に群集を見受候。また多くの箱店が焼居候處を目撃に及び候。小生は騒動を見物せんとて立止り候が、場所がモンパルナスの上に有之下の方を見下す事として何から何まで善く相見え候。暴民は保障を造り銃店に發射致し候處、幸に市の護衛隊が咄嗟の間に市街を取仕切候爲め安堵仕

候。小生は貴下に人民の馳せ違ひ商家が戸を閉ざし候様を御目に懸度存候。小生はそれよりレオンの飲食店へ參り候時、宛も軍隊が通行の砌にて、彼等は自由を揮ひ居候。食事を畢り候處、保障の方へ赴き之を一見致候得ば、一輛の乗合馬車と二輛の石炭車と數輛の辻馬車にて造り上げたる者に有之、暴徒はガールモンバルナスの方より參候辻馬車を盡く止め候て、乗客を引下し若し御者等が騒ぎ候得ば其馬を殺し候が、小生は三頭の死馬を見申候。佛人は誠に馬に殘酷なる事と被存候。其夜より翌日に互り鬭争御座候ひしが、目下は鎮靜に赴候。さりながら小生の考にては七月十四日に又もや一騒動可有之、但し天氣熱き日は毎も宜からず、それは彼等が午後酒を飲み續け、夜分に相成は鬭争に出懸候故に御座候。之より外は無事に一週間を過し申候。デュリアンには殆ど何人も居り不申候。

社會黨は學生の動亂を起したるに乘じ武装をなして彼等の労働紹介所の周圍に會合せり。蓋し一八八九年に至るまで社會黨なる語は、労働者の爲めに社會改良を望む人を指したるものにして、佛國に於ては苟も社會問題に心を用ふる者

は何人も社會黨の名を甘受せり。英國に於ても亦之と同じくチャールズ・キングスレー及びモリスの如き基督教の主義の社會黨を以て自ら得色ありしなり。一八八九年に至るまで社會黨なりしイ・ヴ・グ・ョーの曰く、社會改良の主張者は凡て出版の自由集會の権利の爲めに努力せりと。然り彼等は又政府に向つて職工組合の法律に係る改正を要求せり。

一八八四年に發布せられたる法律は或る制限の下に労働者の「シンデケート」を許可せしむるも、職工組合に至つては多少政府に責任ある右の「シンデケート」と合同するにあらざれば之を許さず。然るに職工組合が合同を拒み依然其組織を維持せしが如きはこれ實際不法なる者なり。

學生舉動の起りし時、内閣は職工組合をして六月五日に先だち法律の規定に従はしめんとせり。然るに組合員は労働紹介所の周圍に會合し、此命令に抗せんとせり。この時に方り社會主義は自ら一政黨をなし、其目的は國家をして一切の労働契約を干渉せしめ、資本主を抑へて労働者のみの利益を圖らんとするに在り。政府は果して軍隊に命じ労働紹介所の附近に集合せる數千の衆を驅逐せし

めたるが、是に至つて學生は其同盟を棄て、顧みず、則ち労働組合と巡査並に其應援なる兵士との鬭争となれり。

七月六日政府は労働紹介所を閉鎖せり。労働紹介所は巨費を投じて建てたる大構造にして、暴徒の首領が其本營となせし所なり。是に於てか事件は全く落着せり。但し之を落着と云ふも、街上の争闘が落着したるのみにて代議院に於ける争闘は依然として故の如くなりき。

之より幾くもなく、巴里を初めとして佛蘭西全國の耳目は其所謂國家の一大成功に集まれり。一大成功とは一八九一年佛國艦隊がクロンスタッドニ露國を訪問したる答禮として、露國の艦隊がトロン港を來訪し好意を表せし事なり。

抑、露帝アレキサンダー三世は心中佛國の政治と德義とを喜ばざりし爲め答禮は自ら延引に及びし處、是に至つて露國の二大公爵はナンシーにカルノーを訪へり。會、佛兵の機動演習中なりしかば、露帝をして佛國に流寓せる虛無黨が暴動に乘じ危害を加へ刺客を放つの恐なからしめたり。

從來佛國は歐洲に於て孤立の威を免れず、獨逸伊の三國同盟を視て以て佛國の

勢力を危うする者となし、切に露西亞との同盟を冀へり。蓋し露西亞は先天的に新造共和國の同情を引くべき國にあらず、然るに佛國艦隊がクロンスタッドに至れるの日、歓迎を受けたる以來、佛國公衆は同盟なる語の官用とならんことを熱望せざるなし。

この故に露國の艦隊がトロンに來るや、歓迎は盛大を極め、全市は兩國の國旗を以て裝飾を施し、熱中せる人士は各地方より輻輳し、婦人は露國の色彩を用ひ公體は處々に歓迎の意を表する演説をなせり。佛人は露艦の來訪を以て佛國孤立の終局となし、有力なる與國を得たりとなし、政治上の同情を得たりとし、狂喜して措かざりき。

大統領とトロン市の會議長は露國の提督以下六十人の士官を導いて巴里に招請せり。而してトロン市會議長が斯くの如き場合に斯くの如き位地を占めたる事は、適以て佛國政界に珍しからぬ造化の戲、浮沈變轉の常ならざるを徴するに足る。何となれば彼は會つて共產黨の有罪人を以てトロンの船厨に役使せられたる事あり。又會つてアレキサンダー二世を弑虐せし虛無黨を頌贊せし

事を以て著はれたる人なればなり。

巴里に於ても露國の海軍將校の來訪に狂奔することトロンに於けるが如く、市街は兩國の國旗を飾り、家屋並に招牌は盡く黃黒の色を以て蔽ひ、路上も亦然り。凡そ彼等を饗應し來訪を祝すべき事は一としてなさざるなく、熱心と曰ひ友情と曰ひ當時流行の口號をなせり。一週日の後彼等の歸るや佛人より露國帝室と彼等に贈呈せる物品は艦中に堆を成し、露國の新聞紙は此新同盟の前途に歡喜し、露帝も亦兩國熱誠を看過するを欲せず。左の如き電文を大統領に送れり。

我露國の分艦隊が佛國を去るに方り、朕は佛國何れの地に於ても懇懇にして盛大なる待遇を被りたる事に就き、朕が如何に感銘の深きやを閣下に告げんとするに切なり。

如今更に非常なる能辯を以て證明せられたる友情の深厚已に連合せる兩國をして益結托を深からしむる者にして、朕の望む所は之に據つて一般の平和が鞏固を致すに在り。而して兩國の努力希望實に茲に存す。

大統領カルノーは之に對して懇切なる返電を酬ひたり。

佛國は露國の艦隊に附するに自國の海軍に於けると同一なる商港及び造船所の特許を以てせり。而して兩國の密通せし事は經濟上双方に裨益あり。

一八九三年十二月下旬ヴェュヤンと云へる社會黨員は代議院の傍聽席より大統領デューブイに爆裂彈を投じたるが幸にして其側なる一婦人は彼の腕を握み之をして其目的を誤らしめたり。然れども彈中には釘と鐵屑とを含みたるが故に、其破裂するや數名の傍觀人を傷け、之が爲め議場は數分間騷擾を免れざりしも、議長は直ちに衆員をして秩序に復せしめ、議事の進行平生に異らず。ヴェュヤンは政事上の罪として審判せられず、社會上の罪として審判せられん事を期待せしが、其實彼の犯罪は殺人及び公財破壊に在りし事明白となり、彼は終に斬首の刑に處せられたり。然るに其處刑と之に繼げる同類の逮捕とは新なる社會黨の犯罪を豫示せしものなり。巡查は社會黨を一掃するが爲めに之と劇争し、殊に外國の社會黨員に對して然り。當時爆裂病は英國までも蔓延し、一人の社會黨は爆裂彈を盛りたる囊を携へてグリーンウィッチに赴かんとする途中、偶然破裂して自ら生命を亡ひし者あり。又一人メードレン教堂の入口に至り、勤行の最中、跪いて

祈禱せる衆信徒に向つて爆裂彈を投ぜんとしたる者の如きは、濫殺を謀れる者の中最も凶惡なる者なり。幸にして彼が之を投げんとて其手を衝りし時、入口の重量ある革製の自在戸は彼の方に跳ね返りしたため、其方向を誤り、入口の一部の外損害を被らざりき。

一八九三年の冬より春を過くるまで、斯くの如き殺害の企圖と犯人の逮捕審問を以て終始せり。一八九四年六月リオン市は技術科學及び工業の博覽會を經營し、大統領に臨場を請ひ、カルノー氏は常に半社會的なる政治上の本務を遂ぐるを任とせしかば喜んで之を容れリオンに至り、宿して翌日博覽會を觀閲して商業會議所の宴會に臨み、此日最後の餘興として特に設けし演劇を觀んとて午後九時馬車に乗れり。初め市廳より氏に護衛兵を附したれども、氏は宴會に列せし時已に之を謝して還らしめたるなり。然るに氏の馬車を驅るや一少年は突然氏に迫り、其手には一卷の紙の如き物を握れるが、直ちに馬車の踏臺に躍り上ると見る間に短劍を揮つて氏の腹部を刺せり。傍に居りたる人士は直ちに刺客を取り押へたり。而して巡查は辛うじて公衆が之を私刑に處せんとするを防ぎたり。

大統領は知事の官邸に移されたるが夜半を過ぎて直ちに死亡せり。兇漢は衆人に捕へられたる時社會黨萬歳と呼べり。彼は麩包を製することを業せし者にて生國は伊太利なり。本國に於て巡査の深偵を被りしかば、佛國に脱走し地中海に瀕する佛港セートに至り暫時此處に工作せし事あり。

第二章 大統領カシミールペリエー

大統領サディ・カルノーの横死は一八九四年六月二十五日に在り。これより一週日を経て、パンション(合祀廟)に葬られたり。是より前、氏の任期は六ヶ月後(一八九四年十二月)に満了すべき筈なりしかば、其後任に關する論争は已に盛なりしなり。或はカルノー氏を以て竊かに再任を圖りたりとなす者あれども、實は然らず。カルノー氏は曾つて密かに一人の前大臣に語つて曰く、余は憲法上と一身上との理由に據り再撰を辭するの決心をなせりと。此前大臣は氏が己れに繼いで内閣を組織すべき事を慫慂せんと欲したる人なり。而して穩和急進黨に算入すべきプリュソン氏の如きも亦適任の候補なりと言はれたるが、結局カシミールペリエー氏は兩院の合選に由つて大統領に擧げられたり。但し氏は嚮に大宰相の職に在り。而して代議院の票決に因り其位地を失ひしは僅か數週日以前のみ。

カシミール・ペリエーの屬せし門族は二百年間佛國の著姓なりしと雖、其族人は未だ曾つて「バルテイクル」生來の貴人の榮稱なる de を有する事を誇りし事あらず。然れども一族盡くド・ヒエーネに於ける富裕なる土地所有者にして、ハイ・フィリップの時代族中より大教正を出し、貴族院に於ける佛國の貴族を出だし、又最も著名なる大宰相を出せし事あり。然れども今日の富裕なるペリエー族は「ブールジョアジ」商業に従事する中流社會に屬し、貴族並に手工業者の嫌惡する所の者なり。夫れ此階級は佛國都會の住民中唯一の安固なる要素なるに、世間一般の敵意を挑發したる者はルイ・ブランクを以て嚆矢とす。蓋しペリエー族は政治に於ては無識の徒なり、商業に於ては資本家なり。これ歐米を通じて社會黨の怨府となれる所以なり。

カシミール・ペリエーが大統領に撰ばるゝや、「ブールジョアジ」に反對せる下等の新聞紙は一齊に氏を攻撃せしが、これ氏の祖先が中流的王政と關聯せるが故にして、中流的王政は即ちルイ・フィリップの世なり。又攻撃の一因は氏が「ストライキ」を以て有名なる石炭礦の所有主なるが爲めにして、社會黨の首領等は氏を以て攻

撃の目的物とせり。抑、巴里の劣等なる新聞記者等が敗徳漢にして、日々政府に對し法律に對し司法に對し、徹頭徹尾毒言を逞うするに就き、「デ・バ」雜誌は之を評して曰へり。他國の下等新聞紙の最惡なる仕業と雖、未だ之に比するに足らず。乃ち國家無上の尊位に在る者を誣ゆるに冤罪を以てして、恬然耻づる所なく、而して其反響は珈琲店其他の遊戯場に於ける野卑の惡言となり、時に神聖なる「ブル」この人民「パトリエ」終焉の地と云ふが如し等の神聖なる語を濫用するに至る。

夫れ然り。カシミール・ペリエーは其榮職に陞りしより自由の爲めに盡瘁せる日に至るまで常に非議を蒙れり。ポードレ・氏曰く、氏は外面果斷剛毅なるも沈着なる性質にあらずして、カルノーの有したる自覺力を缺けり。その己れの性質を誹謗し暴行を教唆せる記者等を追究するの習癖は、其不人望を來すべき事故をして絶えず氏の目前に現出せしめたりと。

カシミール・ペリエーは老鍊なる政治家なるが上に、數週日以前までは内閣の首席を占めたるを以て自ら以爲らく、己れは閣臣の撰擇に與るべく、又其施政に就

て門外漢とせられざるの資格あり、而して斯くの如きは併せて本務上然らざるを得ざる者なりと。

之より前デュブイ内閣は新大統領の撰立と共に辭職せし處、カシミール・ペリエは之に再任を求め、此内閣の中には一八九九年に於て吾人の耳に其名を爛熟せる人物あり、其他廉潔と外交術を以て著れたる諸名士あり、外交術を以て著れたる者は外務大臣アフトー、殖民大臣デルカッセ、海務大臣フェリールこれなり、而して廉潔を以て著れたる者は軍務大臣メルシエこれなり、又將軍ボアスデーフルは此時恰も參謀總長の職に在り。

カシミール・ペリエの在職七ヶ年間に起りし重大事件にして、遍く世界に關係ある者に至つては當時頗る曖昧にして緊要ならざるの觀あり、故に一八九四年のアプルトンのアンニエアル・サイクロビデアに記して曰く、

軍事上の破廉耻事件アルサス猶太人種に屬する砲兵大尉アルベル即ちドレフーは十二月二十二日叛逆罪を以て軍法會の審問を受けたり、探偵は外國公使館員の住宅より彼の自筆に係り、簡を發見せしが、其中には佛國要塞の

設計武器等に關する通報と之に對する報酬の事を記せり、彼は其同僚武官の判決を受け、平和の時に於ける極刑を宣告せられたるが、極刑とは終身要塞に禁錮し、並に武職勳位を擧げて之を褫奪するを謂ふ。

世人は凡て參謀總長の廉潔と才能を確信し、従つて軍法會議の判決を以て正當なりとし、余は冤なりとの叫聲は世人の耳に徹せざる事なほ往時パスチルの嘆聲が其石壁の外に達せざりしが如し。

一八九五年一月五日の寒氣凜々たる朝、ドレフーの黜罰を行へり、左は當時現狀を目撃したるアドルフ・ブリッソンの叙述に係る、但し氏は此時に於ける他の佛人の多數と同じく、ドレフーが陸軍より秘密書類を盗み、之を敵國に賣りたる事を信じて國賊となせし者なり。

一月四日午前八時余は兵學校へと家を出てたる處、河岸は強風吹き荒み多くの辻馬車はカンブ・ドマルの方へ向つて馳せ去り、街上には制服を着けたる役人が如何にも取り急ぎたる様子にて其上衣の「カラー」は皆耳の邊まで立ち居たり、又四方八方に分遣隊を見受けたるが、其中の古兵は列を成して進み、又新

補充兵は「ジャケット」と「キャップ」の服装にてこれ等は皆執行に参列すべき者なり、法律家中法廷の内部に入るを許されし者は甚だ多からず、群集は皆門外に止れり、彼等は粗暴なるが故に何時暴怒に出づるも亦知るべからず、八時四十五分、軍隊の後列到着するや法廷の四面に整列し、ドレーフラーは程なく其面前を通過すべき筈にて、半哩以上數千人の蔑視を受けつゝ来るなり、何たる「カルヴァリー」を(基督の磔刑を受けたる所の地名)通信員は特に取り置かれたる數百「ヤード」の空處に一列をなし、普通の兵士の如く肅然として凝立せり、兎角の中に時は近づけり、余輩は建物に傍ふて監獄馬車の来るを見たり、……彼よ……余輩は待つゝある間に彼を想像せり、彼の拷掠に列するが爲め召集せられたる兵士の歩調に従つて憂々たる銃劍の響は遙に彼の耳に入る、彼は如何なる苦痛を感ずべきか、彼が吾人の目前に来るときは顔色蒼然死するが如くならざるか、善く直立するに堪ふべきか、一時卒倒せざるべきか、斯く考へ來れば彼の罪を思ひに拘らず、其罰の餘りに酷なりと思はるゝ爲め、此不幸の人に對し哀憐の情に堪へざりき。

午前九時、兵學校の大時計より第一聲の響き渡るや否や、ドラール將軍は其帶劍を揚げたり、喇叭は響けり、この時裁判所の角に軍曹の指揮せる四人の砲兵より成れる一小團が一人の士官を取り捲くを認めたり。

此士官こそアルフレッド・ドレーフラーなり。

彼は頭を擧げぬ、其態度は嚴然たり、然れども極めて自然にして過矯ならず、詰君は定めて彼が徐々練兵場に赴く處なりと思ふならん、彼を擁せる一團は將軍を距る二十歩の處にて止り、將軍は高聲にて號令を傳へたり、アルフレッド・ドレーフラーは當に武器を帶ぶべからざる者なりと。

憲兵は直ちに前方に進み、それより殘忍なる拷掠は始められり、先づ紐と釦とを裂き棄て、其帽に附きたる聯隊の數號を剝ぎ取りたるが、最も苛虐なる一刹那は最後に憲兵がドレーフラーの帶劍を抜き己れの膝に當て、其刃を毀ち、其斷片をドレーフラーの脚下に投棄したる時なり、吾人はドレーフラーの所より遠く隔たりしかば、其顔色を記するに由なし、然れども激昂して四肢を動かせしが、如く見受けたり、將軍が宣告に臨み姓名を呼びたる時、彼は腕を擧げ強く鋭き聲

にて叫んで曰く、佛國萬歳余は無罪なりと。
憲兵は己に其なすべき事をなせり。軍服上に燦然たりし金飾は地上に委して堆く、其役務の所屬を表するツポンの赤條の如きも亦剝ぎ取られ、ドレフューは今や全く黒色のみなるジャケットを着け、黒色のキャップを戴ける故初めより罪人の服装をなせしが如し、已にして不吉なる護衛は再び動き始め、叛逆人は吾人の目前を過ぎんとす。而して吾人は殆ど彼を見るに忍びざりしなり。彼は來れり。ドレフューの激昂は次第に烈しく、絶えず叫んで曰く、余は無罪なり。佛國萬歳と、門の一方に於ては群衆が彼を認むるや否や嘲罵を極め、ドレフューは之を聞き一層其怒氣を増せり。

彼が將校等の一群を過ぎし時、往けデダの語を聞けり。彼は憤然と發言者の方を振向き、余は無罪なり、余は無罪なりと力を込めて連呼せり。
今や余輩は明かに彼の面貌を認むるを得て、暫時の間精密に之を研究せしが、これ竊かに精神の反映なる其相貌に因つて肺腑を窺はんと欲したるなり。但し心中の隠微に至つては獨り軍法會議の議員が之までに洞察せし所なり。ド

レフューの顔面に於て最も著るしかりし者は怒にして、其怒は最早自制の程度を超え、其唇は上下に分れ、眼中は血走れり。余等の確めたる所に據れば、彼が傲然倨傲なる態度を取つて歩行せしは、憤怒の爲め其神経が破るゝばかりに張詰め、殆ど夢中なりしに由れるなり。

彼は余輩の傍を通過して見えなくなりぬ。又後に残りたる余輩は疑惑を生じ、不思議の念を起せり。即ち彼の心中には何物が潜めるや、彼が失望に奮興して己れの冤罪を抗言するは如何なる動機に因りしか。彼は輿論を欺き吾人を惑はし彼を罪せし法官の忠直を疑はしめんと欲するか。而して下の如き考は電光の如く余輩の心に發せり。彼若し罪なかりしならば其苦痛果して如何なるべきと。

然れども余輩は此考を斥げたり。道理は余輩の感情に勝てり。余輩は謂ふ、かれ決して無罪にあらず。彼が佛國軍隊の最も純粹にして最も正直なる成分に因つて辱められたる事に至つては復た疑ふ能はず。又決して疑はざるなり。彼の有罪に就ては何等の異議なきを以て觀れば實に賣國奴なりと。

此苛責の後ドレフューは佛領ギヤナの海岸を離れたるデヴィル島に放たれ、爾後文明諸國人心が其艱難に同情を寄せ、何人も佛國の狂暴者を除き、彼を無罪となせし時に至るまでは再び公衆の前に現はれざりき。

「チーレン」に云ふ、ドレフューは佛國無名の一大尉のみ、然るに其審問は内外上下の耳目を集め、國王若くは極悪人の審問と雖斯くの如く深沈なる注意を引きしものならずと、この審問處刑並に之に牽聯して一八九九年の際世界がドレフューの名を喧傳するに至りたる事件は、將に次章に於て述ぶる所あらんとす。然れども茲に言ふべき事も亦少からず、彼の審問に關係して一八九五年の恐戦病を作為するの必要は安くに在るや、秘密書類を法官に示しながら罪人と辯護人との隠せしは何故なるや、政府は國民に告げて云へるには、これ國家焦眉の念を救ふ爲めに然らざるを得ずと、而して、焦眉の急とは獨逸との戦争に外ならず。然れども今日に及んでは伯林の宣告に據り、大統領カレミールペリエーの在職せし一八九五年には決して斯くの如き危険なかりしことを知る、これを以て之を觀れば、佛國に災を及ぼす、佛國は危急なり」と云へるが如き語はドレフュー第一

審の時其秘密と不正を曲庇するが爲め捏造したる者のみ、勿論軍法會議は秘密に附することを得るも、文書の中に新事實を摺入し、人名は只Dの一字を書したるをば本人并に其辯護士に知らしめず、検閲を許さざるが如き、此様な偽文書及び矛盾と事實に根據せる判決を下せしが如き、適以て豫めドレフューを罪に負はすの決心あり、又一大權家の一動機が斯くの如き證據を準備し、之を施用せる人士をして自衛の策に出でしめたるを見る。

ドレフューの事件に牽聯して徒に一八九四年の佛國將校の清白を云々する者あるも、これより二年の後二人の大尉は外國人に秘密を賣りたりとの告發を受け、有罪と決せられしを如何ん、彼等はアルサイス人にもあらず、又猶太人にもあざりし、而して此事件は、佛軍軍隊の名譽の爲めに多少靜穩なる落着を致せり。佛國政府は稍以前より「メリニート」と云へる新らしき爆薬を有し、務めて其成分の秘密を保たんと欲せり、然るに「テュルバン」と云へる砲兵士官は「メリニート」の主要成分「ピクリン」酸なる事を發明し、若し佛國が口止金を與ふるにあらざれば此秘密を外國に賣るべしと脅かし、佛國政府は終に五萬フランを與へて秘密を守

らしむる事とせり。然るにテュルバンは更に之を外國の會社就中英國の大鑛砲業者なるアームストロングに賣つて金を得んとし、此取引にトリボチーと云ふ砲兵士官はテュルバンの代理となれり。然る處本人と代人との間に爭論を生じ、其結果彼等の秘密は世間に洩れ、軍務卿フレシチーは止むを得ず軍機漏洩の罪を以てテュルバン、トリボチー並に二人の士官を審問に附せり。法廷は傍聽を禁じて證據を審理せしが、これ斯くの如き場合に於ては正當なる者なり、而して其宣告は當時に在つて非常に嚴酷なるの程度にしてテュルバン、トリボチーの二人は五年の禁錮と巨額の罰金を課せられたり。然れども世人は直に疑團を生じ以爲らく、眞實の罪人は高等の武官なりと、又以爲らく軍務卿フレシチー氏の正直は嫌疑の外にあれどもは要職の武官を庇護せんと謀りたる者にして、若し之を法律に問ふ時は佛國軍隊の不信を來すべきが故なりと、此問題は一八九一年六月を以て代議院に提出せられ、判決はフレシチーに利ありしと雖個人的の扶助は甚だ熱心を缺きたる爲め、氏は討論に於て平生の沈着なる態度を失ひ、機會あらざる辭職せんとせり。

その後代議院は新に法律を作り、テュルバン、トリボチーに加へたるよりも更に峻嚴なる罰を課することとなし、秘密を洩らしたる特別の場合に終身禁錮若しくは死刑に處するの條文を設けたり。之より以後フレシチーが參謀本部と交渉するを憚りし所以の者は、再び賣國奴を庇護するの嫌疑に遇ふべきを恐れられたるなり。已にしてテュルバンは放免せられたるは如何なる勢力の致す所なりしや、吾人之を知らず、而して一八九四年早々將軍メルシエが軍務卿たりし時代、代議院に於て劇論あり、烈しく政府を攻撃せしが、これ將軍メルシエがテュルバンとの交渉を拒絶せしが爲めなりしが、テュルバンは佛國政府に向ひ敵前數里の場所を一掃すべき新軍器の買上を求め、而して右は、ピタリン酸を含有せる彈丸を發射すべき大砲にして、此の破裂するや其中より又同種の彈丸を迸出すべき者なり。一八九五年一月十五日カシミール、ペリエーは突然元老院と代議院とに辭表を出し、佛國及び全歐をして驚愕せしめたり。蓋しその大統領の職に在るや僅々六ヶ月のみ。

其言に曰く、余は決して國會が余に任じたる責務の困難を履さざるなり、而して

此困難は余の豫期せし所なり、凡そ危難の時に際し進んで其地位に就く者が其威嚴を保有する所以は、唯其國に盡さんとするの精神に在り、わが共和國の大統領は施設監督の手段を與へられざるが故に、獨り國民の信用より道義の効力を受くるを得るのみ、若し此力なかりせば大統領たる者何事をもなす能はず、余は佛國人の常識を疑はず、又正義を疑はず、然れども輿論を誤るべき企圖の成功せしを如何んせん、余は同一の主義の爲めに相争ふや二十年餘年、共和國に附隨し民主政に眷々たる者亦二十餘年、然るに未だ共和人士をして余の政治に於ける賊心鋭意を解せしむる能はず、又政黨をして余を以て彼等の熱情希望の機具となるべしとの惑を解かしむる能はず、六ヶ月の間軍隊と云ひ、有司と云ひ、國會と云ひ、大統領と云ひ、共に誹謗嘲笑の衝に當ると雖、大統領は之に就て責任を負ふ能はざるなり、彼等は今なほ離間中傷を鼓吹するの自由を稱して思想の自由なりとなす、夫れ大統領は合衆國第一の臣僕にして又外國に對して合衆國を代表する所の者なり、然るに日々侮辱を受くる事は余が自國の爲めに服膺する尊敬正より功名上より斷じて容す能はざる所なり、余が斯くの如き無勢力の境遇に

在りながら余の負へる道徳上の責に任ずるを肯んぜずと、
 デアンカシミール・ペリエは、ルイ・フィリップが脱走に及び第二共和政府の假設せられたる一年前に生れ、普佛戦争に従ひ邊疆の役に於ても、巴里城守の時に於ても軍功あり、レシオン・オプ・オノアの勳章を授けられ、一八七一年初めて政界に入り、内務省の一官吏たり、未だ幾くならずして代議士となり、常に穩和共和黨と事を共にせしが、一八八三年に通過せられたる法律は、曾つて佛國に君臨せし一族に屬する者の公職に在るを禁ぜし者なるが、彼が此時辭職せし所以は、家族の義務と共和主義の感情とを調和する能はざりしが故なり、一八九三年代議院議長の榮職に撰ばれたる處、大統領カルノーより大宰相となるべき懇請を受けたる爲め、忽ちにして議長を辭せり、但し彼は豫想せり、大宰相は己れを煩累の渦中に投ずる者なりと、而して彼の此職に在ること數ヶ月にして内閣は顛覆せしが、これ大統領カルノーの殺害に遇ひしより少しく以前なり、而して嚮に其大宰相たることを妨げたる選舉者は、第一次の投票を以てこれを大統領に撰べり、時に一八九七年六月二十七日なり、而して氏と反對の候補者は、ブリスソン及びデュブイの

二人となす。

カシミアール・ペリエーは少壯より公務に身を委ね來りしより自ら以爲らく、其政治家たるの閱歴は之を國家の經綸に適用すべからざるの理なしと、然るにデュブイ及び其内閣の意見は之と異り、ペリエーの干渉を受くるを好まず。又彼が巴里の下等新聞紙に攻撃せらるゝに方り彼を扶くるの意を有せず。

社會黨の首領は凡そ以て巴里の無政府黨と暴徒を挑發すべき手段は一としてなさざるなく、其目指す所はラヴノール、ヴェヤン並にヘンリーの死刑宣告書を批准せし人なり。此ヘンリーは會つてガール・サンラザールに近き音樂會の聴衆に爆裂彈を投じたる者なり。

一八九四年の終に於て世上の耳目を引きたる醜聞は、ドレフュー事件の秘密裁判にあらずして南部佛國の鐵道に關する醜聞なり。之より前一八八三年政府は若干年を限り此鐵道の株券の利子を擔保せしが、其條件は商業上の利益を謀らずして軍路上の用に供すべき支線を設くるに在り。此協商の任に當りし大臣はベリエーの親友レノナルなり。一八九四年には此擔保は國庫の重荷となりしが、之

に關する疑問は此擔保が三十年間に於て一九一四年に至り終るべきものなるか、將た株券拂戻の時期なる一九六〇年まで繼續すべきかに在り。蓋し原契約の條文が甚だ漠然たるが爲め斯く如き解釋の相違を生ぜしに外ならず。レノナルは政府の責任期限が債券拂戻の期限と同一に解釋せられんとを望み、議會は一九一四年には新に協定をなすの權ある事を主張せり。此時に當り株券の價は額面より二三百フランを超え、之を有する者は大金を贏けたる處より資本家攻撃の聲を呼起せり。會、大統領の子エルネーは鑛山技師として一の鐵道會社に金銭上の利益を有せしかば、ベリエーの財産に關し凡ゆる虛構惡意の流説あり。レノナルは最も甚しき罵詈を被りしが、大統領はレノナルと親しかりしより反對黨は之を利器として大統領從來の貪婪なる性質を攻撃せり。

加之大統領は日々、無政府黨より威嚇の書簡を投ぜられたるが、無政府黨は大統領を初めとし其家族を殺害すべき事を以て脅迫せり。大統領は鋭感短氣の人にして將軍ガリファデー侯の如く、新聞紙公衆若くは代議院の讒罵に對して平然たること能はず。デュブイは現に閣員なりと雖會つてベリエ

ト大統領の候補を争ひ敗れたる人にしてペリエーとは親しからざるに、之に勸めて地方の悪評に關する知事の報告書を一々閲覽すべき事を以てし、カシミール・ペリエーも亦自ら巴里新聞紙の評論を通讀すべき事を主張せり。且つペリエーは數月前大宰相の職に在り、現在の閣員は當時の閣員なれば宜しく信用を置くべきに反つて之を度外視して公務を秘したるが如き、ペリエーの最も嫌焉たりし所なり。大藏大臣ポアンカレは代議院に豫算修正案を提出せしが大統領は毫も與り知らず、外務大臣並に陸軍大臣メルシエー將軍の如きもたま皆大統領をして外交上の公務を知らしめず、ドレフエー事件に於て殊に然り。乃ちメルシエーが三萬六千の現役兵を除隊の上その郷里に返らしむべき設備をなすや大統領に一言をも洩す所なく、西班牙の攝政皇后より大統領に宛てたる手紙に至つても西班牙公使が大統領に話し出せるまでは之を差押へ居れり。

社會黨は公會を開き印刷を布きペリエーの非議囂罵を逞うし、元兇の一人デューロール・リシエーは審問に附せられし處、唯一人の陪審官の爲めに之を有罪となす困難を感じり。

而して彼は監獄に送られたるより未だ一週日を経ざるに巴里の一撰舉區より代議士に撰ばれたり。但し此地方の撰舉人は大抵職工なりしなり。代議院はジュロール・リシエーを拒み僅の多數に因つて之を可決せり。

ペリエーは其内閣の助を失ひ、代議院の助を失ひ、自身は言ふに及ばず其家族に至るまでも新聞記者等の攻撃を免れず、内閣の無視する所となりしかば、己れも亦何等の勢力なき事を自覺せり。

彼が終に倒れたる原因はドレフエー問題に關聯せる偶發の一事件なり。參謀本部の通信部は詭計を以て巴里駐在の獨逸公使が皇帝ウリアムに宛てたる通報を中途にて奪ひ、之を査察し謄寫し、然る後務めて迅速に伯林に郵送せしと雖、固より延着を免れず。獨逸帝は此亂暴に激怒し大統領ペリエーに訴へしに、ペリエーは已むを得ず閣員が已れに隱蔽せし爲め毫も其事を知らざる由を自白せり。

獨逸帝は佛國大統領の屈從なる謝罪を容れたり。然れども此事件は所謂恐戰病の源因となり、將軍メルシエーがドレフエー事件に於ける秘密文書の隱蔽を辯証して正當となせし所以茲に存す。

是に於て大統領は益々信じて以爲らく己れの境遇は大統領の本領たる地位にあらず。己れの如き性質の者は佛蘭西共和國の大統領たるに適せずと初め其就職せんとするや固より躊躇せざりしにあらず。然るに會、カルノーの刺殺せられたる後にして大統領の職が身上に危険なる地位なりしより反つて毅然之に當りしなり。蓋し彼の母は豪膽なる婦人にして氏に謂つて曰く、ペリエーたる者危難に臨み決して逡巡する勿れと。

カシミール・ペリエーが元老院と代議院との卓上に辭表を留めて私生涯に復せしより以來、初めて公衆の前に現はれしは一八九九年八月レンヌに開かれたる有名なる軍法會議に被告の證人として召喚せられたる時なり。

抑、第三共和政府の時に方り十九世紀の終に於ける排セミテック黨、社會黨、正統派、僧黨、ボナパルト黨、デモソンの餘流に至るまで各種の不平は佛國社會の裡面に沸騰し、社會黨の領袖等がペリエーを攻撃して之を倒せしは是等不平黨の最も喜べる所なり。

第三章 大統領 フェリックス・フォーレ

一八九五年一月十七日國會は激論もなく騷擾もなくフェリックス・フォーレを大統領に撰舉せり。初めウルデック・ルソー(穩和共和黨は第一投票に於て多數を得、ブリスソン(穩和急進黨)は更に多數を得たるも、第二投票に至りウルデックは引退し其票數はフォーレに歸し、茲に其當撰を得たるなり。氏は前内閣に在つて海軍大臣の職を忝くせしと雖、ポードレの言に曰く、此前の元日に當り政界の中心たる巴里に於てすら、氏の名を知れる者は恐らく千人の中一人もあらざりしならんと。乃ち氏が大統領となりたるは宛も一八四四年デュームスケー・ホルクが北米合衆國の大統領に撰舉せられたると同日の談なり。然れども議院の事務に就ては頗る同僚に知られ、凡て實際の業に於て之と事を同じうせし者は皆其遠識あり敏才あることを認めたり。又其議院に於て代表せるアーザルにては市人の尊敬を

受け信用を得たり。蓋し佛國に於て議員に撰ばるゝ者は率ね辯護士、教授、醫士、新聞記者、商業家にして、内閣に入り或は立法に撰出せられたるフォールの如きは殆ど罕なる事なり。

フォールはペリエー、カルノーの如き歴史上の餘光ある門地にあらず、グレイヴィーの如き政理家にあらず、マクマホンの如き武名を有するにあらず、ライエーの如き世界的聲譽を負ふにあらず、然れども其和樂なる儀容、其方正なる品行、社交の務を行ふの快活なる、これ輿望を一身に集めたる所なり。かのカシミール・ペリエーを誹毀排擠したる社會黨は中流人士を憎み、何等の門閥なくして只管社會に於ける富力を渴望し、殊に財政に關する一切の事を左右せんとする者となせしが、其初めは尙未だフォールを以て此種の階級に屬する者と認めざりしなり。然るに新大統領の人望隆々たらんとするを見るや以爲らく、これ一資本家一傭主が社會の各級より好評を得るものなりと、俄に疑懼の念を生ぜり。是に於てフォールが大統領となつて僅に一ヶ月を過ぐるや、彼等は國家に危險なりとの聲を發せり。

フォールが「ブルジョア」なる事に至つては此語に屬する何れの意味に従ふも亦争ふべからず。是に於て彼を扶翼する者は彼の生涯が手工者に始まり自力に食める人なる事を證明するを得策とせり。彼の祖先はプロブンスに出て、其父は巴里に來つて小規模の家具製造を業とせり。フェリックスは一時皮工の丁稚たりし事あり。是を以て其撰立せらるゝや、巴里の到る處に流行したる其肖像畫は、處々血痕あり塵芥に汚れ、寛濶不恰好なる職工の服裝を着けし者なり。フェリックスの仇敵は其「ブルジョア」なる事を以て之を攻撃せしと雖、以上の理由に因つて無効に屬せしかば更に攻撃の銚を他に轉ぜり。蓋し佛國に於ては商業上の失敗は失敗者の一族をして盡く信用を失はしむる結果を致すが故に、彼等は此點に於てフォールを害せんと欲し極めて卑劣なる謀計を運らせしも、其事の明白となるや反つてフォールの地位をして鞏固ならしめたり。然るに政界の下劣なる輩はフォールにして自ら辭職せざれば其家庭の醜態を暴露すべき事を以て之を脅せり。而して其醜態なる者はフォール夫人の父が夫人の生前に信託違背の行爲ありて失踪せしと云ふに過ぎず。フォールが今の夫人に結婚を求めたるは此

事ありしより二十年の後なりき。當時夫人はなほ少女なりしが、フョールに語るに父の事を以てせり。然るにフョールは女子の家名に汚點あるが爲めに敢へて其愛を絶たずして結婚を遂げたるなり。此事情の世間に傳はるや何人もフョール夫妻に信を措かざるなく、其結果佛國は初めて其大統領の眞價を解し以爲らく、其家庭に於て斯くの如く尊ぶべき人なれば公事に就ても亦必ず剛勇なるべしと。現制に據れば佛國の大統領其他特別の高位に在る者は、本務の第一として觀兵式を行はざるべからず。病院を訪はざるべからず。博覽會に臨まざるべからず。新築の隅石を安んぜざるべからず。地方を巡視せざるべからず。然るにフョールは一々之を實行して職務を全うし敏勉にして懇切を極めたり。フョールは身材高く肢體宜しきを得、態度の威嚴はカルノーに比すべく、其秀雅なることは之に過ぎ、佛人の稱、善良なる階級に屬する者は、フョールが曾に大統領の虚榮を帯ぶるに止まらずして、實際國家の首長となり、慎重にして効驗ある勢力を政治上に及ぼすべき望を抱くに至れり。然れども纏綿せる事情はフョールの如何ともすべからざる所にして、其勇氣其細心其熟練を有しながら亦尙其先輩諸人の如く國家に於け

る地位は恰も暴風雨の中に簸動せる船舶の船頭像に過ぎず。是を以てフョールは政治に執掌すること四年の後、勞苦と失望とに因つて其精氣を消耗し終に之が爲めに死亡せり。

フョールが大統領となりしより二年の間は世界に影響すべき事件あらず。只國會の爭論が激烈なりしのみ。蓋しカルノー、カシミール、ペリエーの大統領時代、國會の辯論の特色とすべき者は猜疑と過激との二者なりしが、右は延いてフョールの在職時代に及び、凡そ公人たる者は殆ど一として貪汚の疑を受けざる者なく、バナマ事件と南佛鐵道事件とは共に復活せり。かのアルトン、ヘルツの二人が事實の漏示を申出せしは此間に在り。但しヘルツは結局其申出を撤回せしもアルトンの白狀により公人の逮捕せられたる者あり。然れども此事件は最早世人を變動すること以前の如く甚しからざりき。

外務大臣アノトーは少壯の人なれどもこれより前名聲己に噴々たり。其就職に就きガブリエー、モノー(一八九五年より六年に至るまで熱心なるドレーフ、ユイ黨)は左の言をなせり。一八九四年の終に於けるドレーフの處刑に關し佛國人は盡

く軍法會議の誠實と才略とを信ぜざるなく、アノトりの遭遇せる大事件は一二に止らず、ドレフュー大尉の叛逆は國家の一大問題なりと謂ふべし。何となれば犯罪の證據たる主要なる文書は外國政府の手より窃取せし者なればなりと。吾人今日より之を觀れば當時アノトりは獨逸と遽に開戦の恐ありしにあらず。然れども懸案に屬する他の國際問題にして氏の巧妙なる處理を要する者あり。日清戦争は方に平常不和なる歐洲の諸國の争を引起すべき憂あり。而して東西阿非利加に於ける英佛の關係は益紛錯に赴き、加之マダカスカルに在りては佛國は嚮にアノトりの意見に反して、白人累の企圖に従事し、今や其弊に堪へず徒に軍費を損し人命を失ひたるのみにて、名譽上何等の得る所なし。又東歐に於ては希土戦争方に迫り、クリートの亂徒は之を援くるか之を壓するかの二途を擇ばざるべからず。アノトリア虐殺問題に至りては殊に解決を要す。ガブリエリアノトりは一八五三年ピカルデーのサンカンタンに近き處に生れ、獨力自立の人なり。祖父は伶俐なる一小民にして己れの土地の耕作を事とし、事務の才は隣里に推重せられ平生過失なかりし人なり。其子ガブリエリアの父は公

證を業とし、其子をサンカンタンのリセー校に入らしめたるが、其勸勉にして畢に耐へ且つ信切なりし爲め頗る同校生の人望あり。終に優等の學生となり殊に歴史の好尚を以て著はれたり。但し進取に銳意なる形跡なかりしと雖、切に何事をも善くせんとするの志を抱けり。尋てリセーを去り父の命に従ひ法律を學ぶが爲めに巴里に赴けり。然るに父の姪にして巴里に住する者あり。其夫は歴史家ヘンリー・マルティンなり。アノトりは此婦人を訪ひたる時婦人はアノトりの方言は公場の辯士として人を動し難きが故に、辯護士となるも巴里に於て成功する能はざるべしと云ひ頗る其望を妨げたり。然れどもマルティン氏は之をガムベッタに紹介し、ガムベッタは之を備ひ己れの發行する、ラレバブリック・フランクに載すべき十六世紀十七世紀と云へる篇題の文を草せしめたり。アノトりは又古文書局の一員となり、カルデナル・リシェルの詳傳に供する材料の蒐輯に努力せしが、不思議なる事には從來此人の事跡に就ては未だ良史家あらざりしなり。アノトりは尋て講師となり、オート・エテュード校に歴史を講じ、また外務省に用ひられ書記長に進みたるも、以上の職業は共に得る所甚だ少なく、其生活の極めて質素な

りしに拘らず其費用を辨ずるに足らざりき。一八九一年ガムベタの大宰相となるや、アノトーを以て内閣の秘書官とし、一八八六年公使に従つてコンスタンチノープルに赴任せり。

不幸にしてアノトーは從來未だ會つて旅行せしことあらず。英文を讀むことを解するも外國語を談ずる能はず。これ政治家に取つては非常の不利益にして、外交に關する職務に在る者に於て殊に然りとす。然れども土都に於ては頗る其の上官に裨益する所あり、ブルカン事件の處置には最も功績を顯はせり。其佛國に歸るや郷里の州より代議士に撰出せられたる處、會佛國の北部就中ピカルディはブーランゼーの爲めに狂せるが如き状態にあり。之を一八八五年とす。乃ち毅然としてブーランゼーの目的方法に反對する代議士の如きは勢撰區の人望を失はざるを得ず。之を以て次の總撰舉に至りアノトーを再撰すべき公會は妨害に遇ひ争闘を生じ無事に終れることなく、甚しきは彼を死に陥れんとする毒計を設くるに至る。其結果アノトーは落撰に及び爾來復び議院に入るべき運動をなさざりしが、初め彼が議院に在るや商人たるの資格を見はしたれども、政治

演説家の伎倆を見はさざりき。

一八九四年五月少しくカルノの死に先だつてカシミール・ペリエーの大宰相なりし内閣の外務大臣となり外交の手腕を揮ひしかば、ペリエーの後を承けたる急進黨の大宰相は留任を請ひたれどもアノトーは之を肯んぜず。氏はマダガスカルに關する内閣の意見を無視せり。其意は佛國が埃及事件に於て英國を拘禁すべき一大雄圖に勢力を集中するを得るに至るまでは英國の怒を避くるに在り。而して其職に復せし時はマダカスカルが已に佛國に併せられたる時にして、東亞の佛國殖民地に關する英國との條約の如き氏より之を視れば不満足なる者なりしも、氏は既遂の事實として承認に及び、更に西阿に於ける兩國領土の疆界に關する協商に其心を用ひたり。此協商が如何に成功せしかは英人がソリスベリー卿を咎め、佛國との齟齬を避けんが爲めに英國の利益を犠牲に供したりとなせしに因つて之を見るべし。然れどもソリスベリー卿も亦英國の西部及び中央阿非利加に於ける利益は、埃及に於ける利益に比して言ふに足らざるを熟知せしなり。アノトーは常に露國との親交を保持するを念とせしが、露國

公使ロバートとの私交最も親密なりしと云ふ。シエールロートは、デュムソンン侯入の後、英領の人望を失ひし時、パリを經過せし砌、アノトを訪ひ之に問つて曰く、余は今日在れども亡きが如し。余は實に失意の人なり。然れども他日或は再び世に出づるならん。

佛國が來世紀に於て、ルイ十四世の時の如き殖民勢力を回復すべきことは復た望むべからざるに似たり。佛國は蠻人の住土を歐化するに足るべき佛人を有せず。これ他なし。殖民地を發達すべし者は少壯なる佛國人なるに、其危然たる軍隊に之を吸収するが故なり。又英國は才能あつて正直なる殖民監理者を有し、是等は事務に鍊達し好んで國家の爲めに身を天涯に投ずる者なるが、佛國は之を有せざるが故なり。又殖民發達の爲めに巨額を投ずるの會社なきが故なり。

佛國の殖民經營の理想は各新領土を以て佛國の一州となすに在り。是に於て之に派するに軍隊を以てし、郵便電線を設け直ちに州制を布きたれども如何せん。軍人官吏を除くの外、國中一人の佛人を見ず。加之資本家は小膽なり。國會は干渉を行ふなり。正直才能の士の故國を離れて斯くの如き遠隔の地に行く者を得難

きなり。之を以て佛國は非常なる犠牲を費せしに拘はらず、何等の効を收むる能はず。斯くの如き事體は他國に實地の教訓を垂るゝ者なり。然るに我米國に在つては國民熱中の時に際し、前車の覆轍に鑑みる者殆ど罕なり。

一八九六年露國皇帝と皇后と即位式の後、共に歐洲を漫遊し、パリを過ぎて歓迎を受けたるが、其盛大なる同國の艦隊が來訪せし時の比にあらず。エリジの宴會に於て大統領フールは祝辭を述べて曰く、陛下の臨幸は兩國の圓活なる動作を連結し、互に其國運に關する信念を固うし、而して有力なる帝國と盡瘁せる共和國との合同は已に世界の平和に利益ある効力を及ぼせりと。露帝は之は答へて曰く、朕は忘るべからざる緣故を重んじ、斯くの如き條約に因つて朕の關係を有する國家の首長を助はんが爲めに來れり。而して朕の大統領に望む所は朕は歓迎に因つて最も幸福なる感動を得たることを全國に傳ふるに在りと。

此時、パリに集りたる人民は一百五十萬に及べり。蓋し佛國は獨逸を屈じ、アルサース、ロレンスを恢復するの夢想を懐きしかば、ポードレー氏の言に曰く、群衆は佛國の孤立を救ひたる同情的國民の元首を喝采せり。未だ知らず、共和國とし

て兄弟に均しき米國が當日の露國たる地位に立ち而して米國の大統領が佛國の市民とブルザルトを散歩せしならば、果して佛國をして露帝を迎ふると同一の満足を生ぜしむべきか、佛人は實に露帝其人を崇敬せり、これ其一言は能く露國の大兵を動かして佛軍と共に戰勝を事とすべきが故なり。

佛國の大統領は成規により公共の祈禱會に臨むを得ず、公會の談話に神の名を言ふを得ず、これ排僧黨の敵視を恐るゝが故なり、彼は又他の官吏の如く少數者の威嚇を恐れ、務めて職掌上より寺院に臨むことを避けたり、ポードレ氏の言に従ふときは寺院は不名譽の場處なり。

フールは、オルレ안의處女の雕像を慶せんが爲めにレームに至りし時の如き、宗教上の儀式の終るを待つて纔に此神聖なる寺區に入れり、但しシームはオルレ안의處女が此地の本寺に於て、オールの七世の王冠を戴かせたる緣故を有せり、然れどもフールは其在職中唯一回公然ノートルダムに詣りし事あり。

露帝の巴里に至りし時、佛人が敬虔の意を表せし中に於て甚だ奇とすべきは、共和政府に宗教上適宜の處置を知らしめたる事なり、蓋し露帝は佛人の國賓

として其多數の奉ずる宗教に敬禮を表せんとするの志望を述べられたるに因り、大統領は茲に公然ノートルダムの中央本寺に詣りしと雖、これ數百萬の舊教徒より撰立せられたる大統領の資格を以てせしにあらざして、外國君主の隨員たる資格を以てせしに過ぎず、露帝は佛國政府に向ひ、己れが基督教君主として佛國の推戴を受けたる由を告げ、佛國に来るや第一の公務は堂々たる鹵簿を以て露人の寺院に親臨するに在り、但し其英國及び獨逸を訪ひし時は斯くの如き儀式を必要とせざりしに、獨り佛國に於てのみ此舉に出でたり、抑露佛同盟の結果中最も奇怪なるは佛國政府がこの偉大なる同盟國の歡心を得んが爲めに、平生自國男女が崇重なる宗儀を行ふを冷眼視するに似ず、俄に舊教の祀典を擧げたる事なり、又佛國の大官はロマノフ王家の生日及び其他の慶節毎にルダリーの露國教堂に聚つて祈禱を行へり。

佛國は何が故に根本より己れと異なる國民の同盟に就て斯くの如く熱中せしか、ポードレ氏曰く、十九世紀の末に於て佛國が露國を尊重したることは、大國が大國に對する態度より觀るも、民主國が專制國に對する態度より觀るも、歐洲

に於て未だ嘗つて有らざる國際上の奇觀なりと蓋し十數年前までは佛人を擧げて普渡蘭に同情を注ぎしに一八七一年の國難以來は專心銳意アルサース、ロレーヌの恢復を圖り其他を顧みるに暇あらず然れども此二州はもと佛國の要部にあらず従つて佛國に取り佛人に取り貴重なるが爲めにあらずアルサースの小民は獨逸語を存し其巴里人に於ける猶ガリリ人がデユルサレムの猶太貴族に於けるが如し余輩は一八三九年、四〇年、四一年、四七年、四八年の間巴里に住しアルサース生れの家僕數名を有せしが此際彼等が巴里人と接觸する時眞正の佛人と視做されざる事を目撃せりかのドレフネー事件に徴するもドレフネーがアルサース人なりしことは佛國の官吏をして埃地利に生れたる者に對するより更に惡感情を抱かじめたるにあらずや佛國が此アルサースを得たるは一六九七年にして半ばは外交に因り半ばは戰勝に因れり然るにルイ十四世は此地の有するに足らざることを實驗せしかば若しマルブラケの戰後平和の條件として要求を受けしならば之を獨逸に返すに吝ならざりしなり

ロレーヌはロレンヌ公がメスカニト大公國と交換せし處にして大革命を

去る僅々二十三年前に在り此地はアルサースに比すれば佛國的なり故に一八七二年の役フレンジック皇帝(當時普國の皇太子)は佛國の保有を許されとせしにフンメルトクの説は軍事上獨逸は其新疆土を保護するの必要よりメツを有せざるべからずと云ふに在りフレンジックの意見は遂に行はれずして止めりこれ佛人の大に衰成する所なり

アルサース、ロレーヌの人民は何れの點より視るも獨逸の爲めに抑壓を被むれるにあらず然れども佛國は何事を措いても此二州を回復せんと欲し第二帝政の時ニーズ、サヴォイを併せたるが如きは殆ど眼中に留めず乃ち佛人は露國との同盟を以て復讐の第一着となせり然れども露國は明かに佛國の同盟を求むる目的の茲に存するを知るが故に他日佛國が其援助に因り歐洲の版圖に變更をなすを得るの日に至り報酬を受くるの約束あるにあざれば容易に緊密の同盟を結ぶべしとは想はれず然らば露國の交換問題は安くにか在る彼はコンスタンチノープルを得地中海に門戸を得んと欲する者にして其志望の切なる佛人がアルサース、ロレーヌの恢復を欲するに譲らず

これより先き露佛は會つて一たび同盟せし事あり。此時に當りアレキサンダー一世とナポレオンとは、アルプスに於て歐洲を分つて東西兩帝國となすの計を畫せり。然れども其約束の破れたるは即ち此點に在り。これナポレオンは露帝がコンスタンティノールを得んとするの志を遂げしむるを欲せざりしが故なり。

一八八九年に至るまでは露土同盟の條約は兩國政府の専ら心力を注ぎし所なり。已にして一八九四年大統領カルノー大宰相カシミアルペリニエは共に同盟の豫定條約たる軍事上の規約を批准せり。然るに幾くならずしてカルノーは暗殺に遇ひ、カシミアルペリニエ繼て大統領となり、アノトトは其私交ある露使ロバノンと協商を進行し、ロバノンの死するやムラヴェフ伯之に代れり。

尋て露帝は巴里に來遊し、フールは答禮として一八九三年の夏軍艦に乗じて露國に赴き佛國艦隊之に従へり。之より先き佛國政府は同盟と云ふ語をば慎んで用ひざりしが、これ條約の明確に批准を終るを待ちたるなり。然るに人民に至つては一日も早く政府より此一語を聞かんと欲せし處、佛國艦隊が將に回航せん

とするに當り、八月二十六日旗艦ポトオアの甲板に宴會を開くや大統領の演說中、親密にして同盟せる兩國が文明に關し法律に關し直道に關する共同理想の理想に従ひ、最も誠實にして忠直なる兄弟の好を結ぶの語あり。露帝は之に答へて曰く、卿が吾邦に滯留せられし事は、公正の精神を以て全力を揮ひ世界の平和を維持せんと欲する同盟せる兩國の新連鎖を締結する者となりと謂ふべく、朕は之を見るを幸とすと。

此數語は露佛兩國が世界の平和を維持するが爲め共に同盟國となり、神聖なる條約を以て結合したる事を世界に宣言せし者なり。

之に由つて之を觀れば露佛同盟は各其欲望を遂げんとするの野心に胚胎するとなすも、之が爲め遂に戰爭を促すが如き様子なく、兩國共に今後の機會を待つて相助けんとなす。佛國は一八七一年以來歐洲列國の圍繞に入る能はずして孤立の處に堪へざりしが故に、露國と同盟を結んで得色あるは固より其所なり。又同盟の露國に及ぼしたる結果は、佛國の財主より巨額の慕債をなすを得たる事なり。

此二國同盟はかの獨逸伊の三國同盟と同じく、其特殊の目的を以て歐洲の現状維持に在り、平和の維持に在りと公言せざるなし、然れども佛國人民は之を信ずるの意なくして、窃に以爲らく、此同盟は目下何等の結果を生ぜざるべしと雖、來世紀に至らば兩國の互に結托せる希望を遂ぐるの企圖あるべしと、乃ち或は露佛同盟を以て英獨に對する繼續的の脅迫となす者なり、而して佛國は方に其孤立の境遇を脱し、近き將來に於ては毫も憂慮すべき者なかりしかば、過去三年間に其心方を二個の問題に集中せしが、其一是ドレフターの疑獄にして、其一是今一九〇〇年に開かるべき萬國大博覽會なり、ドレフター事件は別章に述べべきが故に茲には虚稱者に就て少しく言ふ所あらんとす、現在巴里人の中には大統領マールが變革に熱心なる雜種の群集と秘密の約束を結びたる幾微を豫知したりと云ふ者あり、然るに歴史は今後此疑惑を解決し、マールの公明を證すべし、但し公明の決して外交の原則にあらざることは別論に屬す、而して八名の歐人と一、百八十名のセネガ兵とより成れる「マルシヤン」が阿非利加に送られたは、マールの創意に出て、又其扶助に因れるに至つては、信を置くに足る者あり。

マールに關する外交通信を讀む者は何人も此事件の中孰れが善孰れが悪なるかの知解を失ふなるべし、只マールの沼地に於て少佐マルシヤンの一小部隊がこれより先き「カリフ」を征服してオムダルマンに勝ちたる英埃軍の權内に在りたるは事實なり、又英國はナイール河の上流に達したる佛國冒險者の爲めにオムダルマン戰勝の結果を攫奪せらるゝを肯んぜざるもまた事實なり、又英國がナイール河の灌溉の爲めに巨費を投ぜんとせしは其ナイール流域と上流の諸水を有したるが故にして、ケーブカイロー鐵道の計畫に至つては更に言を待たず、これ亦事實なり、而して先頃米國宣教師の一教正は吾人に語つて曰く、阿非利加の文明と其基督教化は此鐵道の完成に待つと、抑、ナイール流域の英埃所領地を侵すの不善なる事は佛國と雖、其初め之を知らざりしにあらず、果せるかな、マルシヤン少佐遠征の結果は一度マールの廢堡に翻へしたる佛國旗を撤するに至り、大統領マールが埃及に於ける英國の進運を止むるの望は水泡に歸し、佛國は之が爲めに屈辱を招けり。

一八九七年五月四日巴里のデジニョーデジニョー街に開きたる慈善「パサ」の慘禍は之

此三國同盟はかの獨逸伊の三國同盟と同じく、其特殊の目的を以て歐洲の現状維持に在り、平和の維持に在りと公言せざるなし。然れども佛國人民は之を信ずるの意なくして、窃に以爲らく、此同盟は目下何等の結果を生ぜざるべしと雖、來世紀に至らば兩國の互に結托せる希望を遂ぐるの企圖あるべしと。乃ち或は露佛同盟を以て英獨に對する繼續的の脅迫となす者なり。而して佛國は方に其孤立の境遇を脱し、近き將來に於ては毫も憂慮すべき者なかりしかば、過去三年間に其心力を二個の問題に集中せしが、其一是ドレフューの疑獄にして、其一是今一八九〇年に開かるべき萬國大博覽會なり。ドレフュー事件は別章に述べべきが故に茲には虚稱者に就て少しく言ふ所あらんとす。現在巴里人の中には大統領フェルが變革に熱心なる雜種の群集と秘密の約束を結びたる幾微を豫知したりと云ふ者あり。然るに歴史は今後此疑惑を解決し、フェールの公明を證すべし。但し公明の決して外交の原則にあらざることとは別論に屬す。而して八名の歐人と一、百八十名のセネガ兵とより成れる「マルシヤン・ミシヤン」が阿非利加に送られたは、フェールの創意に出て、又其扶助に因れるに至つては、信を置くに足る者あり。

フェルに關する外交通信を讀む者は何人も此事件の中孰れが善孰れが悪なるかの知解を失ふなるべし。只フェルの沼地に於て少佐マルシヤンの一小部隊がこれより先き「カリフ」を征服してオムダマンに勝ちたる英埃軍の權内に在りたるは事實なり。又英國はナイル河の上流に達したる佛國冒險者の爲めにオムダマン戰勝の結果を攘奪せらるゝを肯んぜざるもまた事實なり。又英國がナイル河の灌溉の爲めに巨費を投ぜんとせしは其ナイル流域と上流の諸水を有したるが故にして、ケーブカイロー鐵道の計畫に至つては更に言を待たず。これ亦事實なり。而して先頃米國宣教師の一教正は吾人に語つて曰く、阿非利加の文明と其基督教化は此鐵道の完成に待つと、抑、ナイル流域の英埃所領地を侵すの不善なる事は佛國と雖、其初め之を知らざりしにあらず。果せるかなマルシヤン少佐遠征の結果は一度フェルの廢堡に翻へしたる佛國旗を撤するに至り、大統領フェールが埃及に於ける英國の進運を止むるの望は水泡に歸し、佛國は之が爲めに屈辱を招けり。

一八九七年五月四日巴里のダンゴーデン街に開きたる慈善「パサー」の慘禍は之

を見聞せし者をして驚神動魄に堪へざらしめぬ。從來巴里上流の貴女は慈善事業を率先し來りしが、是に至つて市場を設け許多の慈善目的を併合すべきことを企て、デューゼ、ダレンコン諸公爵夫人之が牛耳を取れり。後者はパーヴァリア公主にして深くオルレアン家の眷愛を受けたる者なり。是に於て豫め廣大なる天幕の會場を設け天井四壁は畫布を以て之を蔽ひ、床上には古風なる高長の「ベンチ」を据附けたり。此會場は空地に建てられたる者にして、四方は高さ木造の垣を繞らし、一面に小路あつて、ホテル用に供せる高層を隔斷せり。

時好を追へる巴里人は會場に輻輳し、周圍の街上は馬車路を塞げり。貴女の戴ける朝は此年の時様なる絹編と花卉とを以て造り、又「レリス」若くは紗の大なる長形の髪領を着ること流行せしが、これ前世紀の風俗にして久しく廢れたる者なり。

午後四時頃會場の内外最も雑沓を極めたる際忽ち失火と叫ぶ者あり。來會の群集は狼狽して戸邊に突進せしも、入口の在る處を知りたる者は僅に一人に過ぎ

ざりき。但し「ホール」を出づれば階段左右に分れ、それより外に出づべき大戸に達するなり。

一種の景物を寫すの用に具へたる石油ランプは突然燃上り、火燄は掛布に移りしかば一分間にして全宇火となり、天井より畫布の焦片は翻々として貴女の頭上に落下するや、絹と云ひ「レリス」と云ひ、忽ち火を傳へて阿毘獄を現出せり。但し焼失の迅速なる「ポンプ」を送るの暇あらず、而して馬車と共に門外に留りたる從僕等は健氣にも自他の主人を救ひ出さんと盡力せしに、屋内の管理人の自私にして愚鈍なる言はずものな、英米の各新聞に出てたる當日の光景は酸鼻に堪へざる者なり。火は半時を経て消えたるが、大客堂と周圍の垣とは其跡を留めずして只灰燼の累々たるを見るのみ。

當時屋外の小路に逃れ出てたる者は僅に指を屈すべく、此人々は「ホテル」の傭人が窓より引擧げたる故幸にして免れたり。デューゼ女公は屋後の隙地に通ずべき小さな側面の戸あるを知りたるが爲め小路に出づるを得たれども、ダレンコン女公は逃れ出づることを肯んぜずして曰く、幹事たる以上、來賓が盡く安全な

るを見るまでは屋外に逃るべからざるの義務ありと、これ恐らくは女公最後の語なるべし。何となれば此時より間もなくして焼死せしを以てなり。鎮火後長時間を費して遺骸を探りたる處、灰中に狼藉たる爛肉焦骨の間より出てたる指環に因つて纒に其人なる事を髣髴せしのみ、其如何に烈しく焼かれたるかは想像するに堪へたり。女公の叔父ド・メール公は此時病を養つて伊太利に在りしが、其訃を聞くや病勢増して女公の跡を追へり。又當時人々は暫時大統領の第二女リリー・メールが或は焼死せざりしかとの懸念ありしが、リリーは一人の朋友と、パザールに赴きたるも、其馬車が途中にて遲滞せしが爲め出火の際には未だ會場に達せず、従つて災に遇はざるを得たり。災後四方より吊慰を述べ救助を與ふる者數ふるに暇あらず。或は自ら義捐金を齎らし、或は人を以て之を送り、寄金取扱の事務所は巨萬の資金を受け罹災の家族は十分なる扶助金を得たり。失火の後數週日間巴里人は公會の娛樂場に入るを恐れ、而して世界到る處その餘波を受けて演劇舞樂等の場處に入る者の數を減じたり。今やこの火災の起りたる優美堅實の建築あるを見る、これ將來慈善市場若くは

展覽會に供する者にして、其側に小禮拜堂あり。カステラ・ヌ女伯の資を捐て作りたるものなるが、夫人は米國に生れ、嚮には紐育のミス・アンナ・グロッドとして知られたり。

大統領メールはファッション・タ遠征の失敗に重ぬるに、又ドレフュー事件の騷擾を以てせしかば、晩年の十二ヶ月間に苦惱は堪へざりき。氏は此事件の落着が危機を合むことを豫想せり。然れども佛國大統領として孰れの黨に左袒すべきかを決するの果斷なかりしが如く、其意に以爲らく、己れは毫も之に干渉せず、當事者をして其局を結ばしむる事を得ば之に若くはなし、而して不測の變あらば之を利用するに力を用ひんと。

一八九八年はドレフュー事件に關係ある審判を以て終始せしが、右はゾラーの審判なり。ピカールの審判なり。大審院に對するケステ・ド・ポール・ベルの控告なり。メールは是等の事に與らず。又ドレフューがデヴィル島より呈送したる哀訴狀に就ても知らざりしなり。斯くして氏は勞苦の爲め次第に衰弱に赴けり。氏は之まで兩度狂人の狙撃に遇へり。夫れ然り、強壯なる軀體と剛堅なる精神にあらざれば

日々の危険に當るに足らざるなり。
 フォールは勞苦の結果一八九九年二月十六日エリジの邸宅に歿す。年五十六歳。
 氏は此日午後五時まで事務を執りしが、俄に病氣を覺えしかば秘書官は之をソ
 ーファの上に安臥せしめ、侍醫と家族とを招致せり。然るに氏は終に回復せずして
 其夜十時死亡し、醫士の檢斷に因れば心臟病と錯綜せる卒中に罹りしなり。
 フォールは第三共和政治以來第六の大統領にして、第一はアドルフ・フィエー、彼は辭
 職せり。第二はバトリリス・マクマホン、彼は辭職せり。第三はジュール・グレイヴィエ、彼
 も亦辭職せり。第四はサディ・カルノー、彼は刺殺せられたり。第五はカシミール・ペ
 リエー、彼は辭職せり。第六はフェリックス・フォール、彼は在職中に歿せり。吾人は其後を
 承けたるエミール・ルルーベールが安全に任期を盡さんことを望む。

第四章 ドレフュー罪案

アルサースのミュルオーザン(ミュルオーズ)に餘り珍しからぬドレフューの姓を名乗
 れる猶太の一族住ひけるが、孰れも富裕なる製造家にして大工場を有せり。一八
 七一年族長は已に四男數女あり。アルサースが獨逸に併せられ住民が獨佛の中
 孰れかに國籍を擇ばざるべからざるに際し、長男デックは一族の工場を管理す
 るが爲めミュルオーズに留まり、三人の弟は佛國人なることを宣言せしが、アルフ
 レッドは其中の最も年少者なりしなり。デックは男子六人を有し、其四人を佛國に
 送つて身を立てしめたり。但し一旦佛人となれる以上、再び其父の家に戻ることは
 法律の許さざる所なり。デックはチリに商館を設け盛に貿易を行ひし處、適
 ナリト政府と重大なる訴件を生ぜしかば、ウアルデック・ルソーを聘して代理兼顧
 問とせり。蓋し氏も亦アルサースの人なり。

一八九七年デックは廢業して佛國に移り、歸化して佛蘭人となれり。初めアルフレッドはミュルオーズの學校に入りたるが、當時學友の一人なるシーレークスネーは後に佛國代議院の副議長となりし人なり。アルフレッド・ドレフューが佛國軍隊の仲間より甚だ喜ばれざりし所以を尋ぬるに、其餘りに攻究を好み事として其質問に上らざるなく、宛も一百年前に於けるコルシカの一少年士官(ナポレオン)に類せり。彼の同僚は鈍物なるに反し、彼は鋭意躁進其職事に精通なる智識を以て活潑々地の行動を以て榮達を計らんとするの念極めて堅し。

一八九四年九月巴里の獨逸公使館の門衛を勤めたる一人のアルサーヌ人は、佛國參謀本部情報局次長ヘンリー少佐の前に、幾つともなく細かに切り裂かれたる一枚の紙を齎らせり。其出處に就ては一時公使館の紙屑籠より取出したりと云ふ説ありしが、後には又獨逸公使館附武官なるシワーツコッペン大佐の外套の「ポケット」より得たりと云ふ説あり。

公使館附武官が駐在國の軍事に涉れる一切の情報を蒐輯して之を本國に送る

佛
は其職務にして、公然たる名譽間諜の類なり。一八九四年には米國の公使館に於てすらも此種の人ありけるが、間諜界の作法を踏えたるが爲め自ら煩累を招きたり。ヘンリー少佐の手に入りたる文書は即ち有名なる「ポルデロー」なり。ポルデローとは幾通の文書を包みたる「表紙」の事にして、書類は已に取り出されて在らざりしも、表紙には内容の目錄を記載せり。

四
(85)
表紙に見えたる數語に據り筆者が參謀本部の砲兵士官なるを推知し、又遍ねく該部に奉職せる砲兵士官の手蹟を調査の結果、大尉ドレフューが筆者たる事を測斷せり。然れども實際外國人の眼には甲の佛人と乙の佛人との手蹟に格別著しき差異あらざるなり。參謀本部長ポアデッフル將軍を初めとして部中要職の人は、軍務大臣メルシエー將軍と共に巴里刑報局長ベルディヨンの意見を問ひ、結局「表紙」の文字はドレフューが書したるに相違なしとの斷定に歸着せり。此ベルディヨンの父は曾つて度量法の新案を作り、今諸國の巡査は盡く之を使用す。ベルディヨンは書蹟の鑑定家なるが、形狀を根據とせる奇怪の理論を以て眞偽を辨じ、他日レンヌの軍法會議に於て判官に之を説明せしも無効に屬せし事あり。其後ソラ

の審問に當り又判官と陪審官に向つて説明を試みたる事あり。一八九四年參謀本部の情報局のパーティード・クラム少佐はドレフューを私室に召び、彈丸を装したるピストルを手近く卓上に置き、表紙の文句を含蓄せる書柬文を書き取らしめたる處、ドレフューは己れが嫌疑を受けたることを察せしかば顔色は自ら蒼白に變じ其手は搖いて定まらざりき。彼は直ちに逮捕の上其嫌疑の事由を告げられずしてヘンリー大佐の爲めにシムシ・ミデーの兵獄に護送せられしが、監獄フォルデネッティ少佐は豫め收禁の準備をなして之を待てり。これ彼の書蹟を試験するに先だつて逮捕の事は已に決定せしが故なり。

フォルデネッティは罪人の舉措に就き大に經驗を累みたる人にして、ドレフューを監視するに及び忽ちにして其無罪なる事を看破せり。之に由つて職務上已むを得ず彼を密禁獄監の外何人とも交通を許さざるを謂ふするの命を守りたりとは云へ、心竊に之を憐みぬ。

ドレフューの妻は賢婦にして二人の子あり。吾人は敢へて言はんとす。ドレフューの品行を顯微鏡の下に検査せしが、佛國軍隊少壯士官の大部分に比して優等なる

ことを發見せんと。

ドレフューの妻は其夫より通信を受くることを許されず、數時間は全くドレフューの成行を知らざりしなり。已にしてヘンリー少佐は家宅搜索を行なはしめたる處夫人は思慮すらく、若し少しにても己れが夫を憂ふる様子を他人に覺られれば之が爲め夫に煩累を及ぼすべしと、強ひて平然たる態度を装へり。

ドレフューの家宅に於ては何等の罪證を發見せざりしが、搜索の眼目たりし者はドレフューの其姉との通信にして、他日、表紙の筆者に關する理論の根據となりたる者は即ちこれなり。之より前ドレフューはヘンリー大佐に鍵を授けて曰く、住宅の凡ての處を搜索せられよ、但し何物をも發見せざるべしと、果してその言の如し。然るにこれはドレフューが一切の罪證を湮滅したる者なりと曲解せられたり。フォルデネッティ少佐の報告せしが如くならんには、シムシ・ミデーの獄舎に於けるドレフューの苦痛は殆ど名狀すべからず。日々一種の肉汁の外何物をも食はずして、其身體を壁に打附け、歎歎せり、呻吟せり。メルシエー將軍は毎日パーティード・クラムを獄中に遣はして白狀を勧めたるも、唯余は無罪なりとの一言を聞くに止

まれり。一夜、パーティードクラムは其密房に忍び入り、ドレフューの睡眠中火光を面上に放射せんと欲したれども、フォルデネン少佐は之を拒みたり。然るに其後ドレフューがデヴィル島に在りし時拷問の一法として之を行へり。メルシェー將軍は最初偽つてドレフューを救はんとするの意を示せしが、余の想像する所によればドレフューをして無實の罪を自白せしめんと欲したるのみ。然るに軍法會議の十日以前新聞紙に通信して曰く、此士官の犯罪は斷乎として確實なりと。一八九四年十二月十九日軍法會議は開かれたるも秘密裁判なりき。これ斯くの如き犯罪事件に在つては決して稀有の事にあらず。然れども告發の根據なる書類をば毫も被告並に辯護人マートル・デマンジに知らしめずして唯竊に判事にのみ示したるが如きは豈に怪しむべきにあらずや。此事に就ては他日レンヌに再審の法廷を開きたる時裁判長は曩に書類を熟覽せざりしは疲勞甚しかりし爲めなりと辯疏せり。

ドレフューは公開の黜辱と終身禁錮の刑に處せられたり。彼の意は其配處のニール・カレドニアならん事を願へり。これ此島に在るときは其妻子が斷えず面會を許さるべき望ありしを以てなり。然るにメルシェー將軍は一意彼を除かんと欲せしかば、代議院を慫慂して特別の法律を發せしめ、ドレフューを佛領ギアナの海岸にあるデヴィル島に送れり。

ドレフュー黜辱の光景に就ては其有罪を信じたる新聞通信員の言を引用して前章に之を記したるが、今日に及んで聞く所に據れば、其前日パーティードクラムはドレフューを訪ひ、軍務大臣メルシェー將軍(吾人は將軍が此不幸なる者の有罪を主張するは故意に出でたる者と思はざる能はず)の意を傳へて云ふ、若し犯罪を白状せば公開の拷問を免すべく、其白状も左の如き意味にて可なり。曰く、彼は獨逸の公使館武官に或る無用の文書を與へたり。而して右は之よりも重大なる書類を該武官より受取るべき交換手段に出でたり云々。但し斯くの如き取引は情報局に有勝ちの事なり。ドレフューは固より此詭計に陥らざりしかば、パーティードクラムも何の得る所なくして去れり。然るにドレフューは兵學校の室中に於て刑場に赴くべき時刻を待てる間、憤悶の極、彷徨徘徊せし砌、圖らず獨語して曰く、若し余が一言重要な書類と交換する爲めに無用の書類を與へたりと白状せしなら

ば免されたるかも知れずと。會當番の士官ルブランノールはこの一語を捉へて此中に白状を含める者と臆測せしが此大尉は愚直の人なりし故深き思慮を有せざりしなり。

ドレフターがデヴィル島に送られたるは之より一ヶ月の後なり。彼は此間に睡眠中と雖なほ囁語に無罪を叫べり。

吾人の見たるが如く公人は皆彼の有罪を信じて疑はずわが米國の年鑑すらもなほ然り。

斯くの如くにして早くも一年を過ぎ、デヴィル島の囚人は世間より忘たられたり。彼の裁判は決案なり。佛國の軍律に據れば決案は事已に落着して處置を終り、運命已に一定して論駁するを得ず、變改するを得ざる者なり。然るに一八九六年の春ビカール大佐がスカンデル大佐に繼て情報局長となるや局面一變の兆あり。蓋しビカールは未だ會つてドレフターを知らず、就職の當時一片の「ベティ・ブリュー」を手に入れたり。ベティ・ブリューは巴里にて用ふる封附の郵便端書にして特別配達を受くるの特權あり。而してビカールの得たる端書はかの「表紙」と同じく裂

け居たるが未だ投函せられざりし者にして獨逸公使館より盗み取れる所なり。又其文字はシッラルツコッペン大佐の手續に係り、断片を補綴して見ればエステラデー少將の姓名住所あることを發見せり。

是に於てビカール大佐はエステラデーの性質生計に關する調査に着手せり。シヤール・マリリー・フェルディナン・エステラデーは匈牙利豪族の支流に屬し、此族は一百年以前佛國に移住し、族人の中佛國軍隊に在つて卓絶の名を著はしたる者なり。晩近に至つてはエステラデーの父クリミア戰に臨んで功あり。エステラデーは遺腹の子にして教育を伯林に受け、一八六六年砲兵士官を以て奥地利の軍籍に入りカストザの戰に負傷せり。然るに彼が何等の原因に由つて奥軍を脱し羅馬法王の軍隊に入りしかは公衆の未だ會つて知らざる所なり。

普佛戰爭の起るやナポレオン三世に従ひローアの軍に少尉となり、戰爭の間は職務上一種の信用を有せり。

彼は「レクター」「フリーランズ」「コンドッティヤール」(皆舊兵の)と呼ぶものあるを不平として曰く、或は然らざる然れども余は之を榮とす。余の如き兵士を思ふる者は往

々勝利を得、余の如きは敗軍の中に戦友を棄てざるなり。此數語は恐らく其佛國將校に對する私怨を諷刺せし者にして、元來彼は佛軍に在りと雖佛軍を憎むと甚しく、常に將校の無學怯懦なることを口にし、若し己がユイラン(普軍の騎兵)大尉となつて佛人を斬殺せしならば定めて満足なりしならんと思へり、又巴里が敵軍に陥れられ數十百萬の醉兵の爲めに劫掠せらるゝ夢想を懐いて自ら悦べり。彼は佛國良家の財産ある婦人を娶り、其財産を消費して婦人を里方の親戚へ逐ひ戻せり。

要するに彼は常に愉色あり愛嬌あると共に才能あり、略歐洲諸國の語に通じ佛人に在つては稀に見る所なり、又凡ゆる科學上の發明に於て人後に落ちず、善く世界の歴史を諳じ、最も軍事に心を留めたり。

彼が金錢を要せし時は其頓智と人を悦ばすの態度とを以て之を得たり、猶太人を痛く憎みたるモイレー侯が猶太の一官吏と決闘をなせし時、彼は猶太人の介副人となりしが、これロスタイド家の歡心を買ひ、金錢を借出さんとの計に出でたるなり、又好意を街ひて親屬より金錢を引出せし事あり、彼は何人をも賣れり。

苟も彼に接近したる者は殆ど一として害を被らざるなし。シワルツコッペンは其政府の許可を得て彼が有給の間隙なる事を明言せしと雖、彼が表紙を書きたると云へる事は問題とならざりしなり、唯彼が自ら之を書けりと稱したる事實に據れば自ら疑を挾まざるを得ず、余はこれに就て余が會つて聞きたる一場の談話を想起せり、即ち一八四九年余はポストンの有名なる慈善家の家に在りし時、適主人を訪問せし二人の慈善家はバルクマン博士を殺したるウエプスタル博士の赦免を請願せんとして賛成を求めたるが、主人は首を掉つて、然れども彼は已に白状せりと云へり、客は直ちに之に應じて曰く、彼は時々偽を言ふ者なるが故に彼の言を信ずる者は一人もあらざるなりと、エヌテラージも亦斯くの如し、凡そ彼の言ふ所は縱令自白の語と雖確證あるにあらざれば信を措くに足らず、ピカール大佐はエヌテラーヂに注目し、今や探究の歩を進めて、表紙の書風とエヌテラーヂの手蹟とを對照せしに、驚くべし、兩者全く相酷似せり、ピカールは何人の書なりとも言はずして之をベルティオン、バーティド、クラムに示せるに、二人もピカールと同じく右は一人の筆に成りたるに相違なしと云へり、是に於て

ビカール大佐はかの秘密の一束に照し合せたり。此書類は情報局中自己の屬部にありしかば自由に檢閲を得たるなり。然るに其中無用無關係なる者多きに居り、罪證となすべき唯一の書類はエステラーヂーにも擬するを得べく、ドレフューにも擬するを得べき者たり。

已にして巴里の一朝報は、表紙の騰本を出版に及びし處、エステラーヂーの株式仲買人ドカストローと云へる者之を觀て其エステラーヂーの書蹟と同一なるに驚き、之をドレフューの同胞なるマッテューに告げたり。

元來、決案は再審を得ざる者なれども、若し軍法會議の處置不法なりし事明白にならばその判決は無効に歸するなり。これを以てドレフューの辯護人マートルデマンジは本件の重要なる文書が裁判官には内幕に示されたれども、被告並に辯護人に示されざりし事を確知し、翻案の利器を得たるが故にドレフューの妻を勵まし再審の請願をなさしめたり。當時の陸軍大臣はビョー將軍なりしが元老院副議長シロー・ケスネーは被告側の證據に困りドレフューは再審を得べき者なることを信じ、陸軍大臣に向つて之を迫りしに、ビョーは本件に就て世論の沸騰

せんことを恐れて再審を喜ばず、乃ち代議院に公式の陳述をなして曰く、ドレフューは已に法律に由り公義に由り審問を経て罪の宣告を受けたる者なりと。

斯くの如く陸軍省は記録を盾として再審を拒絶するに當り、この事件に熱心なるビカールは副官タレランの爲めに排せられて情報局を去り少佐(今は中佐)ヘリニー之に代れり。ビカールはテューニに左遷せられ、該地の司令官は之を國疆の危難なる地に置くべき事を命ぜられたるが、所謂危険の地とはモロー侯が亞拉比亞人の爲めに殺されたる處なり。其他ビカールがテューニに在るに當つて之を陥れんとしたる姦計の如きは、今之を述ぶるの餘地なく、エステラーヂーの審問と放免とに至つても亦愛を割かざるを得ず。而してドレフューの再審に就き佛國の政界を擧げて一是一否左右祖を分ち、親族相闘ぎ朋友相争の奇觀を呈したるも、今之を記するの必要なし。

エステラーヂーに就ては一條の話あり。或る時覆面の貴婦人夜中某橋上に會見すべしとて之を召び出し、ドレフュー事件に涉れる重要な書類を授け陸軍大臣に轉達せしめたるが、後日此覆面の婦人はパーティード・ドラマ其人なる事分明とな

れり然れども今斯くの如き傍徑の問題に入るを得ず、只其悲劇なるを知れば則ち足れり。

次にゾラはこの事件に着目する所あり、有名なる書東をオーロール新聞紙に載せたるが、毎行皆余は其罪を問ふと云へる文句を以て筆を起しドレー氏は面白く之を戯翻せり、ゾラはこの手紙の爲めに陪審廷に召喚を受けし處、陸軍省は干渉を試み、審問はゾラの書東中にある論難に限るべきことを主張せり、これゾラがエスタラーヂーを放免したる陪審官の判断は政府の命令に出でたりと云ふを指せるなり、この時ゾラの辯護人はメクトル・ラポリーと云ひ從來無名の法律家なり、ラポリーは非常なる熱心と伎倆とを以て辯護を試みしと雖、種々の妨害を被りたる爲めゾラは遂に讒謗の罪と定まりぬ。

右の判決は大審院の破棄する所となりしに幾ばくもなくゾラは再び前回と同様の罪案を以て審問を受けたり、然るにその手續は最も不正を極め、辯護人も其陳辯書を放棄するに至り、ゾラは一ヶ年の禁錮と三千フランの罰金を課せられたり、然るにゾラは瑞西に逃れ、その家財は罰金に當つるが爲め公賣に付せられ

し處第一に公賣に上りし者は厨に用ふる「テールブル」にして、右は四千フランに落札せしかば之にてその處刑を償ひたり、但しゾラが最も斷腸の想をなしたるは急遽巴里を脱走せし時、一疋の小狗を棄て置きたるに主人に離れたるを悲み悶死したる一事なり。

六月上旬に至りカヴェニヤク氏ビョーに繼いで陸軍大臣となれり、國人は素より氏の誠實を信じたるが故に其代議院に於て演説をなし、國民に向つて己れがドレーの有罪を疑はず、又軍法會議の處置を疑はざる事を保證するや、代議院は二に對する五百七十二票を以て此演説を印刷し、遍く佛國の三萬六千郡に掲示せり。

カヴェニヤクは演説中獨逸公使館附武官シニラルツコッペンと伊太利公使バニザルデーとの間に往復せし書簡を朗讀し、或る情報の出處としてドレーの名を擧げたり、但し此書簡はカヴェニヤクが「秘密の一束」より抜き出せし者なり、之より三日を経てデマンジュは軍法會議の時被告も辯護人も共にこの書簡を聞見せざりし事實を發表せり、而して今日吾人の知る所に據れば、當時判官も亦此書簡を見

聞せざりしなり。數週日の後カヴェニヤックは己が引證したる書簡の信否に就て疑念を挟み、大佐へシリーに照會せし處、ヘンリーは己れが偽造せし者なる事を自白に及びしも、これ固より上官の壓迫に出でたるなり。然れどもなほ主張して曰く、余の之をなせし所以は佛國の幸福を圖るに在り。上官の安全を欲するに在りと、大佐は遂にヴレリアン要塞の牢獄に投ぜられたるに、翌日獄吏は大佐が其喉を切斷して死し居り、其側に一挺の刺刀ある事を發見せり。凡そ囚人は獄房に入るに先だち身體検査を受くる事なるに、彼が刺刀を所持せしは不思議と謂はざるを得ず。然るにその前夜誰とも知れざる一士官彼の室に至りし由なれば頗る疑ふべき點なきにあらず、されども彼を自殺なりと信ぜし人々は以爲らく、彼は細民の家に生れ、其妻に遺すべき財産もなかりし故、之に年金を得せしめんが爲め俄に此舉に出でたるなりと、其後カヴェニヤックは陸軍省を去り、佛國を代表して露帝の戴冠式に參列し、此頃歸國したるポアデッフルは參謀本部長を辭し、バード、ドクラム、エステラデーの二人も亦軍職を退けり。

之に繼て大審院はドレーフ事件の調査を企てたるが、カヴェニヤックに代つて陸軍大臣となりたるデュランタンはアルサース人なるに拘はらず、猛烈なる排ドレーフ黨なりしかば、大審院が再審を斷行せんとするや、其職を辭し、シャノアイヌ將軍後任となりしにこれ亦卒然辭職に及びしかば、何人も驚異せざるなし。シャノアイヌは會つて代議院に於て内閣の同僚を辯護せし事あるに、今や俄然攻撃の地位に立ちたる所以は他なし、其子が中央阿弗利加に在つて亂兵の巨魁となりし爲め政府が毫も己れに重きを置かざる事を發見し、遂に斯くの如き反覆の行動に出でたるが如し。ピカールは又も逮捕を被りたるが、今度の罪状は、封附端書の名字を抹殺してエステラデーの名に易へしと云ふに在り。成程エステラデーの名は書き改めたる痕跡あり、而して、インキも亦異れり。然れどもピカールは讎敵が己れを陥れんとて作りし者なる事を宣言せり。此審問の開始に先だち陸軍省は之を軍法會議に附すべき希望を以て引渡を要求に及び、ピカールが將に陸軍省の手に移されんとするや、屹然として起ち一言の許可を得て曰く、今夜多分シムシムデーに

送らるゝなるべし公然一語を發するは恐らく今が最後ならん若し余の獄房に於てルメルシェービカールの索繩とヘンリーの剃刀とを發見することあらばこれ余が暗殺せられたる時なり余の如きは決して自殺を行はざるなりと。此語中に見えたるルメルシェーは偽造を事とし、間諜を業とし、時々パーティード・クラムの代理人を経由して陸軍務省に使用せられたる者なるが、一八九七年ドレフューの利益となるべき書類を偽造しドレフュー家の友人なるレーナックに售らんとせしに、レーナックはその偽書なることを疑ひ之を拒絶せり。然るにルメルシェー・ビカールは過激なる排ドレフュー黨のロシシユフルに賣り、ロシシユフルはこれを新聞紙上に暴露し、緒言を加へて曰く、此書類は偽書の製造を事とする、叛逆のシンディケードより買ひ取りたる者なりと。已にして一ヶ月の後ルメルシェーは其室中に縊死せしに、警察は三日を過ぐるまで之を發表せざりき。大審院の刑事局は軍法會議の裁判手續が正當なりしや否の調査に着手し、若し果して不正なりし場合には再審を要求すべき問題を討究するに當り、裁判官の一入なるケスネード・ポールペールは同僚を咎むるにドレフュー並に猶太人を曲

庇することを以てせしも、結局一八九九年三月調査の命令を下し、併せて再審の決議を公にせり。

ドレフューの名は五年以前まで十萬人の中一人も之を聞きたる者なかりしに、今や英米到る處其名を喧傳するに至れり。然るにドレフュー自身は反つて己れの爲めに力を盡し名譽を復せんとする者ある事を知るに及ばず、これ其妻より送る所の通信は家族の動靜に關するものの外、一語も他事に涉るを許されざりし故なり。

デヴィル島は全土磊砢たる岩石の累積せし者にて綠樹青草の目を慰むるに足るものなく、燦くが如き烈日の光は礮礮を射て眩せんとする計なり。此處に住する囚人は島内を歩行するの自由あり、又各自に配當せられたる尺寸の土地を耕すを得、且つ一定の場處に膝を容るべき小屋を建て其中に住するなり。然れどドレフューは密禁の事として斯くの如き特許に與るを得ず、蓋し何事か上官に不利なる事實を洩すの恐あればなり。再審論の佛國に沸騰するや、殖民大臣ルボンが當局者の意を迎へて益、取扱を嚴酷にせしが、後來當局者が辯解の理由とせし、所は平

生見慣れぬ船舶が近傍に出沒せしに由り萬一逃走の虞あることを恐れたりと云ふに在り。加之佛國よりドレフイーに宛て屢偽作の書狀を送る者あり。其目的は此書狀が此島の官吏に押收せられて佛國に送還することゝならば益ドレフイーの不利となり。従つて有司が一層彼に苛酷なる警戒を施す口實を得るが爲めなり。ドレフイーの起臥せる小屋は四面高屏を繞らし彼の眼に入る所の者は一縷の天のみ。而して此小屋と其四隣とは其衛舎と接續し衛舎には高塔あり。遠くは海上を望見すべく。近くはドレフイーの居る處の四隅寸隙の地と雖眼光の中に在り。然るに向之を以て足れりとせず。日夜鐵鎖を以てドレフイーを繋械するが上に睡眠に乗じて突然火光を面上に放射せしが。これ彼が驚いて飛び起くる時。萬一突然の事とて覺えず己れに不利益なる言を發すべきかとの望を屬せしに因る。其後レンヌに開きたる第二回の軍法會議に於て此苛虐と彼がデヴィル島に在りし間の艱難に關する報告書を読みたる時。ドレフイーは落涙に咽びたりと云ふ。此報告は殖民大臣より陸軍に送りたる者にして。中に佛領ギアナの知事が殖民大臣に宛てたる書信の拔萃あり。之に據ればドレフイーは醫師に向ひ己れが殆ど發狂

状態に在る事を語り。知事は斯くの如き恐あるを以て訓令を仰ぎたる者と見ゆ。當局者は彼が再審の前に死亡せんことを切望し。豫め佛國より棺槨と防腐具とを送り。又少しにても不穩の兆あらば直ちに銃殺すべき事を命ぜり。報告書の讀み終るやルポンは説明の許を受け謂つて曰く。余は報告の精確なるを疑はず。然れども遺漏あり。何となれば醫師は曾つて余に此事を語りし事なし。若し之を語りたるならんには。余はドレフイーを他の病囚と同一に取扱ふべき命令を下すべくありしなりと。軍法會議長はドレフイーを顧み問ふて曰く。汝は口供に關して陳述せんと欲する事ありやと。ドレフイーは之に答へて曰く。否。余は吾名譽を辯護するが爲めに此處に在り。余は佛人にして無罪の人なる余が五ヶ年間精神上道德上デヴィル島に受けたる無類の痛苦を茲に語るを願はずと。代議院が大審院より再審を可とするの通牒に接したる時。前項に述べたる第二回の軍法會議はブリタニイの舊都レンヌに開會の事と定まり。ドレフイーはデヴィル島より召喚せられ。政府はドレフイーを載するが爲め特に軍艦スファンクスを派

遣せり。此時ドレフューは第一軍法會議以前、即ち一八九四年の十月及び十一月に於けるが如く、未だ審問を受けざる刑事被告人たる地位に在り、而して其スフックスの甲板に在るや、依然「密禁」を受けたるなり。其妻は返附せられたる軍服と、レス並に臂條とを送りしも、ドレフューは之を着用せざりき。其以前の辯護人マール・デマンジュは又彼に送るに再審に關し大審院に上告せし手續書の謄本を以てせしかば、ドレフューは茲に初めて世間に雪冤の舉ありし事を知れり。

憐むべし、ドレフューは此際殘忍無類の毒計に中てられたり。彼の敵は人をして告げしめて曰へり、其妻は不貞の行あり、夫の佛國に歸るを願はず、又私生兒を有せりと。

彼は其無罪を證明すれば甚だ單純なるに、何故其親屬が其手段を取らざるやと深く怪訝に堪へざりしが、これ彼が毫も他の隱謀を知らざりしが故なり。大官の輩が之に關聯せざるを知らざりしが故なり。彼の審問が佛國の平和に影響するを知らざりしが故なり。彼はポアデッフル將軍が友誼を持して己れを救護すべしと信ぜしも、其同胞なるマテューが之が爲めに其財産の半を費し、其忠實なる妻が

わが爲めに苦節を盡し、歐米諸國をして哀憐贊稱せしむるに至れるを知らず。關員が再審の爲めに煩悶せしを知らず。佛國第一流の小説家が彼の爲めに追放せられたるを知らず。幾多の武官が彼の無罪を固執せし爲め職を免ぜられたるを知らず。獨逸の外務大臣が公然その國會に於て、情報局中何人も直接間接にドレフューと交通し、若くはドレフューより通信を受けたる者なしと明言せしを知らざりしなり。是より先きドレフューは聊か其妻の不熱心にして己れを救ふに躊躇せるを意外とせしに拘はらず、なほ彼の愛情を信じ、縋繩の書信を送りたるに、今や離間策に罹り、妻が唯己れに不情なるのみならず、己れを辱しめ己れに背きたる者と信ぜり。

六月一日、スフックスはブリタニーの海岸に瀕せるクイブロン港に着し、ドレフューは小舟より上陸せしが、時正に大雷雨にして光景暗澹たり。其四輪馬車に乗じて監獄に送らるゝや、新聞記者、兵士、政治家、憲兵、巡查、證人、其他の見物數千人は皆彼を望み、革命黨の如きも亦其中に混ぜり。ドレフューは獄中に在つて審問を待てり。然れども之まで第二の軍法會議の將に開かれんとするを知らず。此事件は大

審院の決定により或る手續の後放免せらるべしと思ひ居れり。判事に撰定せられたるは七人の砲兵士官にして、ドレフイーと同隊に屬せし者なり。蓋し此諸人は未だ會つて斯くの如き試験的地位に立ちし事あらず。吾人を以てドレフイー事件を観れば、此審問の目的たるドレフイーの有罪無罪を發見するに在らずして、參謀本部の諸氏即ち最高武官の曲直を分つに在り、而して其曲直を分つべき任に當れる者は之が屬僚にして、終身其訓練を仰がざるべからざる身分なれば最も難局と謂はざるを得ず。夫れ然り、ドレフイーの有罪無罪は佛國に取り枝葉の問題に過ぎず。英米の人より視れば軍法會議はドレフイーの罪狀を確定するが爲めに開かれたる者なれども、佛國人は共和政府の運命と佛國の治亂が係つて此事件に在りとなし頗る之を憂慮せり。乃ち七人の士官が其責任を恐れて逡巡するや固より怪しむに足らず。然れども彼等は勇敢なり。余は其擔任せる義務を盡さんとせしを知る。

ドレフイー到着の翌日午後、其妻は面會の許可を得たれども、無論立合の官吏の目前にて之を行へり。此夫婦は五ヶ年間相見ざりし事故世間の同情を寄せたる者

は如何に其歡喜を極め如何に其希望を復すべきかを想像するに堪へざりしが、豈に測らん。案外にも面會は冷淡にして虚禮に過ぎず。妻は涙を吞んで監獄を去れり。蓋しドレフイーがスフラスクの舟中に於て耳にせる誤謬の言はなほ其腦底に印せしが故なり。其後ドレフイーの辯護人なるデマンジは單獨にて面會を許されれば、此時定めて其妻の貞烈なりし事を語つて冤を釋きたるならん。審問の場所はレンヌのリセー大公堂にして、一八九九年八月七日午前六時半を以て開廷せり。

新聞社員は入場券を得んが爲めに非常なる運動をなし、世界の文明諸國より派出せる通信員も亦其中に雜れり。

裁判長はデネーと云ひ從來世間に其名を知られざりし人なり。今や七人の士官各、其席に就きしが、此時小戸の開くると共に砲兵の軍服を着けたる二人の士官側なる室内より出て來り、其一人は白髪にして腦天と鬚の處に禿あり、其面上には苦痛と堅忍の色あり、又多少驚愕せる者の如し。これドレフイーなり。彼は此一刻那に至る迄唯自ら單に砲兵士官たるを覺ゆるのみにて、己れが世界に於て具瞻

の地位に在ることに想ひ到らざりしなり。
ドレフューが法官の間に答へて、ドレフュー三十九歳と陳述せし音聲は、奇怪粗野にして長く溢り、聞く者をして彼が五ヶ年間殆ど談話をなさざりし事を確めしめたる程なり。

最初の三日間は、秘密の一束の調査に費せられしが、其中に收めたる書類六百通ありしも、多少本件に關係ある者に至つては僅か六通に過ぎず。
本章の紙數限あるを以て審問の詳細を掲ぐる能はざればその梁略を記さんに、第一の證人の一名は前大統領カシミル・ペリエーなりしも、其言は本件に就て何等の證據とならず、何となれば第一回の軍法會議の際は己れが國家の主長となりしに拘らず、何事をも告げられざりしとて不平を洩すに止りたればなり。
次にはメルシエー將軍の證言あり、彼こそは真正の告發人なり、是に於て其審問はドレフューよりも更に重大にして苟も己れを辯護せんと欲せばドレフューを罪人となさざるべからず、乃ち其證據の提出を終るや、其椅子より半身を轉じてドレフューに向へり。

彼は冷靜なる音調を以て左の如く言へり、余は若し彼の有罪に就き一點の疑にても之ありしならば、第一にドレフューの處に至り余が心ならずも誤りたる事を語るべき筈なりし。

ドレフューは一喝せり、貴下は唯今其通り申さるべきにと。此時までドレフューの聲は低調にして溢音なりしが、是に至つて鋭く且つ高く、之を聞きたる者の將來永く忘れざる叫びなりき。ドレフューは忽ち躍り上り半身を前に屈せし處を、有司は手を以て穩に其腕を扼して之を引止めたるが、ドレフューの拳は空に揮ひメルシエーを睨視して其齒を露出し、宛も血に渴せるが如く其叫びは半は顛ひ半は嗚咽し憤怒の叫なり、苦悶の叫なり、失望の叫なり、之と共に憐れを求むるの叫なり。

叫喚の餘響が消え失せし時、メルシエーの聲に單調なる聲は聞えたり、余は第一に過失を補ふべくありし。ドレフューは叫べり、れそは貴下の義務なるぞと、メルシエーは語を繼いで曰く、余が彼を有罪となすの信念は堅固にして動かすべからずと。

此日は八月十三日にして土曜日(翌日曜日)には被告方の反詰者ラポリーがメルシェー將軍に取り係る筈にて審問の決勝點なりと謂ふべく、カシミールベリエーも亦其首相たりし時内閣の陸軍大臣なりしメルシェー將軍と對決すべき請求を受けたり。

六時四十五分ラポリー夫婦は塊地利の産はレンヌの郊外の借家を出て法廷の方に向ひ、大佐ビカールと他に一人の紳士同行せり。是より前ラポリーはメルシェーを反詰の問題を周到に研究して準備已に整ひ、本件の死活は繫つて其一身に在り。然るに突然一人の男垣の背より歩み來り、ラポリーを銃撃して之を倒せり。適、氏の妻は法廷の入場券を置き忘れたりしかば、之を取らんとて住宅へ立戻り此處に居合はせず。ラポリーは傷を受けしも屈せずして胸に手を當て、同行せる二氏に謂つて同く願はくは余の書類を取れと暫らくして妻は立歸り、ラポリーは路上に於て夫人の膝に枕せり。此時或る労働者が兇漢を取押へんとて聊か奔走せしのみにて、多數の傍觀人は茫然として冷淡なりしかば兇漢は遂に逃れ去り、佛國警察が探偵の機敏を誇るにも拘らず、今日に至るまで尙未だ發見せられず。

れず。

ラポリーの夫人は暫時悲嘆に沈しが、遂に夫を同行の二氏に托し、法廷に突入して援助を請ひ醫師を求めたり。此時リセーの大公堂には傍聽人が正に來集せし際なり。出版監督長は群集を排して、テーブルの上に飛び登つて叫べり。醫者醫者早く負傷者の處へ來れ。ラポリーなるぞと。嗚呼身材魁梧ヴァイキングの如き此人にして、一日以前健全なる體軀を以て出廷せしならば辯護の金城鐵壁なりしなるべく、ドレプーに於ても亦雪冤の望ありしに。

斯く被告の辯護人が災難に遭ひたる事なれば、裁判は延期せらるべしとは何人も想像せし所なるに、裁判長デュー大佐は斷乎として之を進行せり。蓋し佛國の政府と其關係者は一日も早く本件を完了し、佛蘭西全國の人心を鎮靜せんことを願ひしなり。

カシミールベリエー氏とメルシェー氏との對決は何等の結果を生ぜず、殆ど人々の豫期に反せり。但しベリエーの辯論は只何故に己れが大統領を辭するを正當となせしかを説明したるに過ぎず。

ラポロトは自宅に引取られ、醫士朋友は夫人と共に日夜看護に力を盡し、其病狀に就ては數時間毎に公報あり、電信に因つて世界中に傳播すると同時に吊電は四方より輻輳せり。

マートル・デマンジはメルシェー將軍を反詰し、頗る之を窘迫し、併せて彼の證據を論破せしとは云へ、若しラポロトならしめば更に一層好結果を得たるならん、四人の前陸軍卿と一人の前大統領とは同日證言をなしたりと雖、一も本件に涉る事なく唯各自の事を陳述せしのみ。

被告に對して檢事の職を執り、參謀本部の官吏に對して辯護人の地に立つべき人はロージ將軍なり、又本件に最も重要な證人はエスタラーヂ、パーティード、クラム、シワルツ、ペン及びバニザルヂイ等にして、若し之をして言はしめば必ず何事をか言ふべき人々なり、然れども是等の者は一人として證言するを許さず、但しエスタラーヂイは安全にして倫敦に在り、彼は英國の一新聞記者に對し己れが「表紙」の筆者なる事を語れりと云ふ、パーティード、クラム此時已に佛國軍隊の職に在らず、又他の證人と對決するを好まざりしかば、醫師の證明書を提出

して出廷し難き事を届けたり。

シワルツ、ペン、バニザルヂイの二人は法廷に於て立證せん事を切望し、獨伊兩國の君主も喜んで彼等に證明の許可を與へんとせり、然れども佛國政府は外國人の證言を聽かざる事に決せり。

一八九九年六月十二日デュブイ内閣辭職せり、此内閣は常に再審に反對せし者なり、之より十日の後大統領は新内閣を建てたるが、これドレフューイに公明なる裁判を與へ、同時に國家をして左巖右礎の間を擇び、恙なく難關を通過せしめんとするの心算に外ならず。

新内閣の大宰相をウルデク、ルソーと云ひ、前年二月大統領の候補中に在りたれども、ルーベイをして當撰を得せしむるが爲めに自己の投票を放棄せし人なり、氏はアルサースに生れ、誠實にして徳性あり、ドレフューイと郷里を同じうし、又其一家と交際ありしかば、務めて嫌疑を避けて本件に關係せざりき、外務大臣はデクラゼにして前内閣の時も同職を奉じ、フランスよりマルシヤンを召喚すべき任に當れり、然れども英國より大讓歩を得て西阿に於ける佛國の勢力範圍を増せり。

陸軍大臣は侯爵ガリフェー將軍なるがウァルデク、ルーソ、内閣中最も重要なる大臣にして、今正に難局に際して善く其任に適すべき者は即ち將軍なり。何となれば將軍は才能あり、膽氣あり、又軍隊の依信を得、而して常に不規律を惡み、叛亂を制する事を以て著るしく保守黨として指目せられたり。蓋し世襲の名爵を以て自ら得色ある將軍の如きは佛國將校中他に見ざる所なるが、此危機に際して忠實に共和政府に盡瘁せしは亦其類を見ず。

將軍の名が余の筆に上りしは、十九世紀の佛國の中「大復讐」と名づけたる一章なり。右は地方自治體を鎮壓したる事實にして、將軍の干與したる者なるが、余は將軍の性質に關し平生他の公人に對するよりも更に甚しき酷評を加へたり。然るに今は深く之を悔い、將軍を以て非常なる熱誠を有し、勇氣を有し、慎重にして作用あり、而して愛國心に富める人物なりとなす。又其陸軍大臣たりし間の行動は最も人をして敬服に堪へざらしむる者あり。初め將軍の現職に就くや、人皆疾視側目し、獨り暴民のみならず、代議院の中に於てすら、刺客と叫びたる者あり。將軍がドレフエーの無罪を信ぜしは隠れもなき事實なりしも、ドレフエーの爲めに

謀るは其得策とする所にあらざりしなり。將軍は曾つてメキシコに於て腹部に負傷し、爾來銀盤を以て患部を蔽へり。將軍は堂々たる武人にして、衆卒の畏敬する所となれり。今や佛國內外の公衆は如何に將軍が文權に對する武斷派の跋扈を處せんとするかを見んと欲し、首を翹げて之を待てり。

陸軍大臣が以上の如き人物なるに内務大臣となれるミランは社會黨と親密なる人なりしかば、内閣組織の人名が公表せらるゝや、公衆の驚訝は一方ならず。ガリフェーとミランと同僚となる、果して能く相與に佛國を治むべきか。是に於て何人も此内閣の永續せざることを豫想せり。然れどもガリフェーと云ひ、ミランと云ひ、純乎たる愛國の精神に因つて其職に就きし者なり。内閣員は擧げてドレフエーの獄獄問題に一致すると共に、政體變更の虞あることは斷然之を避くるの方針を取れり。但し此危機に當り政府の顛覆を想像せし者甚だ少なからざりしなり。之を要するに新内閣に入りし者は其國の靜謐を以て念となし、斯くの如き艱難の時に際して責任を受くるに逡巡せざりしは名譽の至なり。

之より復びレンヌの軍法會議に就て言はざるべからず、但し連日の審問に提出せられたる證據を一々詳述せば最も興味あるべきも、如何せん其餘地なし、若し其肥録を讀まんとする者は、ステューマンの「ドレフー」の悲劇を閲覽すべし。之まで證據人の中にて最も重要にして且つ其言要點に涉りし者は大佐ジョージ・ビカールなり、氏は二日間陳述をなし、第一日には七時間三十分の長さに及び、秘密文書の事よりエスタラーデ最近の好尚に至るまで殆ど本件の全體を包括し、事實の細大を知れる唯一の人なりしが如し、其陳述は論辯の傑出と稱すべく、審問に於ける智力の勝利なり。

證人の中にフレステ、テラ少佐あり、此時より少しく以前、マダカスカルに於て名聲を顯はせし人にて一八九四年軍法會議の一員たり、其證言に依れば己がドレフーを有罪と判ぜしは専門家の證據と、パティード、クラム、ヘンリー二人の證據に基づき、又多少判事の私室に於て同僚と共に一覽せる四種の文書に因り動されたるなりと、然るに右の文書は後盡く偽物なる事明白となれる者なり、但し其一是「暴徒」……とある文書にして、其一是ドレフーの名を挿入れし文書なり。

マートル・ラポリーは遭難より十二日を過ぎ、八月二十八日復び法廷に見はれた。氏は纒に死を免れ而も今方に病床を離れたるに拘らず、元氣旺盛にして衆人より歓迎せられ、メルシエ將軍は其倚子より起つて氏の前に至り之と握手せり。氏は己れを狙撃せし者の誰なるを知るか、之を言ふ事を得るは何人なるか。ラポリーが論辯に着手するや、諸將校は低頭し、證人は一眼は法廷を見、一眼は反詰者を見て證據を呈せり、憲兵は氣色を生じて審問に列し、廷外の衛兵等は雜沓して内部を窺へり、此日の夕方に至り、ドレフーは其辯護士と第二次の握手を行ひ、初めて彼の顔上に微笑を洩らせり。

書蹟鑑定人として出廷せしベルティオンは、其發明に係れる「カハリッ」法を提出して、ドレフーが表紙の文字を書きたる事を證せしむ、判事は其法を信ぜず、又之を理會するの意なく、且つ許多の反證ありし爲め無効に歸せり。

最後九月八日マートル・ラポリーは有力なる辯護演説をなし、其終結するや、ラポリーの大演説あるべき豫定なりし處、政府の檢事は突然審問を止め、巴里より事件は落着せしとの命を受けたりと云へり、デマンジの雄辯は固よりラポリーの

比にあらざりしと雖、此時の演説は最も感嘆すべく二人の判事は同時に落涙せり。而して其演説中、一語としてドレフューの敵を激するが如き語なかりしは、彼が論破せずして説伏するの手段を取れるに由る。

一時間半の休憩後判事長デューオー大佐は非常なる感動を以て判決を宣告して曰く、「二票に對する五票を以て有罪と定む」と。而して宣公文の終なる「減輕すべき事情により」の數語は何人も聞き取らざりき。

「減輕すべき事情により」これ英米に於てドレフューを哀憐する者より視れば滑稽に過ぎず。夫れドレフューが誠に叛逆の罪を犯したるならんか、加重すべき事情あるも豈に減輕すべき事情あらんや。何となれば其奸計は佛國を亡ぼすに足ればなり。吾人は佛國法律の「減輕すべき事情により」はわが酌量すべき情狀により」と均しきを知らざりき。

吾人は最初判決の理由を聞いて落膽憤慨せしと雖、今日より其事情を察すれば實際當時の處置として之に勝る良策なかりしなり。何ぞや。若しドレフューを無罪とせば、嚮に彼を審判せし法官を有罪となさざるを得ず。而して此法官の過失は

無識の爲めにあらざりして故意に書類を撤去せられ、或は偽造の書類を示されたるに因る。故に真相を發表する時は佛國は二分して互に讐敵となるべく、從來已に危険なる國民黨が軍隊と僧黨とを擁して起るべき憂あり。然るに本件の曖昧に結了せし爲め、何れの黨派も勝利を得るに至らずして諸將軍は天下の糺問を免れ、所謂軍隊の名譽は安全を得たり。十日の後ドレフューは大統領の特赦に因つて放免せられ、軍事上の名譽を除くの外凡て失ひたる所の者を恢復せり。今や世界アルフレド・ドレフューが尊ぶべき人にして、冤罪の爲めに不幸を被りし事を知らざる者なし。願ふに彼をして眞に愛國心あらしめば、其國の治安の爲めに軍職に復するの念を抛つならん。デューオー大佐と此審判に當りたる六人の裁判官は少佐ドブレオン、少佐メルル、大佐バルフェー、大佐グーヴェー、其他二人なり。

彼等が評決に於ける立場は何人も知る者なし。然れどもデューオー大佐が彼の如き評決を渴望せしや疑なし。蓋し「減輕の事情」の文句と、二に對する五の投票とは法律上大統領に寛典を施すべき充分の權力を授くればなり。

マートル・デマンジュの演説を終りし時、判事の一人なるグーヴェー大尉は公然之と

握手し少佐マルルは涙に咽び、ドブレオンの如きは前夜寺院に至り長時間熱心なる祈禱を行ひしと云ふ。

審問の終局せし後佛國は感動に疲れて冷淡となり、宛も大風後の沈靜に似たり。大統領がドレフューを赦免せしは排ドレフュー黨に取つても亦救護に均しき者なり。佛人は爲めに豫想せし革命を免れしのみか、審問が如何にも突然に停止せられたる爲め、其結果に因つて政府を顛覆せんと企てたる者も亦準備の暇あらずしなり。

レンヌの軍法會議が判決を宣告せしより十日を過ぎ、九月の第三週間に於て侯爵ガリフュー將軍は佛國の各軍隊長に命令を發し、各軍隊長は之を兵士に讀み聞かせたるが、其本文の官報に出でたるは大統領ルーベールがドレフューの特赦を宣言せし以前に在り、將軍は此命令の緒言に於てドレフューは甚しく健康を損じ此上拘禁するは危険なる事を述べ、次に政府は速に從來痛むべき衝突の痕跡を一掃するにあらざれば平和を願ふ人心を満足せしむる能はざるべしと云ひ、大統領ルーベールは人道の高義により何人も共和國の爲めに必要とする慰安の手段

の第一證を與へたりと云へり、其命令は左の如し。

事變は落着を告げたり、全國の尊敬を受くる軍事裁判官は獨立獨行其評決を下せり。吾人は往事を棄てて判決に服従す。又之と同じく大統領が深き慈愛の情を以て指令せし處置を諒とす。將來復讐の舉は一切之あらざるべし。故に余は反復して事變の落着を告げたるを言ふ。諸君は切に前途を慮るが爲めに既往を忘れざるべからず。余は之を望むのみならず、事宜に因つては之を命ぜんとす。余は諸君及び我僚友と共に軍隊萬歳を宣告す。此軍隊は何れの黨にも屬せずして佛國に屬する者なり。

ドレフューが別室に在りし時、マルトル・デマンジは涙を含んで判決を告げたるに、ドレフューは先づ流涕して曰く、余が妻に心付け玉へ勇氣を起すべき事を語り玉へ。彼を扶けて此不當の打撃を忍ばせ玉へ。余は憐むべき妻子を思ふ。彼は叛逆人の子として辱を被むるべし。然れども余は無罪なりと。

判決は調和的にして一方は佛國の爲めに革命の憂を除き、一方はドレフューに赦免の途を開きたる者なれば、これ已にドレフューの無罪を證したるに均し。何とな

れば若し有罪の投票をなしたる五人の士官が本心其有罪を信せしならば、此事に於て酌量減刑の事情を發見すべき理由なければなり。従つてまた五年若くは十年の後再び佛國を攪亂すべき賣國奴を縱さざるべければなり。則ち其實は判事全體恩典を政府に請願したるなり。然れども歐米何れの國に於ても此判決に憤慨せざるなく、佛蘭西と同盟なる露國新聞紙の巨擘すらもなほ左の如く云へり。

彼等は參謀本部の罪惡を一身に嫁せられたる不幸の人を判決せり。今や冤罪の人も退場し、將軍、探偵、判檢事、辯護士等も亦皆解散せり。而して聽衆が感慨を以て認めし所は、佛國共和國が過飾なる服裝と粗造なる機制とにより、吾人をして其政治の完全なる事を信ぜしめんとするに在り。審問は悲劇の滑稽に過ぎず。而して其結果一方には軍人の砲門を開くあり。一方には諸不平黨の糾合あらん。

幸にして斯くの如き不祥の結果に陥らざりし所以は大統領ルーベール、陸軍大臣ガリフェールの忠誠智勇與つて力あり。此二人は實に佛國を救ひたる者なり。

ドレフューの特赦に遇ひたるは九月十九日なりしも、之より先き大統領の意思は豫め家族に内達ありしと見え、夫人とメートルラポリーは種々の準備をなせり。然るにドレフューは監獄を出てなば恐らく暗殺せらるべしとの風評あり。非常なる警戒を施し世間の目を味ますべき必要を感じたる爲め夫人はフォルクストンに小屋を賃借し、己れの名を記したる「トランク」をばリヴァプールに送りしが、其實目的地はアヴィニョンより二十哩を隔てたる小都會カルペントラなり。これドレフューの姉にして呉服商の妻たるヴァラプローニの別荘の在る處なり。

金曜日の午前三時、ドレフューは獄中にて「トランク」を荷造して探偵長ヴィグニヤを待てり。但し此人は汽車にてポルドーの途中ナントまでドレフューを無事に送り届くべき手筈にてありしなり。二人は二頭馬車に乗じて監獄を去りしが、停車場に到る以前に之を捨てたり。今やドレフューは復た囚徒にあらず。安穩に寢臺汽車の中に坐を占め、兄マッテュー、姪ポール、ヴァラプローニの二人之を介抱し、外に「フィガロ」の通信員同行の許を得て之に伴へり。此通信員の語りし所は最も興味ある者なれども、餘り長談なるが故に所々要點を摘して之を録すべし。

汽車は午前八時五十八分發なり。余はドレフュー大尉の向側に坐せり。余は實に意外の威に打たれたり。これ迄彼を峻嚴陰鬱にして猜疑深く滋味ある人なるべしと思込みたるに、之と對坐して視れば成程甚だ健康を害ひ居れども、其體格は立派にして善く整ひ、容貌沈着にして溫和なり。汽車は進行せり。マッテューは優しき眼にて弟を見つゝ尋ねて云へるやう、ドレフュー心持は宜しきや。エー大尉宜しと答へぬ。それから兄は余が今日如何に自由を有難く感ずるかを忘れ玉ふや。自由、自由、自由を感ずるのは誠に此上もなき事にて、最早何人も我一舉一動を窺ふこともなければ、借今思へばこれほど嫌な堪へ難き事なし。オ、五年間探偵が付き纏ひし事を思へば、嗚呼實に畏ろしかりし。餘り疲れては宜しからずとマッテューは氣を揉みて注意せり。話をさせて下され、私は何か話をなしたくしてたまらず、それも其筈、五ヶ年殆ど談話をしたる事なければ、其上今別に疲勞も苦痛も精神の奮興も感ぜず、誠に心地善く覺ゆる故、明日になれば殊によると疲るゝかも知れざれども、今日は先づ思ふやうにして見たく思ふとドレフューは答へぬ。

メルシエー將軍の名は不圖談話の中に出てたり。余は問へり、彼の供述は君に如何なる印象を與へたるかと。ドレフューは鋭き調子にて答へたり。彼は惡意あり不正直の人なれども、彼は自分のなしたる害惡の範圍が如何程なるかを自覺するとは思はれず、又余をして斯く言はしむるまでに彼の智慧は逞しきなり。然れども若し彼が心に於て自覺せる者とせば、則ち道德上自覺せざる者なり。彼は道德心なき男なり。汽車が美麗なる村落の間を過ぎたる時、ドレフューは言へり、何と云ふ奇麗な處であらう。見玉へ那處に小さな村が、家禽が、牝雞が、霧に包まれたる高い樹木あり。嗚呼一年の間は天と海とを眺め、四年の間は天のみを見て暮らしたり。頭上には四角に圍まれた青き空が年中同じやうに一點の雲もなく、メタルのやうに輝けるのみ。それより暗夜大雷雨の中を、ポルトより馬車に移されて監獄に入れられたる事なれば、樹木を見るは今が初なりと、更に語を繼ぎ、小供のやうに此牧場を駆け巡り、何も忘れて遊ぶならば如何に楽しからんと言へり。ドレフューはシールケスネーの死亡に就て無限の悲嘆を感ぜし事を語りしが、

彼が今日自由の身となれるは此大最も與つて力ありしなり。其言にかの人は此事件に就て如何にも美質を見はしたり。今考へて見るに私が佛國に歸るまでに受けとりたる手紙は五千通以上にて、妻の受取りたるは此外なり。嗚呼實に善くして呉れたり。但し現職の士官中にも書簡を送りし者もあり。同役の一人は御歸國を喜ぶ。又は御復職の近附きたるを喜ぶなど、書きたるもあり。斯く余の審問に少しの關係なく、唯私の害になるやうにと考へて言ひ送られたる信書の爲めに一方ならざるの迷惑を受けたり。勿論私に惡意あつての事にはあらざれども、要するに長官の意を迎へし事と思はる。余は斯くの如き訓練に従ふ事は出來ず。

二八九四年以來貴下が憎惡を受けられたる原因は如何に解釋し玉ふや。私の考にては其原因は込入つて居るやうなり。第一に私は有罪と信ぜられたので、どうも那の人達が自分て間違つて居ると思ひながら輕々しく深入をしやうとは思はれず、尙一つは隱然猶太人排斥が行はれて居る爲め、それから私の遺方も多少禍を招きしに相違なし。今思へば私の態度が上官に對して餘り

簡卒に過ぎるが如し。第一私が參謀本部に入りたる時誰をも訪問せず、長官に用事ある時でも遠慮などせず、獨立流を押通し、設計や工事等に誤れりと信ぜる事は構はず。議論に及びたり。これは上官の氣に入らざる譯なりと言へり。「エステラーヂー」に就ては何と思ひ玉ふやと尋ねたるに、彼は學者が問題を考込めるやうに暫らく沈黙せり。

私は詐僞師と思ふ。始終金に有附かんとする詐僞師と思ふ。之がかの男の動機なり。凡そ犯罪には動機なかるべからず。然るに私の場合にはこれが缺けて居たり。之まで何人も私の「カード」を持つた事を見たる者なく、私は博奕者にあらず。然るに私の學生時代に贅澤な生活をしたと申せど、それなら何故に九番目で卒業するを得んや。人は試験が何程骨の折れるかを知らざるにや。浪費などをして試験が旨く行く譯はあらず。凡そ人に犯罪の嫌疑があるならば、其何故罪を犯したかを調べる之を第一とするものにあらずや。叛逆は人間の犯罪中一番の大惡で、殺害や盜賊はなほ恕すべき所がありとするも、叛逆には減刑の事情がなし。これ集合體に對する罪なりと。

「貴下は評決の當時は如何に思ひ給へる。ドレフナーは潜然とし答へたり。初めは只痛憤なりき。それより何か茫然として居たりしが、二人の判事が奮つて私の無罪を宣言したりと承はりたる時には非常に喜ばしく思ひたり。私は神に誓つて此二人の判事の公正なる事を斷言す」と。

「マツチーは問へり、デヴィル島の氣候は如何様なるや」と。

「日中一百四度より一百二十三度の暑氣にて、夜中も七十七度より下らず、之程堪へ難き事はなし。唯夜間少し新鮮の空氣を呼吸するが故に、僅に日中の暑氣を忍ぶを得たり」と答へぬ。

「佛國にて汝を救はん爲め種々の運動ありし事に就ては少しも知らざりしか」と兄は問へり。

「一言も唯の一言も時々取締が嚴重に赴く計りなりしが、これは陸軍大臣が演壇に登つて私の裁判が正當であるとの演説をみたる後なりし事をも知り。其結果が獄吏の手を経て私に差響きたるは外でもなく、食物讀書歩行までも妨げられ、海を觀る事の自由すら奪はれたり。」

「一八九六年より翌年に掛け、何として善くも發狂せざりしや。」

「私は生存せんと決心したるが故に、妻子の眞實を、テロプルの上から外へ持つて往きたるが、之を見ると痛ましく弱るが故にして、私は最早之を見ざらんと決心して、終に之を以て人間の形にはあらずして、只標識なりとしたりしが、どうも人間の形なりとせば神經起る。私は妻子の爲めに生存せんと心懸け、又私の精力を失なはざるやう務めたり。人は其義務を行はんと決心したる以上最期まで押通さざるべからざれば。」

斯く夢より醒めたる人の如くに談話しつゝ、ドレフナーは旅行せり。

ドレフナーがアヴィニオンに着せし時、カルペントラより迎ひの馬車と一族の人々は待受けて此處に在り、ブイガロの通信員は此處にて別れたり。

然れどもこの通信員は翌日又ドレフナーをカルペントラに訪問せり。

ウラプロニーの家はカルペントラの郊外に在り、ドレフナー兄弟姉妹と其夫其妻は皆戸前の廊上に集まり、ドレフナーの舅姑は其兒女を喚び來るが爲めに巴里に往きて在らず、ドレフナーの夫人は夫に侍して樓上に在り。

通信員はドレフューに其五ヶ年の惨話を小兒に語るべきや否を問へり。此處に居合はせし人々は反對の考なりしも、ドレフューは之を決せざるを得ず。女子は僅に六歳を過ぎたる計りなれば話さざるべきも、男子は八歳にて早慧伶俐なる性質なるが故に之には語り聞かすも可なるが如し。

間もなくドレフュー夫婦は通信員に面會せんとて樓上より降り來れり。通信員の語る所に據れば、ドレフューの一族は何れも微笑を合む場合には其面上に親愛の色あり。

ドレフューは編倚子に樂座して言へるやう、自分では尙夢みつゝあるが如き心地す。賊に我ながらまだ自分の身體ならざる心持ゆゑ成るべく子供の如く致されて居たるが、經歷中の悉しき事は今以て確かならずと。

又デザル島に在つて希望の微光を認めたる當時の事を問はるゝや、答へて曰く、「去年十一月十六日大審院より公文を受取り之を讀みし處、罪人ドレフューに告ぐ、刑事局は一八九四年の裁判を再審すべき汝の要求を受理せりとあり。然るに私は十分其意味を了解致すとを得ず。只私の差出した許多の哀訴狀を承認

されしのみ、の事と思惟したれども、此日より聊か望を生じ何とかなる事もあらんかと思ひ初めたり。思へ郷土、此時までは前途全く望なかりしなり。

ドレフュー事件の幕は茲に下り、吾人は彼が天と地と自由なる空氣を享有して妻子と幸福の生活をなすを信ずるのみ。但し心中には放免に止まらずして佛國軍隊より全世界の人より名譽ある人と視做さるべき願を有し、多少隔靴の嘆あらん。然れども唯官憲より公宣せられざるのみにて、此目的は確に達したる者と謂ふべし。其兒女は世界何れの地に到るとも其父の名を聞かば何人も之を敬するなるべし。

第五章 大統領エミール・ルーベール

大統領ファールの死去は如何にも急激なりしかば、不逞の徒も其後任に就き革命の奸計を熟するに暇あらざりしなり。或は窃に謂へり。ファールは、プレビシタリ！
リパブリックを有する共和政治を可とするの意見に相違なき故、他日此政躰に於て任期終身の大統領に撰擧せらるゝ事を豫想し、憲法變更の心算を運びしなるべし。其英國のソーダンに關する計畫を妨害するが爲めに、マルシャン少佐を阿非利加に送りたる詭計は不幸にして失敗に歸し、幾何もなくして不起の病に罹りしが、病源の悔恨苦悶に在るとは衆人の認むる所なり。若し之をして成功せしめんか、佛國の人望は一身に集まり、終に其野心を達したるも亦知るべからず。然るに氏の外に又之と同一なる計畫に従事せる者あり。主長の更迭と政躰の變更とを豫想し、其機に乗じて意中の人物を大統領に擧げんとせしが、其凝せし所の人は

フートルにあらずしてオルレアン黨なり。然らざればボナパルト黨の僞稱者なり。國民黨が何事をなすの暇もなかりし事は已に述べたるが如し。彼等は實に其黨與を集むるの暇も、宣言を發するの暇もあらず。但し奸計に因つて軍隊の暴動を挑發するを得たるも亦知るべからず。然るにポートル・デルーレドの燥急愚鈍の爲めに其機會を誤れり。

一八九九年一月七日、元老代議兩院の合併投票に因つてルーベールを大統領に撰擧し、茲に共和政體の鞏固を確乎たらしめ、佛國は百事平和の時代に入れり。左に載する一篇はルーベールの推薦に係る逸話にして、エミリー・クロイフォルドが「グロド・ウアルド」に投じたる者なり。ドレフイー事件の軍法會議に方り此人のレンヌより發したる報告は、一八八九年の夏より秋に掛けて吾人の深く興味を覺えし者なり。

大統領撰擧の前夜クレメンソーが寢褥に就かんとせし時、其友人なる一代議士の來訪を受けたり。クレメンソー曰く、余は明日誰を撰擧すべきか頗る困却せる處なり。ブリスソン(穩和急進黨)は嚮に代議院撰擧のデューシャンに敗れたれ

は見込なし、唯如何にしてもメリュー(反動黨)を出さざる様になさざるべからず。難儀なる事には彼は選挙に就き凡ゆる好都合を有すとクレメンソーは暫く黙考せし處、ルーペーの姓名、身分、資格は不圖念頭に浮びしかば、ルーペーが宜しと云へり。蓋し共和黨の名士はルーペーの撰舉に同意せしむるを得べし。ルーペーはドレフイー事件の時其無罪なるを信じ頗る情理を得たり。但し自説を明言するの機會に遇はざりしかば従つて敵を作らず。今又數時間の中に迫れる撰舉前に人の反情を招くべき舉措をなすが如きはなかるべし。習氣と云ひ性格と云ひ、大統領に適當なるのみならず、又兩院の操縦を解せり。左様ルーペーが宜しと客は賛成しながら、オロールは最早印刷に付せられたるかと思へり。若し未だ印刷に付せられざらんには直に新聞社に赴きてクレメンソーの説を掲げしめんとせしなり。クレメンソーは試に往いて見られよとて一文を草せしが、其結尾に候補はルーペーと記せり。氏は之を書きながら笑へり。但し氏は撰舉人にあらざればなり。右の論文は翌日紙上には見はれ凡ての撰舉人はヴェルセーユに赴く途中之を讀み、ドレフイー事件の落着を望みし者は心の

中にて、わが候補はルーペーなりの語を繰返せり。而して此日の午後ルーペーは巴里に還り大統領に撰立せられたり。

シエツジュ(佛國南方の古代新教徒の城址)の群山に在つては、一種親切にして伶俐なる牧羊狗をルーペーと呼べり。

ルーペーは三十五年間辯護士の業に従事し、正直行々焉たり。其言語の、アクセントには其生國なるアルプス山麓ドロームの餘韻を帯びたり。然れども其容儀に至つては恭敬にして世故を厭たる者の如し。但しエミール・クロイフォルドは氏を評して紳士よりは寧ろ市民なりと謂へり。

ルーペーの政治生涯はモンテリマルの市長に始まり、尋でドローム郡會議長となり、次に其州撰出の元老院議員となり、一八九二年内務大臣に任じ、幾何ならずして元老院議長に擧げられたり。其郷里なるドローム州の人心を得たるが、モンテリマルに在るや、市長たる外に辯護士を業とすること三十五年、唯モンシエールと呼べしに過ぎず。其大統領となるに及びても此地の市民との友情交誼は毫も異れる所あらざり。

氏は縦令大人物にあらずとするも、其身世の百事皆人を感ずるに足り、忠誠以て其義務を全うせり。其夫人は今や人の祖母なれどもなほ容色あり。而して女流の間に榮譽を誇街するの心なかりしと雖、静淑にして品位あるに至つては世界有数の婦人なり。

ルーベールの初めて大統領となるや中流の交遊に書を與へ、境遇の變化に因つて交情の異同を生ずべしと思はざらん事を望めり。氏を識れる者は其榮選を悦ばざる者なかりしに、氏の母のみは甚だ之を喜ばざりき。これ蓋し大統領の位地を以て其子の幸福にあらざるべしとなしたるが故なり。其子が己れを故國に歸省するの餘暇なかるべきを憂ひたるが爲めなり。

ルーベールの孝順に就ては少からざる美談あり。但し佛國の中氏の生長せし處は天倫の關係に於て最も母を重しとせり。則ち氏の如き孝子を出せるは偶然にあらず。然れども氏の家族に對する一として其宜しきを得ざるはなく、獨り孝行のみにあらず。氏は元來故郷の田園生活を愛せしも運命は氏を驅れり。乃ち其モンテリマルの舊友に送りたる書信に云ふ。余がエレッジを去りし時は即ち故山の

生活を終りたる時なりと。

オルレアン王家の繼嗣なる巴里伯は一八三八年に生れたるが、其慶賀の最中に呱呱の聲を揚げたる者は即ち彼に代つて佛國を統治するの運命を有したるルーベールその人なり。

氏の父母は信神家にして善良なる舊教徒なりしと雖、過激なる僧黨派に異り、氏は心身兩つながら勇敢の人にして、其道義の勇はドレフュー事件に於て之を見る。この時に方り苟も其職に在る者は若し一八九四年の軍法會議に疑團を懐く以上、其信念に従つて行動するの勇氣あるを必要とせり。然るに前大統領フールは再審問題に當るを憚りしが、これ危險を恐れたるなり。是に於て大統領の職權を以て再審を裁可するの難事はルーベールの引續ぐ所となれり。願ふに本件の落着如何は獨り佛國のみならず世界の物論を沸騰すべき者なれば、フールの畏懼は果して先見より出てたるか、將た怯懦の然らしめたる所なるか、容易に之を斷ずる能はず。蓋し再審の歸着する所はドレフューの處刑にあらざれば、則ち其放免なり。而して放免の場合には佛國將官の中賣國の罪に問はるゝ者あらんとす。これ

再審の許可を躊躇せし所以なり。大統領フォール死後二日を経て大統領ルイベーがヴルセーユより巴里に来るや、巴里の匪徒は之を機として氣勢を示し、其首魁はデルーレド、ロージュ、フルト、マシユル、ハーベルにして、此三人は以前ブーランゼー黨に屬して奔走し、常に現在の政府を顛覆せんと謀るの徒なり、匪徒がルイベーを望んでパナマ黨と叫びしは、これ一八九二年に氏の在職せし内閣が佛蘭西の國辱を掩はんが爲めにパナマ事件に關係せし有力なる人士を曲庇したる事あるに由る。デルーレドは新大統領を迎ふる爲めに召集せる兵士を煽動し、之をエレンジーに進ましめんと百方努力せしと雖、ロージュ將軍が軍隊を制して動かざらしめたる爲め其志を遂ぐる能はず。これデルーレドの意外とせし所なり、何となればデルーレドは窃に將軍の援助を待みしを以てなり、將軍がレンヌの軍法會議に於て自ら好んで檢事の地位に立ちたるのは是非善悪は兎もあれ、將軍は終にこれ武人なり、能く其職務を知り、又軍隊が匪徒に對して己れの指揮に従ふべきの義務を知れり。

數日の後大統領ルイベーは元老代議兩院に第一回の通牒を送り、其中に言へるあり、余が憲法に由つて有する所の諸權は、苟も余の掌中に在る間決して薄弱ならしむることを許さずと。

この言たるや其政略の大義と其性質の本色を示したる者と謂ふべく、一言之を評すれば堅實これなり、氏は白髮白髯にして酷だ大統領ベンダミン・ハリソンに似たりと云ふ者あり。

巴里の卑陋なる諸新聞は筆鋒を並べて新大統領を毀り、而して其極端なる縱令大統領が重罪を犯せしとするも之より以上の罵詈雑言を受けざるべしと思はるゝ程なり、然れどもルイベーは斯くの如き讒誣脅迫を事とせず、泰然として徐に其道を行ひ、兇魁デルーレドを捕へて之を拘禁せり、抑ブーランゼーの首領たりし當時、さしにも強盛なりし愛國同盟もデルーレド之を率ゆるに及んで全く妄誕の會合となりて信用を失へり、大統領ルイベーは俄に其内閣の更迭を行はず、シャルル・テブネの内閣は屈強なる排ドレフネー主義なるに拘らずして其職に留り、六月上旬大審院が再審を決定せし時に至り初めて其職を辭せり。

既往四箇年間佛國には、罪惡と獄訟と交、相繼いで底止する所なく、大官の中惡名を受けざりし者は、僅に指を屈すべし。ルーペーは初より志を決して以爲らく、今や自由と放肆との區別を立て、惡弊の進運を遏むべき時なりと、然るに氏を敵視せし者は極めて夥しく、其多くは政治上の信念あるにあらず、只政府の顛覆を以て唯一の政略となし、彼等は自ら國民黨と稱す、而してこれ實に首領を失ひしブーランゼー黨に外ならず、其中の種類を擧ぐれば、正統派、オルレアン派、社會青年黨、ポナバルト派、社會黨の一部、ローシ、フオルの率ゆる無政府黨、デュール、ギューラ、ンドリ、モーモンの率ゆる排セミテック黨、共產黨、僧黨等、凡て政變を以て自說を張り野心を逞うすべしとなせし者は、皆此中に在り、然れども國民黨の雜派間には、團結力を欠けり、是に於て彼等は首領を要し、殊に軍隊の援助を要せり、乃ちドレフェー事件の時の如き當局の諸將軍に後援をなして恩を賣りたれども、其目的は空しく畫餅となりぬ。

佛國の王位を覬覦せる僞稱者は少からざるも一として衆人の推戴に達せし者なし、是に於てマルシャンがフシシグダよりツローロンに到着するに當り、彼等は之を挾

て一のブーランゼーとなすべき望を抱けり、然るにマルシャン少佐は尊ぶべき將軍にして正直なる紳士なり、直ちに勇退して私生涯に入り、彼等の計畫をして齟齬せしめたり、マルレアン公自らフィリップ七世と稱すは、虛稱者中最も録々たる者なり、但しルイ・フィリップは五子三女を有し、皆有徳の人なりしが、其孫に及んでは一も高尚なる性質を有する者なく、ブルガリアのフェルディナン公子然り、オルレアンのヘンリー、然り、フィリップ二世亦然り、フィリップ二世が既往二ヶ年間人望を得たる所以は、其所謂「軍隊の防衛」の爲めに自說を發表せしに由る、これ激烈なる排ドレフェーの意見を述べたるものなり、而して「ル・リール」の鄙陋なる諷刺畫師は英國の南阿に於ける最初の蹉跌を機會として女王を辱しむべき戲畫を造りし時に方り、オルレアン公は英國の恩誼を忘れ、此畫師に書を送つて謝意を表せしが如き適、以て其人となりを見るに足る。

ドレフェー、フレバスケー公は從來オルレアン及び正統派の爲めに周旋する力めたるに、フィリップは一八九六年オルレアン公に「王者の當に行ふべき事に就きて余の知識卿に勝ると言ひ之を輕侮せしが、之が爲め兩黨の心を失ひ、又英國の君

民を辱しめたる爲め退合極めて深かりし侍従リアーエの援助を失へり。但し氏は佛國の貴族中第一の富豪なり。

一八九〇年フィリップは放逐條例を犯して巴里に來り、佛國の公民として兵役に入らんことを要求せしも志を達せず。其後牢獄に送られ數月にして放免に遇ひたりと雖、佛人は其利害休戚を視る甚だ冷淡なりき。之より後フィリップは僞王の行動をなして自ら喜び、或は「キングス・イヴ」國王が手を觸るれば平癒を云ふを行ひ、或はルイ十四世等の救命を發し、其甥の如き威嚴あり尊敬を得べき所行に出でず。然るに佛國がドレフター問題に就て騒然たりし時、國民黨中彼に心を寄せたる者は之を推して名義上の首領たらしめんと欲せり。而して僧黨の如きは法王の忠告を無視して其後援をなせしが、其領袖は竊に武官の助を期待せしのみならず、從來法律家の政治に倦みたる撰擧人と、強硬なる外交政略を望む者との援助を得べしとなせり。而して強硬なる外交政策を望みし者は以爲らく、縱令之に因つて佛國の財政を害するも國威を恢復するに足るべしと。

フィリップは一八九九年ブラッセルに住居を定めしが、一ヶ月計にして其所在を失へ

り。而してなほブラッセルに在りし時、其代人ビラフエーをして巴里を管せしめ、全國の國民黨に準備を命じ、其結果は先づデルーレドの妄舉に見はれたるも、右は革命と云はんより寧ろ不平の發動に過ぎず。其失敗は全體の計畫をして一敗地に塗れしめたり。

デルーレド、マルシユル、ハーベリ二人は兵士煽動の罪に問はれ、其審問は一瑣事に過ぎざりしと雖、其光景に至ては演劇的なり、感動的なり。乃ちデルーレドは華麗なる時様にて出廷し、此場合を利用して政府に對する敵意を宣揚せしが、其言に曰く、己れの佛國に望む所の政體は王政にあらずして、プレビシタリ、共和政體なりと、其他の被告及び辯護人も亦皆各自の愛國心を演説して、大統領ハーベリを攻撃せり。デルーレドは其言論に就き判事の注意を受けたるに拘らず、なほ之を反復せしが爲め牢獄に送られたるに、僅か二十分にして陪審官は放免の評決を下し、デルーレド遂に勝利を制したり。イッヅグ・イヨは「世紀」に於てデルーレドの事を諷刺して曰く、

デルーレドは嘆稱するに足る人物なり。彼は「パリスタル」の子にして十分詐

偽の術に通じ、又能く之が使用を誤らず、彼は己れの名聲が奇行異風に本づく事を知れり。又佛國に於ては、縱令厚顔を以て譏笑を以て滑稽を演ぜんか、滑稽も亦決して其人に不利ならざる事を知れり。譏笑は最良の廣告にして、人をして有名ならしむ。百千の眞面目なる行爲は一八一五年の半俗官吏の着せる奇妙なる帽子又は上衣に若かず。デルレードは新奇特別の役割を案出せしが、右は愛國心の傀儡なり。他人は國に盡すの道を以て己れの名譽富貴を増すべき事業をなすに在りとなすも、デルレードは以爲らく、眞の愛國は毎夜奇異の服装をなして演臺に登り、高聲を揚げ、狂態を作すに在りと。

一八九九年六月七日の日曜日、以て大統領ルーベは競争を観るが爲み、オートニュに赴きしが、之デルレード等の放免より三日の後なり。國民黨中の王派に屬する愛國同盟は豫め敵意を以て之を待ち、馬車の進行するや直ちに暴舉に出でんとし、巡査は大統領の爲め之を防いで、重傷を負ひし者少なからず。クリステリアニ伯は杖を以て大統領の頭を打ち、眼上まで其帽子を壓し潰せしが、幸にして格別の害を受けざりき。競争の中愛國黨と巡査の間に小闘あり。共和黨は巡査

を助けたり。此件に就き人心の激昂一方ならず、逮捕せられたる者三十人に及び、流行のクラブの中陰謀の巢窟なりとの理由を以て閉鎖を命ぜられし者あり。然れども當時の騒動はこれに止り、青年王黨は他日機會を待つて著名なる王黨の一將軍にして將來國王となり、皇帝となるべき人を擁して再舉を圖らんとせり。次週に至り、デブプイ内閣は辭職に及べり。但し何故に代議院が更迭を議決せしかは未だ明白ならず。一八九四年ドレフの初めて逮捕、審問、處刑を受けたる時に方りて、デブプイは大宰相の職に在り。若し再審を行はば一切の醜體の暴露すべき事を豫想せしが故に、務めて再審を避けたりとは衆人の思惟せし所なり。勿論再審の結果參謀本部の行爲を查察するに至り、従つて幾多の大官が黜罰を受くべきは固より疑なし。

新内閣組織の困難なりし所以は、重要なる人物が斯くの如き危機に際して國家の要路に當り畏るべき責任を負ふことを憚りしに在り。然れども結局所謂集中内閣なる者の成立を致せり。而して之を組織せし者は共和黨全體の中最も卓越し、最も愛國心に富める人物にして、ウアルデンブルグ大宰相となり、デルホフ

外務大臣となり、ガリフェー將軍陸軍大臣となり、デューチートと共にドレフュー事件に關係せしミランも亦内閣に列せり、但し此内閣に就てはドレフューの章に於て之を述べたり。

ガリフェー將軍は就職の初首として一大將一大佐の譴責懲戒を施せり、但し此大佐はレンヌに駐屯せる聯隊に一議員の手録を聞かせ、卑陋痛切の語を以て政府が叛逆罪の再審を致さんとするを誹りたる者なり、乃ち直ちに其罪を以て他州に移され、而してテューアル將軍代つてレンヌの戍兵を指揮せしが、これ亦他の議員の手録を引いて前に解せられたる大佐が上官の十分なる信用を有する事を言へり、ガリフェー將軍は斯くの如き直接の攻撃を看過すべき人にあらず、此週遂に公然排ドレフュー黨を以て自ら任ずるデューランデン將軍を罷め、不順の傾向ある高等の武官は之が爲めに厭慄せり。

七月より九月に互り佛國は勿論歐米に至るまでドレフューの審問に就て人心動搖せし事は余の已に述べたる所なれども、レンヌ軍法會議當時巴里市民をして恟々として憂懼せしめたる奇異の騷擾に就ては未だ之を述べざりしが故に、今

其大略を擧げんとす。

八月二十一日無政府黨は王黨及び青年團體を離れ獨立して暴動を起し、セバスクンフール之を率ひ、街上にて砲兵騎兵と闘争の後、市内の稍貧窮なる部分に於て教堂を襲ひ其窓戸を破壊し、尋てブールヴェールド・テムブルに進みサン・テ・セップの教會に迫り、柏材にて造れる戸を破り破つて闖入する、や擅に劫掠を行ひ、香案雕像を地に投じて粉碎し、繪畫を裂き石と十字架像に投じたるが、暴行は之に止まらずして教會を焼却せんと謀りしも、會、巡査が現場に來着せし爲め事なきを得、若干の暴徒は逮捕せられたり。

此時に方りブール街のアンティ・ディフ新聞社に據れるデール・ギエラン及び之を助くる其排セミティック黨の人々は六週間巡査に抵抗し、新聞社はシャープロール要塞の名を得たり、但し兵士と巡査とは一舉して之を陥れ、其守兵を殺すは容易なるに、其然らざりし所以はオルレアン公がブラッセルより影を匿し、其中に混ぜしが爲めなりとは一般に信じたる所にして、巴里の大教正がギエランの爲めウルテングルーソーを訪問せしより益、此信念を固うせり、又彼等の糧食缺乏の時に

際し窃に之を占領せる二層樓の家屋に入る者あり。オルレン公の所在を知ると稱する「マートン」は彼に就て云ふ。彼は常に己れの動靜に注目する腹心の徒を離れ最後の判決(ドレフテ)の放免を待つて公然世に現はれんとするなり。若し其所在發見せられれば大に人を驚かすべく、而して彼の臣下は彼が已むを得ずして潜匿したるを怨まざるべしと。

九月二十日は即ちドレフテの放免が公布せられたる日なり。此日午前四時半ギエランは其部下と共に降を乞へり。政府は豫め此日を期して最後の攻撃をなすべき準備をなしたるも、ギエランは血を流さずして降服すべき決心をなしたるなり。

警察長と社會黨撰出の議員なる「シュヴァーエ」はシヤブロール要塞の門戸に近づき、何事か談判の後ギエランは從容として降参し、ポルチに群りたる徒黨も亦之に倣へり。然るに巡查は其姓名をも問はず其身體をも検査せずして之に告ぐるに彼等は自由を許され各其欲する處に往くを得ることを以てし、豫め彼等を待受け

たる一頭馬車若くは辻馬車は之を乗せて別々の方向に馳せ去れり。但しオルレン公が群中に在りたる證據はこれなかりしも、巡查が要塞を占領せし時公の所持したる手提を發見したりと云ふ。オルレン公は直ちにブラッセルを去つて「ネーラン」に向ひ、少なくとも大博覽會の終るまでは革命の望を絶てり。

ギエラン降服の時に方り、リクセンブルグに於ては隠謀罪の被告二十二人は審問中なりしが、其中には再審の「デルーレ」あり。他に愛國賞員「排セミテ」同盟員「排セミテ」少年協會員、青年王黨協會員あり。抑、佛國に於ける「排セミテ」感情は宗教の感情と何等の關係なく、只資本家として猶太人を排斥し、ロースチャイルド及び此種族中有名なる人士の慈善事業を排斥したるのみ。殊に巴里守城の時の如きは少しも資本主勞働者の争に涉ることなく、宛も「レイブラン」が「ブルジョア」を排斥せしと同じくかれ一流の政治家は猶太人排斥論を唱へしなり。

「ピラフュー」は巴里に於けるオルレン公の代理なり。政府はその家を搜索して種々の文書を發見せし處、其中一八九八年の冬巴里に於てオルレン黨隠謀の準

備ある事を配せる者あり。又一種の書類に據れば、オルレアン黨は極めて名聲赫々たる一將軍に絶大なる好餌を啗はし、モンク將軍の例に倣はしめんと欲したるも、其將軍は豈に我をして國賊たらしむるかと怒つて之を斥けたる事あり。デルーレードは審問の間絶えず自ら民主黨なりと稱せしも、暴動の資に供せんが爲めにオルレアンの金を使用せし證據あり。

偽稱者としてオルレアン公ビリッブに次ぐ者はヴィクトル・ナポレオン公主にて、其父はナポレオン・ボナパルト(皇帝ナポレオン三世の姪母はヴィクトル・エムマ・マテエルの女クロイティルド公主なり、然れども公子は平靜の人にて或は愚鈍となす者もある程なれば、到底王位を得んが爲めに活潑なる運動をなすに適せざるとの評あるや久し、且つ公子が微賤の女を娶りしも亦榮達の障礙なり、而して舊教の教會は其離別を許すの意なきが故に、之を如何ともする能はず。

佛國ボナパルト黨の希望は彼の同胞ルイに屬せり、ルイは露國の軍籍に在りて砲兵大佐の職を奉じ、之より前ヴィクトル公子より帝位に登るべき口實を譲られたる者なり、然るに一八九九年の一月初週、新聞紙はヴィクトルの計畫を豫表せ

る鼓吹の條項を載せたるが其言に曰く、心志の冷淡と意氣の消沈とは佛國を薄弱ならしめたるが故に、余は必要なる限り武力を用ふるを避けず、而して遠からずボナパルト將軍となるべき余の同胞は實行の日に於て余と事を共にすべしと。

實行の日は一八九九年には來らざりしと雖、此思想がヴィクトル公主の念頭に存する事は、同年最後の週間にアヂクシオの市長に送りたる書簡に據りて之を徵すべし、蓋し此年はナポレオン第一世が第一執政に推薦せられたる一百年目に當れり、倫敦、スベクテートルは曰く、此時に方り佛國は漸く王位を覬覦する僞稱者を疑ふに至れり、然れども凡ての點に於てヴィクトル公主は其競争者なるオルレアンに比して利益を有せり、蓋しオルレアンの公然打つて出づる事は之に好意を抱く者をして失望せしむべきや必せり、且つオルレアン公は思慮なく威嚴なく、如何なる目的にも干渉するの能力を有せず、然るにヴィクトルはオルレアンの如く屢ば之に干與せざるも、其之に干渉するや、態度辭令共に愈れり、近來の事件に於ては則ち曰く、國旗は何物よりも重んぜざるべからず、然れども余は愛國

心を以て詐偽を犯すの口實となすを不可する者なりと。ルイは訓練を経たる武人にして、セント・ピーター・スボルグに於て寵幸を得るが故に、若し佛人が露帝の選定せる君主を戴くを喜ぶの日に至らば、ルイの如き無双なる候補の目前に在るは幸なりと謂ふべし。之を要するにルイは王孫に似ずして寧ろ愛耳蘭の冒険者に似たり。曾つて西藏及び東京を探險し佛國の旅行家として、レジオン・オブ・オナーの榮譽を授けられたり。而して其三年以前アビシニアに至るや、一は新聞紙の通信員たる資格を以てせしむ。一はメチツク王を煽動して英國の計畫を破壊するの心事に出でたるなり。此計畫は佛國に於て人望を得る良策なりしも英國公使ロッドの外交政略に因つて失敗に歸せり。彼は又從來親密なりし伴侶の紳士と隙を生ぜしのみならず、通信員の資格を以てアドワンの戦役に於ける伊太利官吏の行動を論評せし爲め伊太利人の怨を買ひ、同國の士官は之に決闘を挑むに至れり。然れども王孫と庶人とは名譽上得失を異にするが故に、テネラン伯(前西班牙王の三子)は自ら是等の官吏を代表してヘンリーと巴里に決闘を試み、ヘンリーは重傷を負へり。之より以來彼はエヌテラデー

を崇拜して猶太人ピカール・ゾラを敬視せる地方は何れに於ても其名を喧傳せり。デアル・レイドは元老院が高等法院として再審を開きたるとき、法廷に於て大統領ルーパーを攻撃し、法廷を諷つて不直不潔と曰ひ、元老院を惡漢と曰ひ、大統領を佛國の冗物なりと曰ひしかば、遂に法廷を侮辱せる罪を以て、二ヶ年の禁錮に處せられしが、これ一は大博覽會の終るまで之を禁錮して害をなさせらしむるの意に出でたる如し。

○〇年の一月以來佛國は前年の騷擾の後を承けたる割合には靜謐を得たるが、これ政府の樞要に在りし者が剛堅にして共和國の防衛を以て自ら任じ、小心翼をとして其抱負を行ひしに由る。而して閣員中最も剛毅なりし者はガリス、將軍に外ならず、ピカール、フレースタ、テリ等の如きドクス事件に危難を冒して正義を主張したる士官を拔擢せしが如き、最も其敢爲なるを見るに足る。又軍人の昇進は從來參謀本部の道にせし所なるも、將軍は之を己れの手に歸せり。一八九九年將軍は令を發してアブサント、ヴェルモ、ニコニク等の飲用を禁したるが

右は固より軍隊の心を得る所以にあらざりしなり。一八四八年余が巴里を去りたる以來、佛人の酒癖は一大變化を致せり。當時は下等の人民が擾亂を敢へてせし時と雖なほ酔漢を見ることは罕にして、兵士並に職工は大抵國産の葡萄酒を飲みたるなり。然るに爾來アペリタンと云へる酒の輸入せられたる結果、監獄瘋癲院等は其犠牲となれる酒客を以て充滿するに至れり。ガリフェーは區々たる酒の爲めに己が勇氣能力を盡して訓練を施し改良に従事せる軍隊を賊はんことを恐れ、五月初旬斷乎として此命を發せしなり。然るに其下旬に及ぶや内閣は危機に際せり。蓋しこれより前情報局は陸軍の手より警察の手に移りしが、其一官吏は埃地利の革命家なり探險者なるシユルナスチーに贈賄せし人物を査究せんとせり。但しシユルナスチーはドレフェーの審問の最終日に出庭し、ドレフェーに不利なる間接の紛證を提せし人なり。而して國民黨は此査究の結果を少佐フリチに内通し、フリチは己が官文書を剽竊せし事の陸軍省に知らるゝや參謀本部の職を免せられたり。此問題の代議院に見はれし時大宰相は其演說中フリチを重罪人と稱せしかば、軍隊の譽を辱しめたりとの非難を

受け、代議院に於て辯難攻撃交起りたるに際し、ガリフェー將軍は敢へて一言をも述べず、内閣を辭する旨の短文を遺して議場を去れり。將軍は齡七十歳に達し且つ心臓を憂ひ、又メキシコに負へる創傷の爲め頗る體力を害し、自らも最早重任に堪へ感動を制する能はざる事を言へり。但し其議院にて卒倒せざりしは全く堅忍の致す所なり。

ウアルデックルソーはデルカッセルを遣はしてガリフェー將軍に留任を勸告せしめたるも其効なく、將軍はアンドレー將軍を陸軍大臣の後任に推薦せり。アンドレーが就職の初に於ける行動は世上よりドレフェーに不利を與ふる者なりとの想像を受けたれども、幾何もなくして參謀本部一掃の舉に出でたり。將軍の年齒はガリフェーより少きも其軍規を維持するの決心は夙に確證あり。其次の週に至り元老院はドレフェー事件を落着せんが爲め大赦案を通過し、此事件に與りし者は盡く罪を免れ、ドレフェー、メルシエ、ビカール、エストラデー、ゾラ、ロージ、バード、ドクラン等皆將來の審問を免れたり。當時、デルレード及び其徒黨を大赦の中に加へんとせし勸議ありしも排斥せられたり。而してドレフェー

の朋友等は又此案に満足せざりしが、これレンヌ軍法會議を翻へすの機會を奪はれたるが故なり。然れども佛國の平和を致す爲めには恐らくは之に勝る良策なかるべし。

總撰舉に於て政府は地方に大多數を得たり。然るに國民黨は巴里に成功せしを以て狂喜せしが其最も猛獳なる候補者が市會に撰出せられたるが爲めなり。是に於て佛國は再び巴里對地方の現象を成せり。故に大博覽會後の時局は知るべきのみ。今佛人慣用の説明を借りて之を言はんか、吾人は應に見るべき者を見るなるべし。

既往五ヶ年間佛國の一部に於ては唯一の變化あるのみ。而して其變化の端は已に見はれ、今や方に之を解釋しつゝあり。即ちアルサース、ローレーヌは佛國を懷ふの心次第に薄らぐと共に、獨逸政府の下に受くる經濟上の利益を認むるや益深し。從來利益に關しては獨逸に向ひ愛國望郷を心に於ては佛國に向ひじ處。過去十八ヶ月間の事件は大に此狀態を一變し、アルサース、ローレーヌの事情を知ると稱せる某氏が倫敦、タオムスに投書せる一篇は之を徴するに足る。今其一部

分を摘録すべし。蓋し彼は細民の語を用ふるを解し、從つて其人民と親交ある、他人の及ぶ所にあらず。

一八九〇年余がアルサースに於て發見せし所に據れば、其輿情はなほ獨逸に反對して佛國に歸依せしなり。然るに去年に至つては此事情全く一變し、佛國の屬地の内に算せられ、佛國の風習慣例を用ひ、佛國の言語の行はるゝ地方に於ても亦相反對するの事情を認めたり。勿論佛國に對して愛情を有し往事を語るを樂しむと雖、彼等は曰く、本國と分離せしは誠に幸運にして未來永劫再び結合することなからん事を希ふと。蓋し斯くの如き感情の變化を生ぜし所以の者は佛國政治の堅固ならざるに在り。政治道德の墮落に在り。其主張を失ひ目的の立たざるに在り。今や佛國は鞏固にして自覺ある政府を有するも、ドレフネ事件は大にアルサース人の心を喪ふに與つて力あり。アルサース人は排セミテ、ク主義を解せず。彼等は常に猶太人を愛して之を寛容せり。抑、アルサース人より視ればドレフネはアルサース人なり。其家族は熟知する所なり。而して此家族は忠義愛國の精神より故郷を去つて佛國人となりし者なり。然

れども其アルサーヌの産なりし事は其一子をして冤罪の犠牲たらしめぬ之を以て之を言へば愛國の諸將軍の長くアルサーヌの感情を害し曾つて最も忠實なりし佛國の赤子をして本國と絶縁せしめたる者なり。

（以下は非常に淡く印刷された文章が続き、内容はほとんど読み取れない）

第二編 露西亞及び土耳其

第一章 アレキサンダー第三世

ニコラス第二世

余の著はせる十九世紀の露西亞及び土耳其の史稿は一八九三年の九月を以て殆ど完成に及びたるが此時に當りアレキサンダー第三世方に露國に君臨し此大帝國の富源を資として其政略を發揮するに汲々たり蓋し其本意は露國全土の人をして己れを俗界の君主と認むるに止らず併せて教界の元首と仰がしめんとするに在り帝以爲らく己れは我眞教を確立するの天使なりと因つて以て露人の爲めに其昔モセス、デビヤがイスラエルの子孫の爲めに成就せし所のものを再現せんと欲したるに外ならず而して其所謂眞教は神聖希臘正教即ちこれなり。

帝が學生の理想とする所茲に在り御宇の間務めて一切の權力を吾手に收め宰

相を統御して毫も假す所なかりしは之が爲めなり、唯此業たる一大難事なりしを以て流石に強健の帝も爲めに其天壽を促し、纔に中年に至つて崩殂せり。抑帝の欲せし所はその即位の誓言を履むに在り、其自ら信じて神慮なりとなす者を行はんとするに在り、吾人は其意を諒とす、然れども其意を諒とすると云はんよりは寧ろ其幾多の失敗を恕すると云はん、而して吾人は一方に於て帝を恕すると共に、一方に於ては上帝アブダルハミッドの行事に就いても亦同じく之を恕する所あらんとす。

嗚呼上帝願はくはわが爲めに賢者と善人との過失を宥せとは、チャールズ二世の時善僧の名ある大教正レイトンの祈禱に陳べたる辭なるがアレキサンダーと曰ひ、アブダルハミッドと曰ひ、兩つながら吾人の所謂善人なり、何となれば其私行は模範とするに足り、其禮讓は觀るべき者あり、其性質は身を殺して仁を成すの美德あり、而して其温恭なるは之に咫尺する者をして皆愛慕の心を生ぜしむるに足れり、アブダルハミッドは以爲らく、コーランの大義を實行するは神と人とに對する自己の職分なりと、所謂大義とは何ぞや、不信の徒に向つて回教、貢賦、刀

劍の三者を擇取せしむる事これなり、然れども、コーランの中には更に一條の聖訓あり、曰く、優力なる者に遇はゞ之に服すべしと、これ故に露土戦争の後、上帝は其領内の希臘教徒に直接の干渉を行ふ能はず、然るに小亞細亞に於てはアーメニアの基督教徒あり、彼等は國籍を有せず、領界を有せず、軍隊の後援を有せず、名義上土耳其に服従するも、其實一種の亂民にして革命者流の一協會は之を呼んで「ハントチャーリスト」と云ふ、其土廷との關係は基督教諸國をして絶えず問責の舉に出でしめ、事體は左まで重大ならざるも、土耳其は常にこれが爲めに悩まされたり、夫れ斯くの如し、回教貢賦、刀劍の舊典型を以て彼アーメニア教徒に臨むを得んか、土耳其政府たる者之に處する甚だ容易ならんとす、然るに如何せん基督教諸國は頻に改革を迫り、若し之に従ふときは回教の根柢を顛覆すべきことを、何となれば改革の結果、基督教徒は土耳其に於ける回教徒と同一の權利を享け、回教徒は此異端の者をして己れと同一の地位に立たしめざるを得ざるに至るべきが故なり、又従つて回教徒の兒童等は路上に於て基督教徒を見る毎に犬と呼んで之を辱しめし處、列強は併せて其禁制を求めたり、若し各國の公使にし

て其要求を遂げ、従つて條約の持續せられたるならんには、土人が基督教徒に侮辱を加ふる場合警察と法官との處分を免れざりしが如し。土廷が基督教徒に課せし所の貢賦(兵役免除税及び生活税と稱すべき者)は僻遠なるアーメニア諸村に於て殊に峻嚴を極めたり、然るに之より前、アーメニアの住民はその周圍なるカルディスタンの劫掠を免れんが爲め、其會長に賂を奉ぜしにより已に財源を窮竭せしを以て、土耳其のアーメニア人は最早土廷の誅求に應ずるの力なく、回教に従ふにあらざれば則ち甘んじて劍戟に繋るゝのみ、而して頭を回らし露西亞を顧みれば、アレキサンダーが猶太人、ルーテル教徒、スタン・ド教徒、メンノ教徒等の異端に對するも亦同一の政略を用ひ、彼等は國定の希臘教に歸依するにあらざれば則ち放逐を甘んぜざるべからず、然らざれば又苦迫を忍ばざるべからず。

露國の一書に云ふ、蓋し帝は善く事理を解し又頗る自制の人なりと雖、宛も「サル・フナル」の病に對して「ストリキネ」を用ふる藥劑士の如く、帝の自制は竟に其犠牲を救ふ能はず、而して最も忠厚なる人は反つて殘酷なる迫害を行ふ人となれりと。帝が露國の異教徒に處せる條規は一にして足らざるも、就中名門良家の特に苦痛を感じたる者は、即ち正教を奉ずる露人の外責任ある地位を授けざる事にして、鐵道事務の如き殊に然りとす。但し従前は波蘭人及びバルティク領より來れる日耳曼人は教育に於て智能に於て露人に勝れる所より其監視者となり、驛長となり、車掌機關士となりし者頗る多數を占めたるなり。

鐵道は都て政府の管轄する所なりしが故に、次第に自他同異の差別を嚴にし、終には是等の半外人を罷免して正教を奉ずる露人の爲めに位地を作れり。此交送の行はれたる最後の鐵道は「スモレンスク」の線路なるが、一八九四年露帝の乘れる列車を爆破すべき企圖を發見せられしは、即ち此線路なり。

右の藥穴の發見は偶然に過ぎざりしと雖、爾後探究の結果、此隱謀は一朝一夕の故にあらずして巧に思慮を運らせし者なる事を審にせり。而して多數の凶徒は盡く正教に屬する露國の鐵道官吏にして、彼等の職を得しは實に波蘭人日耳曼人が信用を失つて罷免せられしに由る、これ事實の證する所、明々白々復た疑を容れざりしかば、露帝の幻想は一旦にして破れ、終生の政略が全く水

池に歸したるや茲に顯然たり。これ帝に在て致命の打撃なり。幾多の外科醫は帝の遺骸に就て檢案を下し、其死因が急激なる生理上の作用に在る事を世に公せしと雖、これ其道德上の原因を云々するが如きは彼等の分内にあらざるが故のみ。蓋し其崩前數ヶ月の間に於て之を視察するの機會を得たる人は、帝が道心の呵責を受けて苦惱の劇じかりし事を看取せり。而して其原因はソレモンスク隱謀と、之に關聯せる事情との發見に因り幻想の破壊したるに在りと斷言するに憚らざるなり。プラックウィード雜誌

抑、帝が無上の善意を以て經營せし事業は全く失敗に終り、然しその善意なるものも之を上帝に質さば或は不善を免れざるやの疑あり。其垂死病中床上に身を横へて往事を追想せし有様は、如何に悲惨なりしか想見するに餘あり。

帝の病革るや、特に最初の陸軍大臣ミューリヤイン(帝の踐祚より間もなくロリスメリコフ内閣に於ける自由主義の同僚と共に罷免せられたる人なり)を召し長時間談話せられたりと云ふ。若し帝をしてなほ天壽を有せしめたらんには内治外交の政略一變せしやも亦知るべからず。帝は又皇子ニコラスとも長時間情話を

交へられしが、帝は眼目前に皇子が結婚して家庭を作ることを見んと欲するの情願る切なりき。

從來露國の君主は、戴冠式を擧げ併せて神聖正統露國教會の教皇たる格式を授けらるゝまでは、皇帝の資格を全うしたる者と謂ふを得ず。而して露國の教律に於ては凡そ教皇は必ず既婚の人ならざるべからず。

皇太子ニコラスの東方漫遊以前、父帝は之に向つて速に結婚すべき由を懇諭せられしも、右は極めて皇太子の意に反せるものにして、此時に方り皇太子の懊惱は察するに難からず。何となれば之より前、父帝の爲めにその情人との愛着を絶たれ、離別の恨なほ新なればなり。既にして太子東方より歸つて未だ幾何ならず、ゴサに於て従妹マリイとルーマニア王嗣との婚儀あり。此際太子は其再従妹なるヘセダームスダットのアリキス公主と會見するを得たるが、公主は叔母大公爵夫人マリイが英のサクスコイブルグゴサ公に嫁せし關係よりして太子の姪に當れり。公爵夫人は從來情事の媒合に經驗あり。然るに太子が公主の秀美にして嚴威あり、總瑟にして善良なるに多少心を動かしたるを見、全力を用ひて伉儷を

成すことに周旋せり。

アレキサンダー三世は臥病の初、太子がアリキス公主に眷戀してモンテネグロのニレナ公主を娶る意なきを知りしかば、太子に諭して親しくアリキスをダームスタットの居宅に訪はしめたり。但しニレナは正教の信徒なりしかば、何人も太子の地位上より最も適當なる配遇なりと思惟せざる者なかりしなり。

露西亞の皇嗣がアリキス公主の歡心を得んが爲めにダームスタットに赴きたるは輕浮心に出でたるにあらず。然れども其嫵媚なる風情と端莊なる舉動とを觀ると共に、改宗に就き獨り自己の良心に謀らんとするの決心堅固なるを知るると共に、頗る其心を動かし切に結婚の承諾を求めたるが如し。太子と公主とは直ちにダームスタットの地に於て約束を結びたるも、右は條件附帶の約束にして、アリキスが全然正教に歸するを待つて確定すべき都合なり。第二の手續はアレキサンダーがアリキスを其病床に召致して謁見を賜ふ事なるが、これ何れの點より之を觀るも新婦たる者に取つては、廢舉用舎の試験場なりと謂ふべし。アリキスは己れを推薦せし人々の意に副はんと欲せり。太子の希

望を遂げんしめんとするの感情は極めて切なりしなり。唯改宗の要求に關する或る條項を諾するを得べきや否に至つては自主する能はざる所あり。然れども究竟其良心の限界を出づることなくして、毅然たる正當の觀念と、之に伴へる蕩然たる憐愛の情性とは、公主を知れる者をして贊嘆せしむるに至れり。

アラウカワード雜誌

父帝アレキサンダー三世は、太子が他日皇帝として繼承せざるを得ざる責任と困難との如何なるべきかは、姑らく之を置き、其室家の前途幸福なるとはなほ己れの如くなるべしと推斷し、心穩に崩御せり。崩御の地はクリミアの東岸なるリヴァディアにして、之より前帝が駕を此處に移せし所以は、露西亞人が或る季節に於て療病に効驗あることを信じ、頗る著名の處なりしが故なり。太子が父帝に崩し、萬機の責任を自覺するに至り、頓に性行の一大變化を致し、從來は極めて快活にして、眞率なりしもの、茲に至つて嚴肅となり、沈黙となり、小心となり、右左の者一見して其大に前日と趣を異にするを覺えたり。

皇太子ニコラスアレキサンダーは、一八九五年十一月一日を以て露國

本屬全土の帝位に即けり。時に歳二十六、其體質の甚だ強壯ならず、骨格に至つても其父帝の堅實なるに若かず。然れども其品性は尊ぶべく、其氣質は親しむべし。幼にしてガチナの庭園に鞠育せられしが、これ皇族の團樂せし處なり。但し此處に於ける皇族の生活は富裕なる貴族よりも寧ろ富裕なる中流社會に近く、而してアレキサンダー帝は此幼冲の皇子に課するに艱苦の體認を以てせり。然るにニコラスは生來母后の羸弱なる資質を受けたるが故に、斯くの如き教育は實に過重と謂はざるを得ず。抑、露國の舊慣に據れば、大公爵及びその他豪貴の家事すらもなほ之を公にする能はざるに因り、ニコラス早年の事實に關しては吾人の知る所甚だ罕なり。聞くが如くはニコラス嘗て英國の一女師に従ひ、其指教に因てスコットの小説に通じ併せてディッケンズの著書に及び、又已に長じて後、卓越完成の英國教師を聘して學問を講ぜしも、父帝の希望せし所は皇子が何事よりも露西亞人として教育を受くるに在り。是に於て皇子の十八歳に達するや、將軍ボグダノヴィチを以て保傅に任じ教師に充てたりしが、將軍は知識に於て儀容に於て前者に勝りしかば、皇子は深く傾倒して、薰陶に化する狀ありしも、將軍の師道を執る嚴酷に失したるが爲め、其性質に至つては反つて將軍の意の如くならざりしと云ふ。

初めアレキサンダー第三世は毎年后妃と共にコーペンハーゲンにザリシナの父母を訪問せられしが、これ皇室一家遊息の時期にして、童兒の如きは皆樂んで其時を待ちしなり。

皇太子ニコラスが初めて宮廷に他の皇族と周旋するの許可を得るや、自ら務めて己れが虚弱なりとの威觸を除き去らんと欲したることは、其逸事に徴して之を知るを得べし。其初めて宮中の舞踏會に加はりし時、一女子と、ウアルツを舞ひ其失神するに至るまで氣力を竭して跳躍せしが、其終るや之に席を與へて曰く、卿よ願はくは斯くまでに卿を疲勞せしめたる罪を恕せよ。余は唯露國の皇太子が氣力を有することを示さんと欲せしに過ぎずと。

此時に方り、パンストラヴィズムハラツ合統一主義は露國を風靡せしも、皇帝は之を喜ばざるのみならず、時あつてか隠謀若くは虚無主義と關聯せしかば、之が徒黨は始らく其意見を匿し、皇帝と警察との目を偷みて密に運動に従事せり。

蓋し「パンヌラツ」の目的とする所は、スラツ民族を擧げて之を一大帝國に糾合するに在り、然るにアレキサンダー三世は僅に二十四種の人民、邦國、言語を露化するの志を抱きしに過ぎず。

「パンヌラツ」黨の領袖は幾多の手段に依り終に能く同志の徒をして太子の前後左右に侍せしむるを得たるが、彼等は陽に陰に其主義を鼓吹して太子の心を動かさんとせり。幾許ならずして妄誕なる外國新聞紙の通信員は、太子の同情を寄せたる虚無黨の一大隠謀が發覺したる事實を暴露せり。右は全く虚構に出でたる事なりしと雖、父帝の之を聞いて怨恨苦悶に堪へざりしは固より當に然るべし。殊に當時會、太子が情人を作りしと報ありしかば、帝の痛心は一層甚しかざるを得ず。

茲に太子の眷戀せし婦人は「バラ」の名劇の舞妓にして、其父はアレキサンダー三世が毎に憎惡の極、殘虐を行へる所の猶太民種に屬せり。但し此少女は姿色徳操兼ね備はり又頗る聰明りき、而して太子も亦嚴格の教育を受けしのみならず、自身徳性を有せしが故に敢へて野合に類する情好を結ぶの念なく、必ず婚禮を行

はんと欲し、父帝に請ふにアレキサンダー一世の同胞なるコンスタンティン大公が「ヂャッター」グルーヂンスカを娶りたる先蹤の如くせんことを以てして曰く、若し此結婚の許を賜はるを得ば帝位の繼承權を辭するも憾む所なしと。蓋しこの准許を経ざる以上、露國の教主と雖皇族の結婚をして法律上正當の者たらしむるを得ざるなり。父帝は太子に訓示せらるやう、此願は到底許可するを得べからず。皇弟「ジョージ」は肺疾なるが故に、太子皇位を辭すればとて代つて讓を受くべきにあらず。則ち太子は其切なる愛戀の情を絶ち、國家の爲めに其宜しく娶るべき者を娶らざるべからず。而して父帝の第一に出づべき處置は、この互に綱繆せる男女の情緒を剷斷するに在り。然るに之を遂げんと欲せば時日距離、再思、分離より生ずる所の結果に待たざるを得ず。然らば則ち之を海外に遣るの外良策なきなり。

是に於て帝は太子に命じて東方に遊ばしめたり。遊歴の紀行は後日希臘の公子「ジョージ」と共に太子に隨行したる「オクトムスキー」之を公刊せしが、一行が日本に到着せしまでは普通の世界漫遊者の見聞する所と別に異りたる者なかりし

なり。而して一行が日本に於て遭遇したる事件に就ては二種の文書を抜萃して其顛末を示さんとす。但し一はジョージ公子が其父なる希臘王に呈せし書柬にして、一は日本よりの書柬と題せる興味多き冊子なり。これはユー・フレール夫人の著はせる所にして、夫人はエフ・マリオン・コロフォルドの姉妹に當る。

一行は日本の故都なる京都を訪ひ、其午前大津に遊び知事と午の小食を終り京都に還せらんとせし處、此地方に於ては普通の馬車を手に入れ難かりしかば、人力車に乗つて出發に及び、雜沓せる市街を通過せしに、路の左右には巡查列を成して非常に備へたり。蓋し當初日本の皇帝は露國公使館に對し太子の安全に就て親しく保證を與へて曰く、朕は貴國皇太子の來訪に對し親しく責任を負ふべく、其身上の神聖なるは尙朕の如くなるべく、朕は朕の名譽を以て皇太子の安全なるを保すと。

左の記事は公子ジョージが一八九一年五月十一日の事件に關して乃父に報じたる文意なり。

一行は國旗を飾りたる狭き街路を通行致し候處、兩側には傍觀人群集致居候。

自分は左の方を眺め居り候ひしに、突然前の方にて何か叫ぶ様な聲を聞き候故見向き候へば、何ぞ圖らん一人の巡查兩手に劍を握りニコラスの首に一撃を加へたる一刹那に有之、ニコラスは人力車を飛下り、巡查は之を追駆け候が、ニコラスの面上には鮮血漲るやうに流れ居り候。自分は此有様を見るや否やステッキを携へながら車より飛び下り、巡查の後より疾走致候。其時彼と自分の距離は十五ヤード位と覺え候。ニコラスは一軒の店に飛込候得共、間もなく復び取て返し候爲め、巡查に追附かれ、危機一髪の折柄、天祐なるかな宛も自分が其場に駐附けたる瞬間の事とて、巡查が一刀を振上げ居る處をばステッキにて一つその面上を堅に擲りつけしが、餘程酷く打ち候事故、恐らくは彼が生來殆ど覺えざりし程の痛を感ぜし事と被存候。彼は今度自分の方に向ひ候得共、最早瞑眩して氣力も衰へ地上に倒れ候。兎角致し居る間に二人の人力車夫出て參り、一人は彼の兩脚を押へ、一人は彼の地に落し置きたる刀を取り上げ、頭の後部に斬附けて傷を負はせ申候。自分が其場に到りあうせたるも、自分が痛撃を加ふる丈の力を生じたるも、これ偏に神の仕業と申候外無之候。之を如何

にと申すに、若し自分が少しにても後れ候ひしならば、逦査はニコラスの首を斬放したるに相違なく、又若し自分が凶漢の頭を打損ぜしならば、必ず自分の首を取られたる事と存候。一體此變事は如何にも咄嗟の間に起り目にも留らぬ位にて、自分の背に居りたる人々は殆ど何事をも見ざる中に濟み申候。夫れよりニコラスの坐り候處を醫士のブラムバック出來得べき丈綑帯を施し、其以前に召び寄せ置きたる兵隊此處より護衛に及び、知事の家まで立戻り候。茲にて尙緊しく綑帯をなし、自分等は一時半計り知事の家に留り申候。自分はニコラスの剛氣なるに威服致したる事を申上ずしては己み難く候。それは耳の上にて二ヶ所の大傷を受け候にも拘はらず、一度も氣絶せしことなく、又暫時の間も持前の善心を失ひ不申候故に御座候。扱其傷は一方五センチメートルの長にて、一方は六センチメートルに達候。

兇行の逦査は津田三藏と云ひ以前軍曹を勤めたる事あり、功勞を以て勳章をも授けられ頗る信用せられたる者なり。彼は日本に於て外人排斥、殊に露國人を嫌惡せる一種の黨類に屬せり。此徒は露西亞が樺太を獲たるを不義なりとし、從つ

て露人を敵視するも、其實樺太は露國が當然條約に據り千島と交換したるのみ。蓋し彼は瘋癲病の血統を有するが上に、狂信の爲め一時激昂して此舉を敢へてするに至りしなり。

太子の鹵簿の中には知事及び他の官吏と共に露國の公使並に總督あり。京都府知事の宅まで歸館せらるゝに當り、途上車を疾驅すべき事を主張せり。これより前事變の起るや否や、公使は憂慮措く所を知らず、太子がかの店中に立ちたる時號泣して太子の脚下に身を投じたるに、太子は扶けて之を起し、決して心配するに及ばず、只血のみにて余は眞に傷を負よて在らぬなりと。

東京の露國公使館に於ては、翌日皇太子を奉迎せんが爲め大宴會の準備中、此變報に接したるが、第一着の電信には、頭部に二ヶ所の深き傷あり、治療覺束なしと云へる文句あり。

フレゼル夫人は取る物も取敢ず公使館に馳附け、其目撃せし様を記して曰く、暴徒の起りたるにはあらざるか、太子に陪從せる公使は無難なりしや否や、何人も之を知る者なかりしと雖、余は實の處、縱令公使が殺されたりとするも其

夫人と令嬢、此氣の毒なる兩婦人は決してこれ以上の苦悶をなす能はざるべきを信ず。余は初めて忠君の何たるを知れり。其熱情の激せる、或は他人種の血を瀝し、或は其君主若くは皇族に危害を加ふるに至る事を知れり。吾二人の友は變報の爲めに一時殆ど身を伏して昏絶せしが、これ余が公使館に至れる二時間以前の事にして、彼等は泣きに泣きて復た泣く能はざるまでに泣き續け、快活可憐なる少女のヴェラエスは室中を駆け廻り、我殿下よ神は殿下を恵み玉ふと嗟歎しつゝ絶叫せり。余は信ず。若し此母子が己れの生命を棄て、太子を救ひ得べき場合に於ては、必ず喜び進みて死に就きしならん。然るに茲に一人太子を助けんと欲するも、兇漢を討せんと欲するも自由を得ざる人あり。日本の皇后は物に動し玉はず、而も幽閑の徳を具へ玉ひ、御經歷より來れる體領と御地位に因れる靜淑とは何れの場合にも見はれざる事なかりしも、此夜に限りては室内を彷徨し玉ひて悲哀の涙に咽び玉へり。彼等の語れる所に據れば、氣の毒なる母君よ、太子を見玉ふ事叶はず、氣の毒なる母君よ、如何にして君をば慰め申さんと、繰り反しては泣いて啣ち玉ひし由、是に於て露國の皇后に

電報を發し玉ふこと引きも切らず、悲痛極りなき同情を寄せられ、太子には母后が親しく附添ひ玉ふと同様なる介抱をなし申すべしと約し玉ひぬ。太子の舉措は終始皇族たり貴顯たる所以を失ひ玉はず。語調と云ひ態度と云ひ、毫も恨怨を留めたる痕跡なく、已にして父帝の命により、母后の願に出でたりと云ふ。日本の遊歴を中止し、養生の爲め自國の軍艦に乗らるゝや、務めて好言を用ひて事體の平穩を謀り、且つ日本の皇帝に對して深く其好意を謝し、健康の都合により一日も早く歸國する事に決したる爲め、東京に至り御訪問を致すを得ざるは遺憾の至なりとの旨意を申送られたり。國人の痛恨は極めて深く、且つ遍く、劇場は閉鎖し、商店は休業せり。皇帝は太子の安全に對して陛下の名譽を捧げ玉ひ、凡そ警戒の手段は一として用ひられざるなく、殆ど周到を極めたりと謂ふべし。然れども皇帝の貴賓が危害に罹りたる事は、竟に國辱の威を免れざりしなり。人民は力の及ぶ限り太子に對する同情を表せんと欲する者夥しく、全國より奉獻の物品は舟中に充滿して餘地を留めざるに至れり。即ち貧民は瑣細なる物を奉らんとて、爲めに數日の上作を厭はず、富人

は敬愛の意を表せる文意を以て貴重なる財寶を奉れり。兇行を逞うせし所の無殘なる狂人は今尙生存するなるべし。日本の皇帝は速に津田三藏を死刑に處すべき由を判事に命じ玉ひしに、判事の奉答に曰く、陛下が近く憲法を立て玉ひたる事は陛下の記し玉ふ所なるべし。而して犯罪の審理と刑罰とは必ず法律に據るべしとは憲法に定めし所なるが、斯くの如き事件は法律に豫定せざりし者なれば、小官は普通の毆打創傷犯に據つて之を罰するの外なし。叢旨を奉ずる能はざるは恐惶の至に堪へずと、三藏は禁錮の刑に處せられんとせり。皇帝は震怒あらせられ、津田三藏は死刑に處すべし。直ちに執行に及べと宜ひたるに、判事は毅然として奉答するや、願はくは陛下臣等の職を免じ、更に憲法に従つて法律を行ふ事を誓はざる者を擇びて聖旨を奉戴せしめ玉ふべしと。皇帝は終に彼等の言の至當なるを覺り之を嘉納し玉へり。茲に於て津田は禁錮十年の刑に處せられたるが、知事と警視總監とは皇太子の安全を必ずすべき責任に當りたる理由を以て免職せられたり。

皇太子は軍艦に乗り歸航の途中偏に療養を懈らざりしが、此舟は一ヶ月の後浦港に達し、茲に太子は西比利亞鐵道東方支線の隅石を安し、河蒸汽及び他の交通機關に由つて西比利亞の中央を横斷し歸京の途に就かれたり。西比利亞の地たる廣漠無邊にして氣候一ならず。從來ローノフ皇族は一人として此地に至れる者なく、殊に代々露帝は全く等閑に附したる爲め、内外の官吏も西比利亞に就ては懈怠を極めたり。蓋し西比利亞人は人種に於て、言語に於て、風習に於て、歐洲の露人と同一なりしも、自ら一種稍異りたる所あり。これ地方的自負心の由つて生ずる所の者なり。而して土人は政府の常に怠慢なるを見て一方ならず不快の感を抱きしなり。

他日帝位に登るべき年少の皇族は西比利亞に臨啓せられ、大鐵道の布設を約し玉へり。人民は之を聞いて手の舞ひ足の踏むを知らざる。猶三十年前ムラヴィエフが黒龍江の初めて航通を遂げたる事を報告せし時の如く、凡そ皇太子が西比利亞に到りし當時の如く、至深至厚の熱情を以て新來の人を歓迎したる事は、古來未だ曾つて有らざる所なりと謂ふも、豈に誇張の言ならんや。太子の

通過せる都市は到る處に凱旋門を設け、コサック兵は太子の乗れる小艇の通過せるを見て嵩頭に登つて萬歳を叫べり。ニコラス二世は露帝の中初めて其版圖の廣大なることを實驗するの機會を得たる人なり。初めて帝國當行の實務を解したる人なり。其人民に及ぼす所の勢力を識別したる人なり。一別以來久しく相見ざりし皇太子が歸國に及びたる時、兩宮の歡喜が如何なりしやは無作法の新聞通信者も宮廷の内事にまでは立入らざりし爲め之を知るに由なし。而して太子はこれより公務に與り、備荒救濟の委員長となり、既設又は設計に繋れる大鐵道の事に就て重要な局に當り、併せて自己身上の事を處理せり。皇子がアリキス公主の愛を買ひ、遂に合歡の願を遂げたる事は已に述べたる所なるが、アリキスは英國公主アリストヘンゼ、ゲイムスタットの季女にて、アリキスの人となり、生きては人の慕ふ所となり、死しては人に哀まれたるを以て之を知るを得べし。彼女の死因は其兒女のジフテリアに罹り看病したる爲め、病毒の傳染せしに在り。他の一女なるユリザベスは曩に英の皇族に嫁し、夫はセルジヤス公にしてニコラスの叔父に當れり。然るに此抗儂は甚だ幸福ならざりしが如し。

露西亞の新皇帝が初めて其臣民に下せる勅語は、父帝の崩後間もなく發布せられたる宣示なりとす。

此悲痛にして莊嚴なる時に當り、われ祖宗の踐みたる露西亞皇帝の位に即き、併せて波蘭の皇帝と芬蘭の太公國に君臨す。われ先帝の遺詔を奉じ、遺志に従ひ、恭しく上帝の前に誓ひ、常にわが眷愛する露國の平和なる、進歩、勢力、光榮並にわが忠誠なる臣民の幸福を以て一生の目的となすべし。

獨逸皇帝はステッテンに於てニコラス二世即位の報に接し、其守備軍の將校に語つて曰く、ニコラス二世は父祖の位を繼ぎたるが、これ各國王統の中に於て最も厄介なる相續なり。吾人は共に神に祈りて、彼が新に負ひたる重任を全うすべき氣力を附與し、玉はんことを願はざるを得ずと。

ロバノン親王はプロウツに語つて曰く、露西亞皇帝のなすべき功課たる如何に大なる力量、如何に深き智慮を具ふる者なりとも、一人の精力にては到底堪へざる所の者にして、何人もこれが爲めに斃れ了るべし。アレキサンダー三世はその職責に銳意なる所より、其功課を完成せんと欲し、往々夜間二時若

くは三時頃まで几案に倚り、然る後疲勞の餘り臥褥の上に打倒れたる事あり。帝が尙春秋に富める年を以て崩ぜられたるは、全く過度の勞苦に因る者と思はるゝなり。

先帝の大葬終ると間もなく、アリキスは正教の高貴なる僧侶より周到なる指圖を受けたる後正教の神餐式に臨み、アレキサンダー・フィドロツナの名を命ぜられたり。アリキスは露國の法律上、新名の上に外國人なる父親の名を附する能はざるが故に、他の公主にして宗旨を變更したる上露人なる夫の名を用ひたる者と同じく、聖徒フィドロの特別なる保護の下に置かれ、父名襲用の規定に因つて彼の名を冒せしなり。

幾くならずして新帝とアリキスとの大婚は舉行せられたるが、其儀式は甚だ華美ならざりき。蓋しニコラスの宮廷は慶吊變轉殆ど急忙を極めたりと謂ふべし。何となれば僅々一年を出でざる中に先帝を葬れり。婚禮を行へり。帝位に登れり。人の父となれり。露國の上下が望みたるは皇子なりしも降誕に及びたるは皇女にしてオルガと曰ひ、其後又二皇女を擧げられたり。ヴィクトリア女帝は人の結婚

を圖ることを樂まれしが、バルモールに在りし時、稱氣掬すべきのオルガがヨルク公の嗣子エドワルドと遊戯せるを觀て、此小兒時代の親交が他日の愛戀に歸着せんことを望まれぬ。

ヴィクトリア女帝はニコラス帝の結婚以來之を愛孫と視做されしが、これニコラスの皇后は女帝が最も鍾愛せし早逝の皇女が生みたる所なればなり。是に於てニコラス帝も亦女帝を敬慕し、或る時の如き對英問題に就き内閣諸相の意見を排し、祖母君を惱すべからずと言ひし事あり。

露帝は皇長女の降誕を機として大赦を行ひ、其中には罪狀の如何により嚴刑輕減の恩典をも含蓄せり。大赦の及びし所は政治上宗教上の犯罪、及び普通の刑事にして政教二種に限り、曾つて道徳上の犯罪なき以上は盡く放免せしが、當時十年禁錮の刑を免れ、或は全く自由を得たる者二萬人に達せり。

これを除くの外露帝は速に政事上の變更をなすの意なかりしかば、國會政治を期待せし者は勞失望を免れず。蓋し帝の憂慮せし所の者は他なし、遽に國會政治を無智の人民に施すも其効なく、反つて偽政治家に利用せらるゝ恐あればなり。

試に看よ、英國議會の紛擾なる、これ其困難の原因は、一に人種の複雑なるに在らずや。伊太利は如何、兩シシリ、舊王國の人民は己れより良實なる。ロム、バルヂ、及ビタスカニ、人と議會に抗爭することを以て定規となすにあらずや。露帝は必ず之を察したるならん。又日耳曼の政治家が帝國議會に於て波蘭の議員を操縦するの容易ならざる、英國の下院に於ける愛耳蘭議員の煩累なる、これ亦露帝の必ず熟知せし所ならん。而して佛國の議會の如きは最も露帝をして反對の意見を抱かしめたるに相違なし。余は米國の議院に關しては敢へて言はざるべし。但し米國に在りては人民が議院の多數に由り統治を行ふの制たる、未だ憲法制定の期待せしが如く諸國民全體の模範たることを得ざるなり。然りと雖露帝は芬蘭、バルヂ、地方、波蘭等より來れる代議士を慰諭して曰く、朕は卿等が各、信奉する宗教の如何に由つて偏頗をなさざることを保す。朕の臣民は都て朕の一視同仁する所なりと。是に於て從來波蘭を治むるに峻嚴の政を以てしたるゴルゴ、將軍は其職を免ぜられて新總督之に代り、其赴任するや帝は寛政を行ふべき旨を訓令せられたり。但しゴルゴ、將軍の二十年前に於ける戰功

は極めて偉大なりしかば、叙勳昇級の恩命を拜するを得たり。而して羅馬法王と協商の結果、猶太人に施せる拘束の若干を除き去れり。皇長女の生誕ありし時、帝はブレベード、ノッソフに命じ、バルチク地方に慣行せる宗教迫害の政略を弛めたり。氏は露西亞正教宗會の「プロキニョートル」たる資格を以て内務卿に公文を致して曰く、正教の興隆と西疆人民の同化とは已に満足なる成績を得たるが故に、最早政府は此事業を扶殖する爲めに非常の方法を用ふる必要なく、従つて内務卿閣下は今後斯くの如き處置を慎まらるべしと。皇帝と皇后との即位式は五月二十一日と公表せられたり。而して其壯麗光華、従つて費用の夥しかりしは固より言ふまでもなき事なるが、唯其大禮たる區々の儀式に止らず、其宗教的の性質は影響する所頗る著るしく、參列の貴紳は更なり、全國民をして深く感銘せしめたり。余は十九世紀の露西亞及び土耳其に於てアレキサンダー三世即位の光景を十分に叙述したれば、今やその皇子の場合に臨み、殊更に之を省略せり。當時現狀を目撃したるリシャード、バルヂ、デヴィスは寫實畫の如き麗筆を揮ひ、千萬管なら

ざる群集がモスコイ府の狹隘なる市街に充溢したる模様を叙せり。参列者の中に於てポアヂーフル將軍の如きは著るしき人物の一に數へらるべし。彼の人となりは現在世界の熟知する所なり。

佛國は露國との同盟に熱中の餘り、共和國の贈物として盛典を飾らんが爲めに百萬フランを票決せり。これ偏に金力を以て他の方面に於ける缺點を補はんとせしのみ。

然れども大統領フォルに在りては、人民が露帝を以て地球上唯一の教主として之を歓迎せしが如き尊敬心を有せざりしなり。而して狂妄なる虛無黨の群集中より蹶起するが如き事なかりしは幸と謂ふべきも、當時巡査の警備はアレキサンダー即位の時に比して大に及ばざるが如くに見えたり。

函簿の通過に際し群集が最も熱情を表したるは、帝の生母なる太后ザリナの御駕に咫尺したる時なり。これ太后が平生人民の爲めに許多の慈善事業を行ひたるに由る。

已にして儀式の次第に進行するや、街上數千の人衆は一齊に跪き、高聲を揚げて

聖母教院内の参列者と同音に頌歌せり。

皇帝は初め單に陸軍大佐の正服を着け、長靴に綴附けたるツボンを穿ち、勳章は帯び玉はず、式場の陪列者につて最も偉觀なりしは、皇帝の最近親が皇袍及び各種の高貴なる勳章を皇帝の身に被らせし時にして、次には皇后の身に就て同様の式あり。曩に皇后が拜堂に入られし時、堂中の凡ゆる婦人中最も素服を着け玉ひたるが、堂中の凡ゆる婦人中最も美麗なりしとは拜觀人の語れる所なり。已にして皇后は兩腕を露はせる儘之を合せて皇帝の前に跪き、皇帝は大教正より授けられたる寶冠を取つて吾頭に戴きたる後之を捧げて暫らく皇后の額に當てられたるが、此時皇后は少からず感動せられぬ。

右畢つて参列の各皇族、大臣、高僧、顯官等は順次にプラットフォームを過ぎて祝賀の禮を行ひ、一同皇帝に對しては其頬に接吻し、皇后に對しては其手に接吻せり。其中に於て皇后の頬に接吻せし者は英國を代表せるコンノート公のみ。但し公は皇后の叔父に當りし人なり。

此式も已に終るや、一層神聖なる灌油式の舉あり。之は皇帝に僧侶の資格を附し